

大館市文化財調査報告書 第15集

## 大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)

2019

秋田県大館市教育委員会

大館市文化財調査報告書 第15集

## 大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)

2019

秋田県大館市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、大館市教育委員会が実施した市内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は、文化財保存事業補助金を受け、第1章に記した体制・期間で実施した。
3. 本書の作成にあたり、遺構図および試掘確認調査位置図等の補正・トレースは、高橋光大が担当し、遺物実測・トレースは整理作業員が担当した。なお、遺物実測については山田勇治、遺物トレースおよび挿図作成については田中優美、挿図作成については関文人（研修員）、古田美紀子の協力を得た。また、室内での遺物写真撮影および写真処理は株ワールドプラン社に委託した。
4. 木製品の樹種同定・保存処理を株吉田生物研究所に委託した。
5. 本書は、滝内亨（歴史文化課主査）、鳴影壯憲（同主査）、馬庭和也（同主任主事）が執筆し、鳴影が編集した。執筆分担は以下のとおりである。  
第1章、第2章1・2・6～13・15～20、第3章、第4章…鳴影  
第2章4…滝内  
第2章3・5・14…滝内・鳴影  
第2章21…馬庭・鳴影
6. 本報告書に使用した地形図は、秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（北秋田地区版）』、大館市発行の「都市計画図1/2,500」である。
7. 本調査で出土した遺物並びに記録類は、大館市教育委員会が保管している。
8. 大館城跡確認調査にあたっては、弘前大学人文社会科学部関根達人教授から御指導を賜った。
9. 大館城跡出土陶磁器については関根教授の鑑定を受け、瀬戸・美濃産陶磁器の一部については愛知学院大学文学部藤澤良祐教授、肥前産陶磁器の一部については佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二名譽顧問の鑑定を受け、土飛山館跡出土鉄関連遺物については製鉄遺跡研究会代表穴澤義功氏から整理指導いただいた。ただし、記述については鳴影に責任がある。
10. 調査および報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導、御協力をいただいた。記して感謝申し上げます（五十音順、敬省略）。

秋田県北秋田地域振興局農林部農村整備課、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室

秋田県埋蔵文化財センター、大館市建設部下水道課、大館市産業部商工課、大館市産業部農林課

大館市消防本部消防総務課、大館市総務部企画調整課、大館市総務部総務課、株式会社アイムワン

株式会社伸和商事、株式会社丸茂組、社会福祉法人大館圏域ふくし会、社会福祉法人比内ふくし会

セキスイハイム東北株式会社秋田支店、東北電力株式会社、弘前大学北日本考古学研究センター

水土里ネット大館南、有限会社小笠原測量設計事務所、有限会社成田組、有限会社吉田興業

横手市教育委員会

赤上 均、穴澤義功、飯村 均、五十嵐一治、板橋範芳、大橋康二、片岡太郎、小山美紀

白石睦弥、関根達人、鷹嘴勇二、高橋 学、羽柴直人、藤澤良祐、緑川正樹、八重樫忠郎、谷地 薫

## 凡　　例

1. 本書遺構図等における各基準は、下記のとおりである。なお、その都度スケール・方位・凡例等を示す。

### 略記号・縮尺

調査位置図	1 : 1,500	1 : 2,500
土層柱状図	1 : 40	
土壘	S A	1 : 40
土坑	S K	1 : 20
溝跡・堀跡	S D	1 : 40
柱穴・柱穴様ピット	S P	1 : 40

なお、調査位置図において、テストピットは番号のみを付し、トレンチは番号の前にTの記号を付して表記した。

### 図の方位

真北は図面天方向に合致する。例外はその都度方位を示す。

### 遺構図等の標高

遺構図・土層柱状図の標高値は海拔高度による。単位はメートル。

### スクリーントーン

遺構平面図の柱痕跡　網目

### 遺物の実測図および写真図版の縮尺

土器、陶磁器、礫石器、石製品、土製品、木製品実測図	1 : 3
剥片石器、磁製品、金属製品実測図	1 : 2
土器、陶磁器、礫石器、石製品、土製品、木製品写真	約 1 : 3
剥片石器、磁製品、金属製品写真	約 1 : 2

2. 本書に掲載した遺物の分類基準は、大館市文化財調査報告書第11集に準拠する。なお、同報告書では7群土器を土師器としたが、古代の土器全般と変更する。また、本書では、木製遺物と金属製品を新たに設定した。近世の陶磁器・土器等の器形分類や個体の定義名称は『内藤町遺跡』(新宿区内藤町遺跡調査会編 1992)に、陶磁器の集計方法は『松前町 福山城下町遺跡』(鈴木 2012)に、瀬戸・美濃産の時期区分は藤澤編年(藤澤 1986・1991)に、肥前・肥前系の時期区分は『肥前陶磁』(大橋 1989)、『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会 2000)に従った。

本書に掲載した遺物の分類基準の概要は、以下のとおりである。

### 土器 (P)

#### 3群 筒形土器群

縄文時代前・中期に位置する円筒土器類の土器群。

#### 4類 円筒下層d式

#### 5群 縄文後期～晩期の土器群

#### 6群 弥生・続縄文期に属する土器群

#### 7群 古代の土器

#### 1類 須恵器

2類 土師器  
8群 中世以降の陶磁器・土器  
中世以降の陶磁器・土器。  
1類 磁器  
2類 陶器  
3類 土器  
石器・石製品 (S)  
1群 石器・石製品  
3類 ナイフ・スクレイパー類  
4類 部分的な刃部をもつ剥片類  
6類 擦石・敲石類  
7類 砥石・石皿・台石類  
2群 剥片  
3群 石核類  
4群 碓類  
土陶磁製品 (C)  
金属製品 (I)  
木製品 (自然木も含む) (W)

## 目 次

例言 .....	i
凡例 .....	i
目次 .....	iii
第1章 事業実施の概要 .....	1
1 調査の目的 .....	1
2 調査要項 .....	1
3 調査の方法 .....	4
第2章 大館地区の調査 .....	8
1 沢口II遺跡隣接地 .....	8
2 大館城跡① .....	12
3 上川沿地区 .....	51
4 土飛山館跡① .....	67
5 土飛山館跡② .....	71
6 大館城跡② .....	79
7 林ノ上遺跡隣接地 .....	82
8 川口地区 .....	84
9 花岡町地区 .....	87
10 大館城跡③ .....	90

11 大館野遺跡	93
12 釈迦内古館跡	96
13 雪沢地区	100
14 大館城跡④	102
15 釈迦内館跡	111
16 大館城跡⑤	118
17 花岡城跡・神山遺跡	121
18 金坂遺跡	124
19 大館城跡⑥	127
20 扇田道上遺跡隣接地	131
21 小館町遺跡	134
<b>第3章 比内地区の調査</b>	<b>137</b>
1 長岡城跡	137
2 比内町独鉛地区	147
3 真館II・III遺跡	150
4 片貝遺跡隣接地	165
5 大岱遺跡隣接地	168
<b>第4章 田代地区の調査</b>	<b>172</b>
1 大川目元渡遺跡隣接地	172
2 菅谷地遺跡	178
3 みのり台遺跡隣接地	185
<b>引用・参考文献</b>	<b>188</b>
<b>付編 大館城跡の自然科学的分析</b>	<b>189</b>
1 堀跡3出土木製品樹種同定報告	189

# 第1章 事業実施の概要

## 1 調査の目的

大館市内には、現在 291 箇所の埋蔵文化財包蔵地（以下「包蔵地」）が確認されている。大館市教育委員会は、平成 15 年度より文化財保存事業補助金を受け、市内の包蔵地の所在・確認調査を実施している。これまでの調査で近い将来に開発行為が予定される 33 遺跡 35 地区、延べ 73 箇所について調査を実施し、遺跡の把握に努めてきた。

今回（平成 26～30 年度）も引き続き、土地所有者の協力を得られた次項の遺跡、地区について、埋蔵文化財の有無等を把握するため、調査を実施した。調査を実施した地区的遺跡名、所在地、調査面積、調査期間等は表 1・2 に示すとおりである。

## 2 調査要項

### (1) 調査体制

#### 平成 26 年度

教 育 長	高 橋 善 之
教 育 次 長	大 森 公 咲
生涯学習課長	菅 原 悟
生涯学習係	滝 内 亨（上川沿地区調査担当）
郷土博物館長	若 宮 司
文化財保護係長	岸 国 也
文化財保護係	嶋 影 壮 憲（調査担当）
調査補助員	高 橋 光 大（6月1日から2月28日まで）
同	小 倉 康 男（11月11日から12月20日まで）

#### 平成 27 年度

教 育 長	高 橋 善 之
教 育 次 長	北 林 武 彦（9月30日まで）
教 育 次 長	安 保 透（10月1日から）
生涯学習課長	菅 原 悟
郷土博物館長	若 宮 司（10月1日から生涯学習課主幹）
文化財保護係長	岸 国 也（9月30日まで）
文化財保護係長	加 賀 至（10月1日から）
文化財保護係	滝 内 亨（調査担当）
同	嶋 影 壮 憲（調査担当）
同	松 田 和 華（庶務担当）
調査補助員	高 橋 光 大（9月1日から2月28日まで）

平成 28 年度

教 育 長	高 橋 善 之
教 育 次 長	安 保 透
生涯学習課長	一 関 留美子
生涯学習課主幹	
兼郷土博物館長	若 宮 司
文化財保護係長	加 賀 至
文化財保護係	滝 内 亨 (調査担当)
同	嶋 影 壮 憲 (調査担当)
同	松 田 和 華 (庶務担当)
同	馬 庭 和 也 (調査担当。6月1日から)
調査補助員	高 橋 光 大 (10月1日から12月31日まで)

平成 29 年度

教 育 長	高 橋 善 之
教 育 次 長	佐々木 修
歴史文化課長	若 宮 司
歴史文化課長補佐	
兼埋蔵文化財係長	大 井 和 博
企画博物係長	加 賀 至
企画博物係	松 田 和 華 (庶務担当)
埋蔵文化財係	滝 内 亨 (調査担当)
同	嶋 影 壮 憲 (調査担当)
同	馬 庭 和 也 (調査担当)
調査補助員	高 橋 光 大 (10月1日から12月31日まで)

平成 30 年度

教 育 長	高 橋 善 之
教 育 次 長	本 多 恒 博
歴史文化課長	若 宮 司
歴史文化課長補佐	
兼埋蔵文化財係長	大 井 和 博
企画博物係長	加 賀 至
企画博物係	松 田 和 華 (庶務担当)
埋蔵文化財係	滝 内 亨 (調査担当)
同	嶋 影 壮 憲 (調査担当)
同	馬 庭 和 也 (調査担当)
調査補助員	高 橋 光 大 (11月1日から12月31日まで)



## (2) 調査期間

現地調査　自：平成26年6月3日　至：平成31年1月10日  
 整理作業　自：平成26年12月24日　至：平成31年3月31日  
 調査面積　2,421.35 m<sup>2</sup>

## 3 調査の方法

調査対象地に任意でテストピット・トレンチを設定し、盛土、搅乱土、耕作土等を重機または人力で除去した後、基盤層まで人力で掘り下げ、埋蔵文化財の有無等を調査した。出土遺物は、テストピット・トレンチごと、層位ごとに取り上げた。テストピット・トレンチの位置情報等については、トータルステーションを用いて計測した後、測量ソフトGioLineにより計測データを処理した。なお、大館城跡の一部、菅谷地遺跡、大館野遺跡、釧内館跡、大岱遺跡隣接地の調査位置情報等の計測については、有限会社小笠原測量設計事務所にご協力いただいた。また、扇田道上遺跡隣接地の位置情報については、平板で計測した。

整理作業については、水洗、分類、注記の一次整理の後、遺物の再分類、接合等の二次整理を行った。また、並行して野外調査で得られた記録類の整理等も実施した。

表2 詳細分布調査一覧(2)

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象面積(m <sup>2</sup> )	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	報告
平成30年度							
店舗敷地造成工事	204-4-26	釧内館跡	釧内字館8ほか	2960	252	4/16～4/27	2-15
個人住宅新築工事	204-4-46	大館城跡⑤	字中城8-23	56	10	6/5～6/6	2-16
個人住宅新築工事	204-4-21	花岡城跡・神山遺跡	花岡町字アセ石130-44	122	10	7/11	2-17
個人住宅新築工事	204-4-47	金坂遺跡	字金坂30-7	120	10	7/12～7/14	2-18
店舗敷地造成工事	204-4-46	大館城跡⑥	字桂城8-10	396	58	10/30～11/3	2-19
個人住宅新築工事	204-4-140	扇田道上遺跡隣接地	東台3丁目29-4	60	10	11/14～11/15	2-20
工場敷地造成工事	204-12-14	大岱遺跡隣接地	比内町扇田字上大岱41-1ほか	6010	70.2	11/21～11/29	3-5
個人住宅新築工事	204-4-141	小館町遺跡	小館町77-1	92	8	11/24	2-21
市民体育館・武道館解体事業	204-4-46	大館城跡④	字中城1ほか	3000	26	12/21～1/10	2-14
計					454.2		

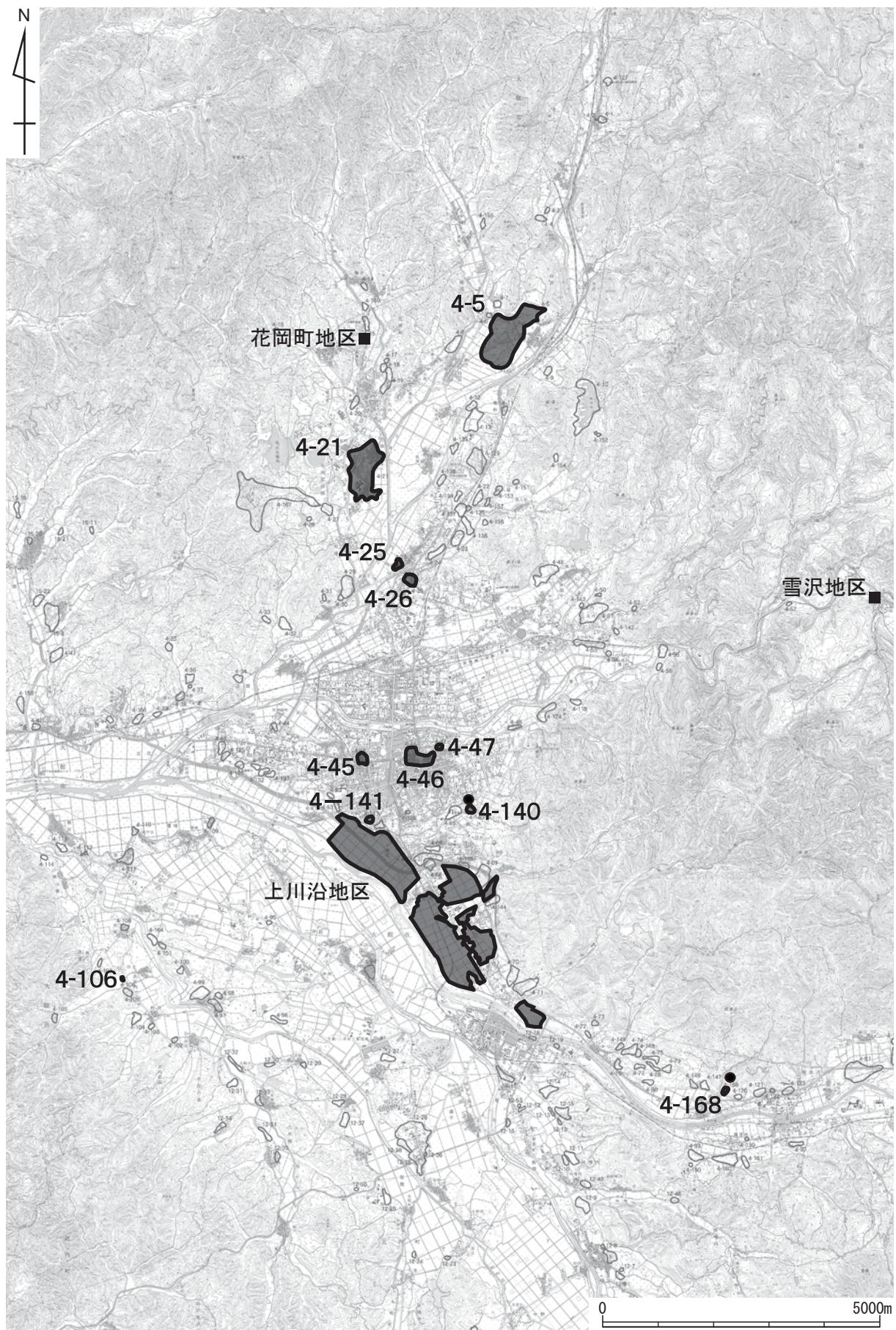


図 1 調査遺跡の位置 (大館地区 1 : 100,000)

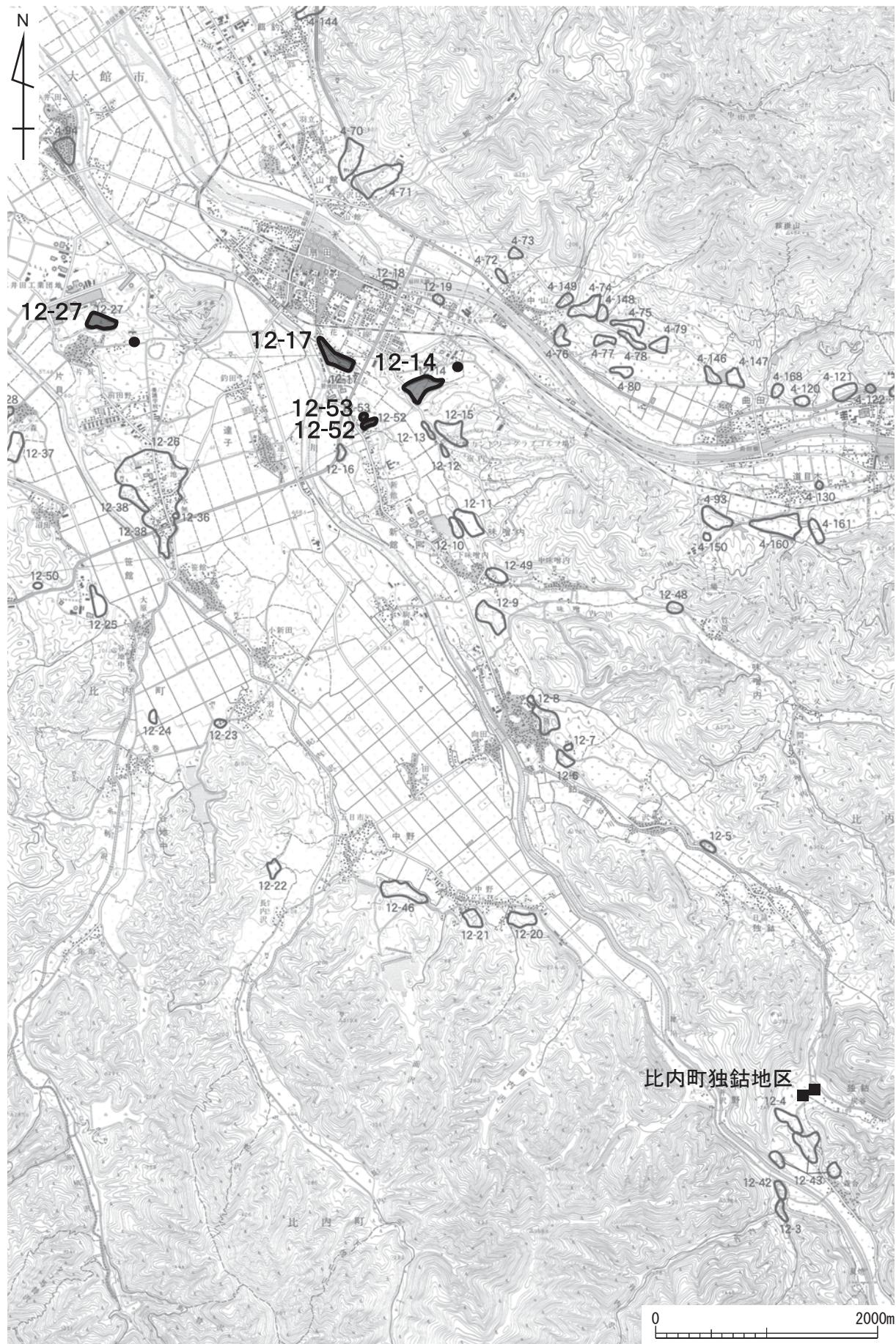


図2 調査遺跡の位置（比内地区 1 : 50,000）

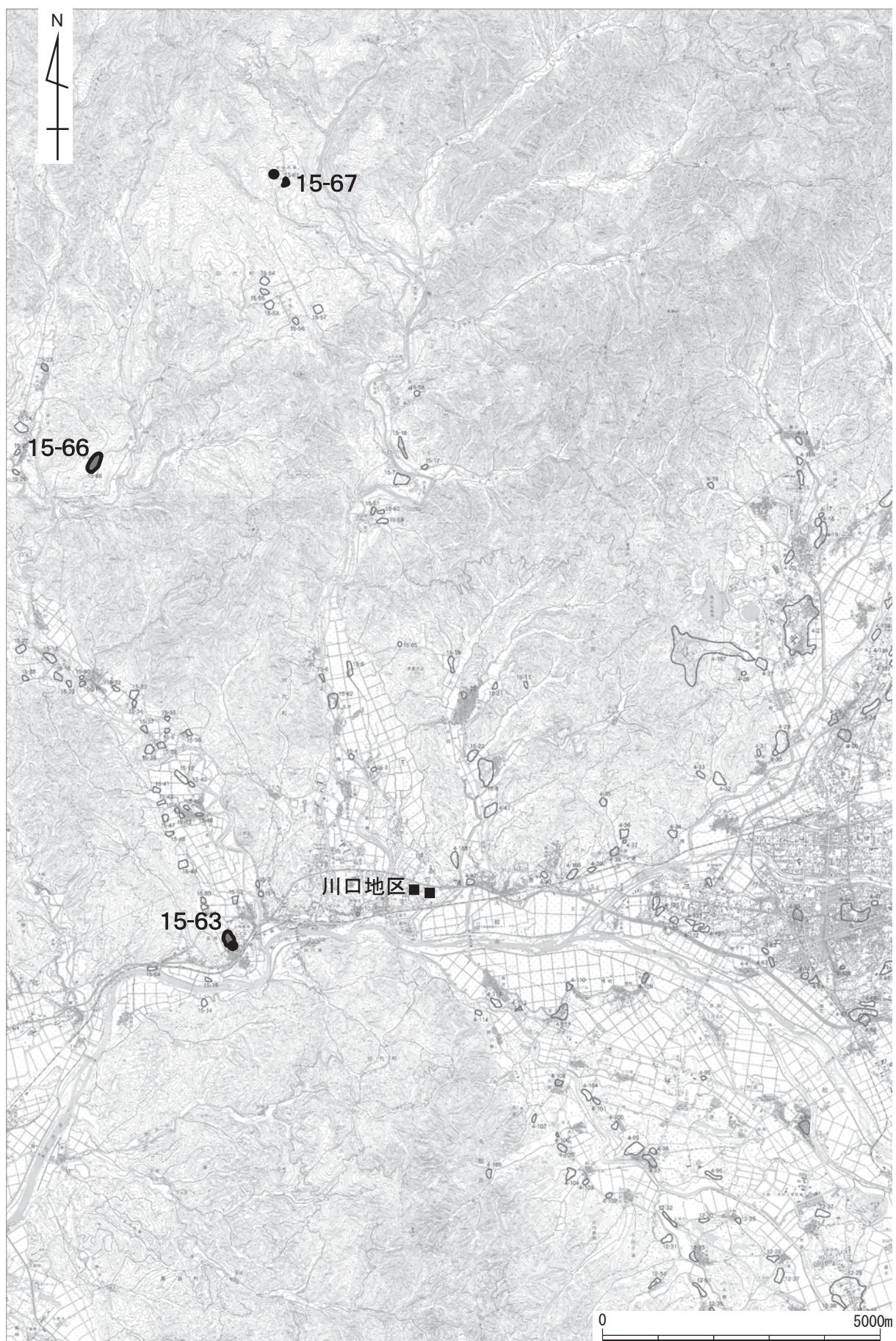


図3 調査遺跡の位置（大館・田代地区 1 : 100,000）

## 第2章 大館地区の調査

### 1 沢口II遺跡隣接地（ため池等整備事業）

#### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

米代川の支流域には、多くの沢が発達し、丘陵を開析する。それらの沢の一つの開口部左岸に沢口II遺跡は所在する。遺跡の位置は、北緯40度13分4秒、東経140度37分48秒（世界測地系）である。標高は、90～100mほどである。

調査地は、沢口II遺跡から谷を挟んだ北側の隣接地である。遺跡の東側には、沢口遺跡と鳶ヶ長根II遺跡、沢を挟んだ西側に、縄文時代後期末～晩期初頭の遺跡である家ノ後遺跡が所在する。

#### (2) 調査の内容

発掘区の設定は、X・Y軸のラインを東西・南北の座標軸にあわせた。発掘区における公共座標は、B-4区でX=24,450.000、Y=-17,260.000、F-3区でX=24,440.000、Y=-17,300.000である（世界測地系）。調査区における基本区画は、10×10mとし、名称は南東角の記号で表示する。

テストピットは、基本的に1m角とし、X・Y軸の交点のうち任意で設定した。テストピットの掘削は全て人力で行い、にぶい黄褐色粘土層～褐色粘土層（III～IV層）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無等を調査した。調査地内の基本層序は、基盤をなす褐色粘土層の上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 表土。

II層 黒色を呈する腐植土層である。

III層 にぶい黄褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層である。

IV層 褐色を呈する粘土層。

#### (3) まとめ

調査の結果、遺構・遺物は検出されず、今回の調査区は遺跡のエリアに入るとは考えがたい。



図4 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

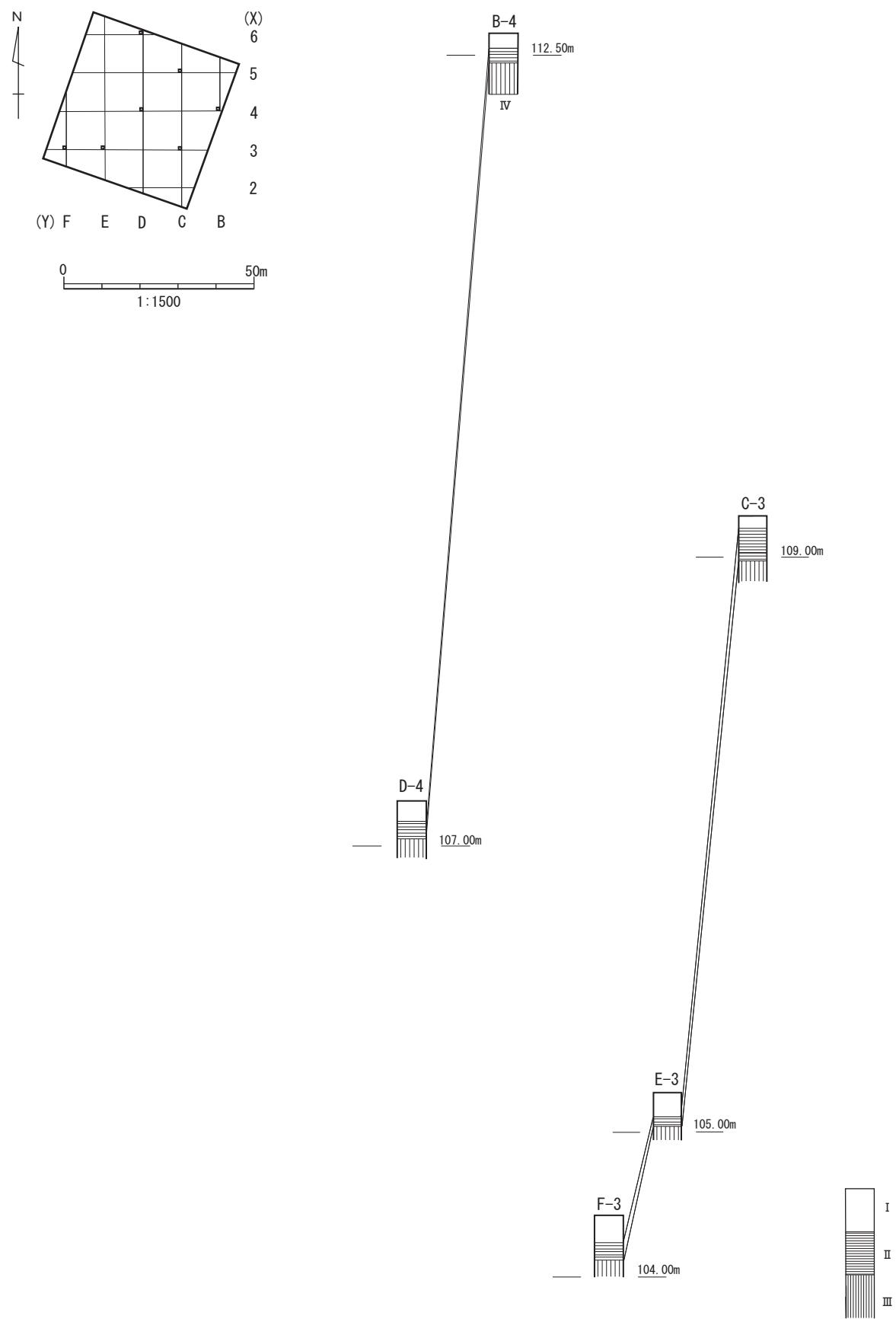


図5 調査位置図



調査地全景



調査状況



C-5



C-3



D-4



B-4



D-6



E-3

図版 1 調査状況

## 2 大館城跡①（大館市本庁舎建設事業）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館市中心部の大館段丘は、大館盆地の中央部に舌状に突き出た地形をなし、その規模は東西6km、南北2～3kmほどである。この段丘上の北側、米代川支流の長木川左岸に大館城跡は所在する。遺跡の位置は、北緯40度16分19秒、東経140度33分52秒（世界測地系）である。標高は、69～71mである。

遺跡の北東側には、平安時代と中世の遺跡である金坂遺跡、西側にも、平安時代と中世の遺跡である土飛山館跡が所在する。

### (2) 調査の内容

今回の調査は、平成26年度から29年度まで、本丸および二ノ丸、内堀および土塁と推定される地区約13,000m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査区の現況は本丸地区が旧市民体育館駐車場と周辺、二ノ丸地区が市役所現庁舎周辺駐車場および裁判所裏旧駐車場、内堀および土塁地区が市民プール跡地である。二ノ丸地区は、本丸への通路部分と佐竹西家の家来の屋敷地に該当する。享保13年の大館絵図によれば、裁判所裏側は小林三左エ門と原野七郎左エ門の屋敷地、市役所西部は前小屋嵐弥太と前小屋收貢の屋敷地に当たる。

発掘区の設定は、X・Y軸のラインを東西・南北の座標軸にあわせた。座標の名称は今回の事業対象予定地を包括できるように新規に設定した。発掘区における公共座標は、E-10区でX=30,170.000、Y=-22,710.000、X-23区でX=30,300.000、Y=-22,900.000である（世界測地系）。調査区における基本区画は、10×10mとし、名称は南東角の記号で表示する。今回の調査範囲は、X=6～22、Y=D～Zである。

トレントは、基本的に幅2mとし、X軸またはY軸に平行して設定した。ただし、市役所駐車場など、現場の制約のため、平行して設定できなかった箇所もある。トレントの掘削はすべて重機を用いて盛土を除去した後、江戸時代の生活面と推定される黒色土層（II層）まで掘り下げ、人力にて精査し、遺構の記録、遺物の収集等を行った。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす黄褐色砂質土層の上に腐植土層が堆積する。

I層 表土および盛土。

II層 黒色を呈する腐植土層で、遺物包含層である。

III層 暗褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層である。

IV層 黄褐色を呈する砂質土層。十和田八戸火碎流に相当する。

V層 黄褐色を呈する砂層。十和田八戸火碎流に相当する。

本丸地区では、3本のトレント（以下「TR」）を設定、掘開し、埋蔵文化財の有無および包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、TR9および10周辺は包含層が残存していたものの、TR11は搅乱が多く、包含層は失われていた。遺構は、TR9より石敷遺構1ヵ所、TR10より土坑とみられる黒色土落込み5ヵ所と溝跡1条、柱穴・柱穴様ピット38基、TR11より溝跡1条、柱穴様ピット5基を検出し、遺物はTR9～11より陶磁器など223点を得た。

二ノ丸地区は、市役所周辺のかつて市役所の駐車場があった場所（北東側）と現在も駐車場として

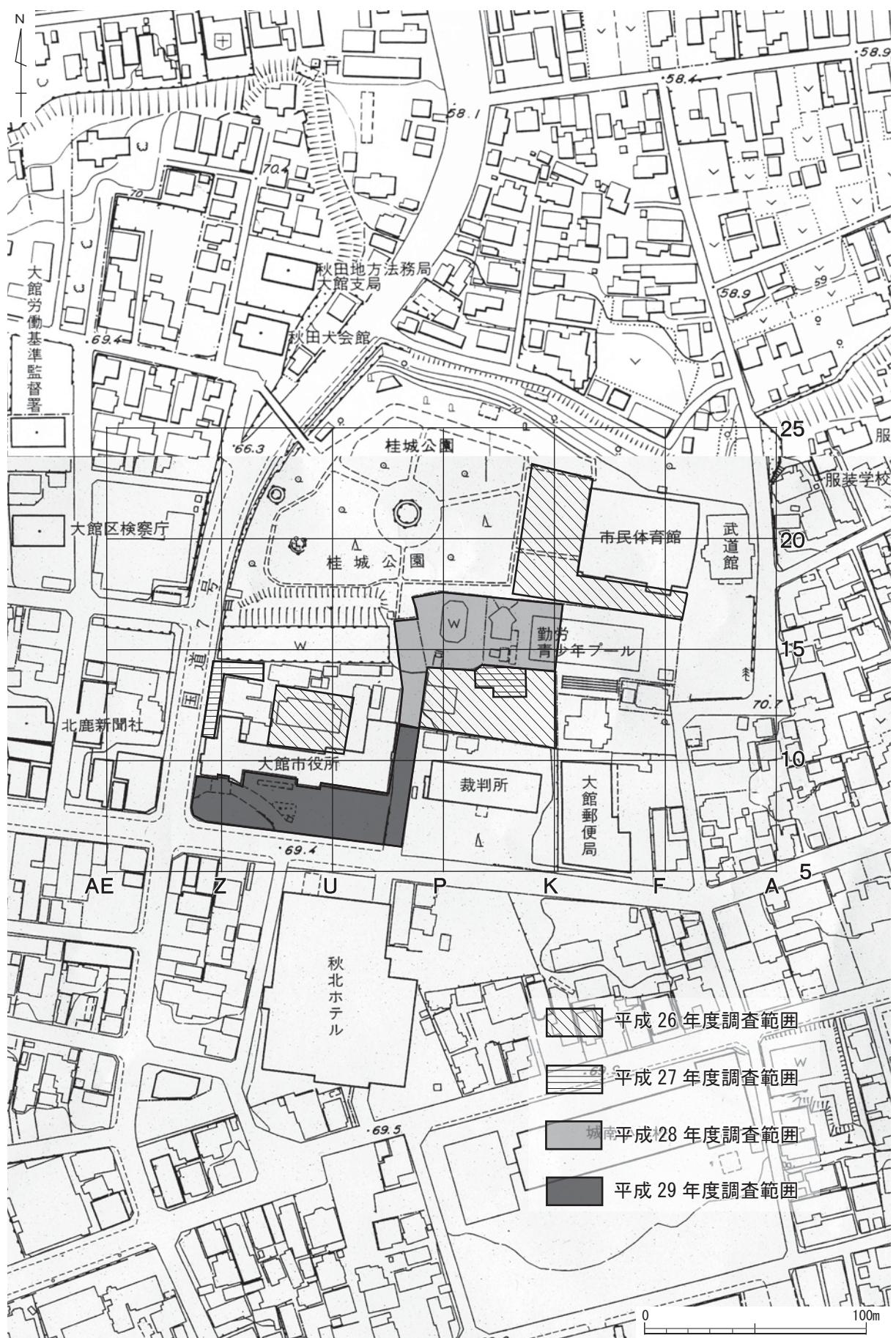


図6 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

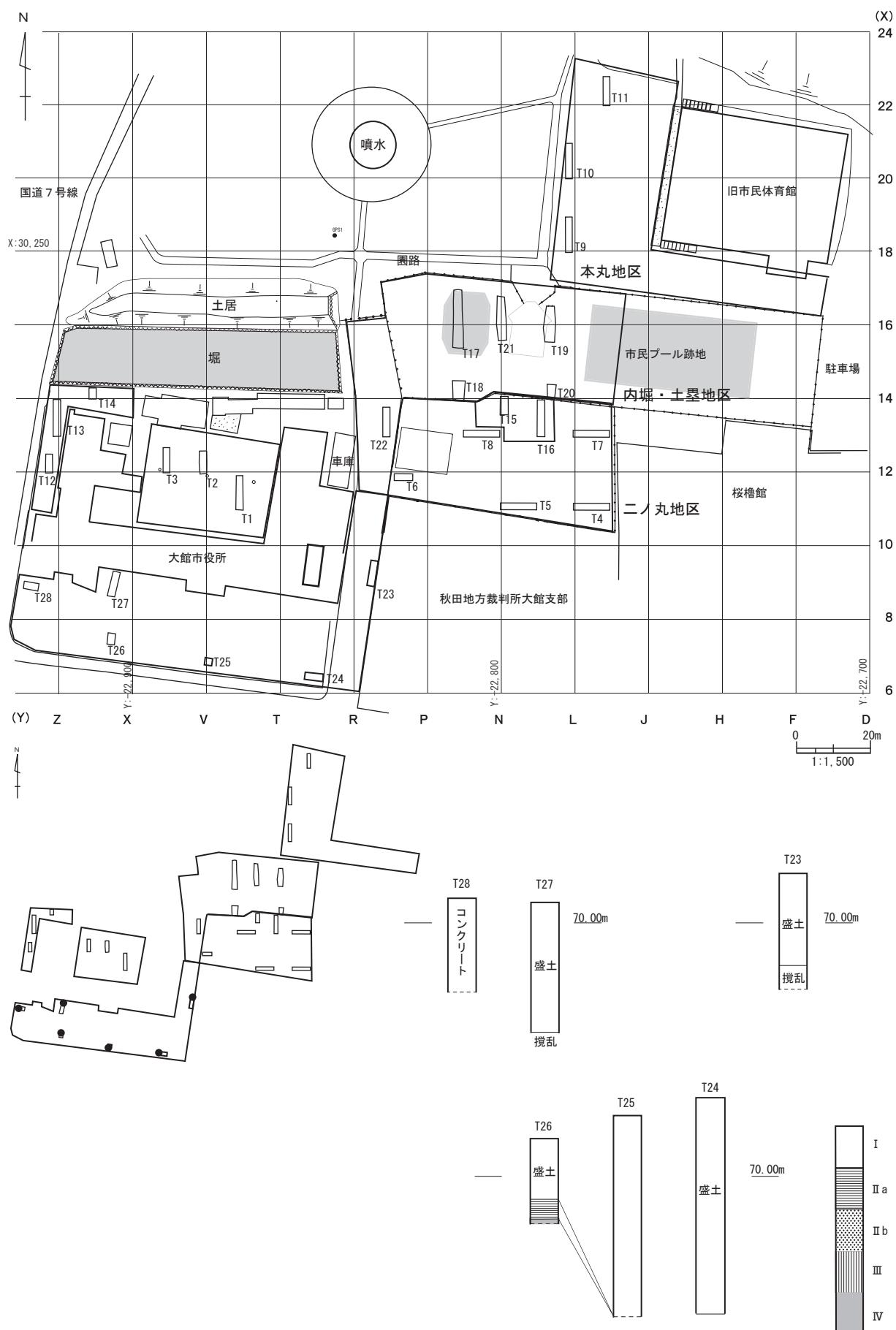


図7 調査位置図

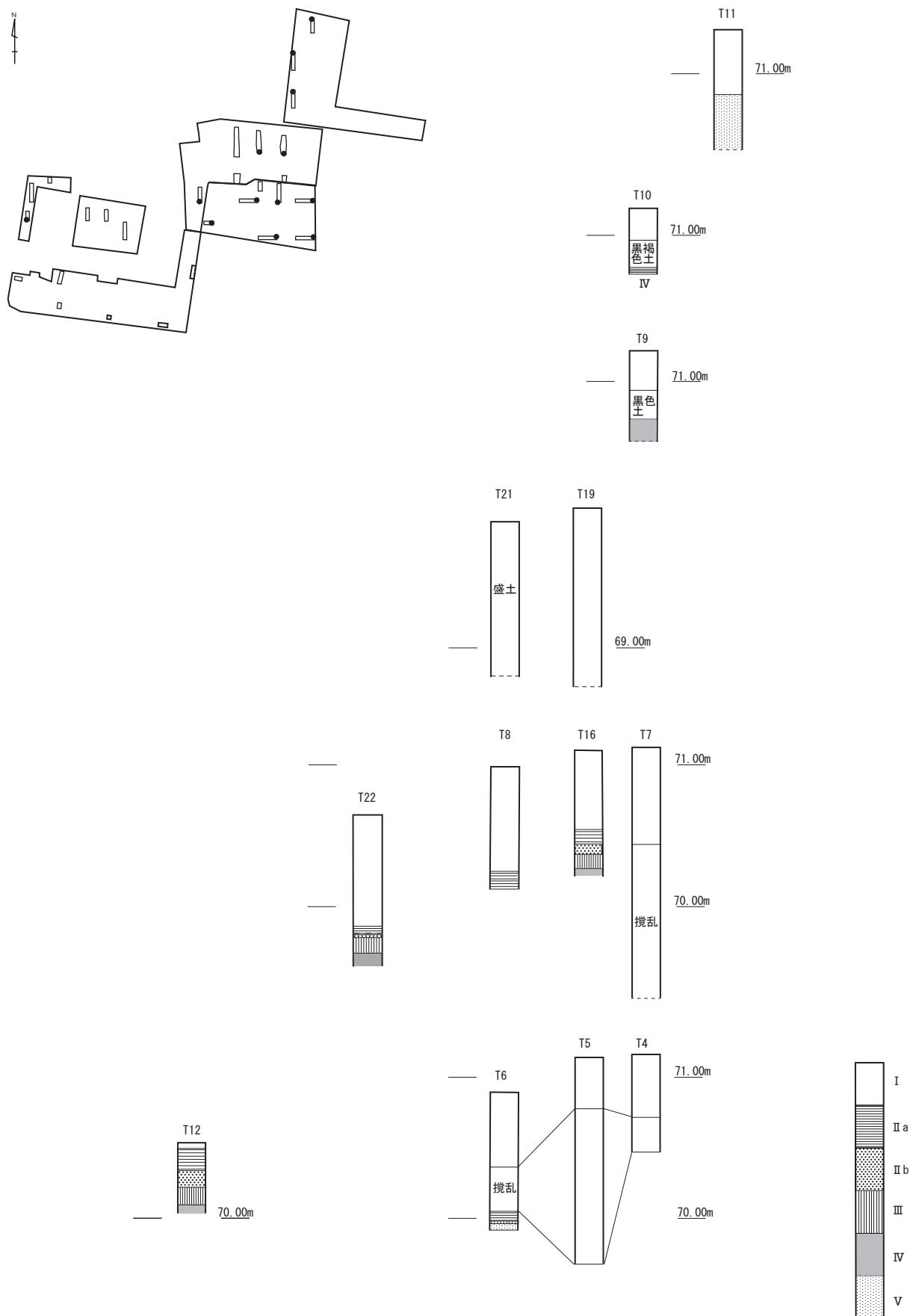


図8 土層柱状図

利用されている場所（西側）である。二ノ丸地区では、20本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無および包含層の残存状況等を調査した。

二ノ丸地区の北東側は、近現代の造成工事により包含層はほとんど残存していなかった。特にX=12、Y=J～Pの範囲は、盛土が50～80cmに及ぶ。隣接する内堀地区は、昭和45年に市民プール建設のため堀が埋められており、おそらくこの範囲は、土地造成のため包含層が消失したものと思われる。この箇所からは、TR4より土坑1基（SK9）と柱穴様ピット6基、TR5より土坑2基（SK10・11）と柱穴および柱穴様ピット22基、TR6より溝跡1条と柱穴様ピット3基、TR8より溝跡1条と柱穴様ピット5基、TR16より溝跡2条を検出し、TR4～8・16・22より陶磁器など139点を得た。

二ノ丸地区の西側は、北東部同様造成工事等により削平されていたものの、遺構は良好に残存していた。この箇所で検出した遺構は、TR1より堀跡1条と柱穴・柱穴様ピット10基、TR2・3より堀跡1条、TR3より土坑1基、TR12より土坑1基、柱穴2基、柱穴様ピット12基、TR13より柱穴4基、柱穴様ピット25基、TR14より柱穴様ピット4基、TR23より柱穴様ピット2基、TR24・25より堀跡1条、TR26より柱穴・柱穴様ピット8基、TR27より柱穴様ピット2基、TR28より土坑1基、柱穴・柱穴様ピット2基、遺物は陶磁器など258点を得た。

内堀・土墨地区では、5本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無および包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、土墨は、昭和45年のプール建設に伴い、一切が失われていた。堀部分は、1mほど掘り下げると周囲からの湧水が激しく、水中ポンプにより排水したが、排水が追い付かず、上部のみ確認した。プールの事務所部分など一部が搅乱により破壊されているものの、概ね良好に遺存していることが判明した。この箇所で検出した遺構は、TR17～21より堀跡1条（SD410）、TR17より柱穴様ピット2基、遺物は陶磁器7点である。

### (3) 遺構

#### 1) 土 坑

土坑は可能性のある黒色土の落ち込みを含めて、11基確認した。このうち、少なくとも3基は近代のものである。土坑4と土坑10からは近世の陶磁器のみが出土しており、当該期に位置づけられるものとみられる。

#### 土坑4

**遺構** W-12区に位置する。TR3を調査中に半円形の黒色土落ち込みを発見した。

**埋土** 黒色土2層からなる。

**遺物** 2層より近世の肥前産染付の磁器碗口縁部片が1点出土した。

#### 土坑9

**遺構** K-11区に位置する。TR4を調査中に黒色土の落込みがあったことから、発見した。本土坑の南側は調査区外に拡がり、平面形はやや歪んだ円を呈する。確認部分での規模は長径1.6m、1.2m、深さ0.9mほどである。壁は急斜度で立ち上がり、オーバーハングする。

**埋土** 埋土は黒褐色土と黒色土からなり、陶磁器片が混入している。堆積状態は埋め戻された様相を呈している。

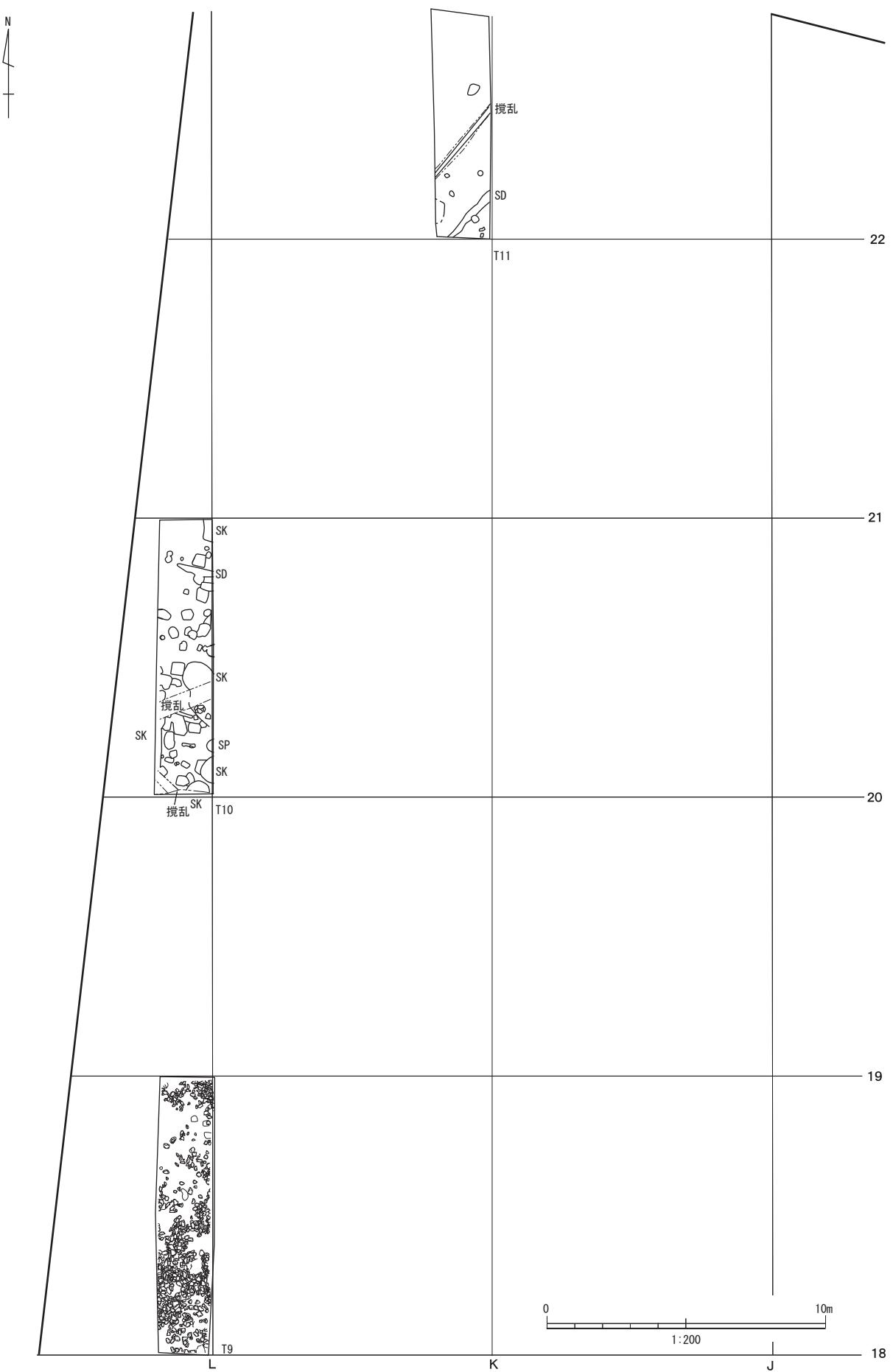


図9 本丸地区確認調査平面図

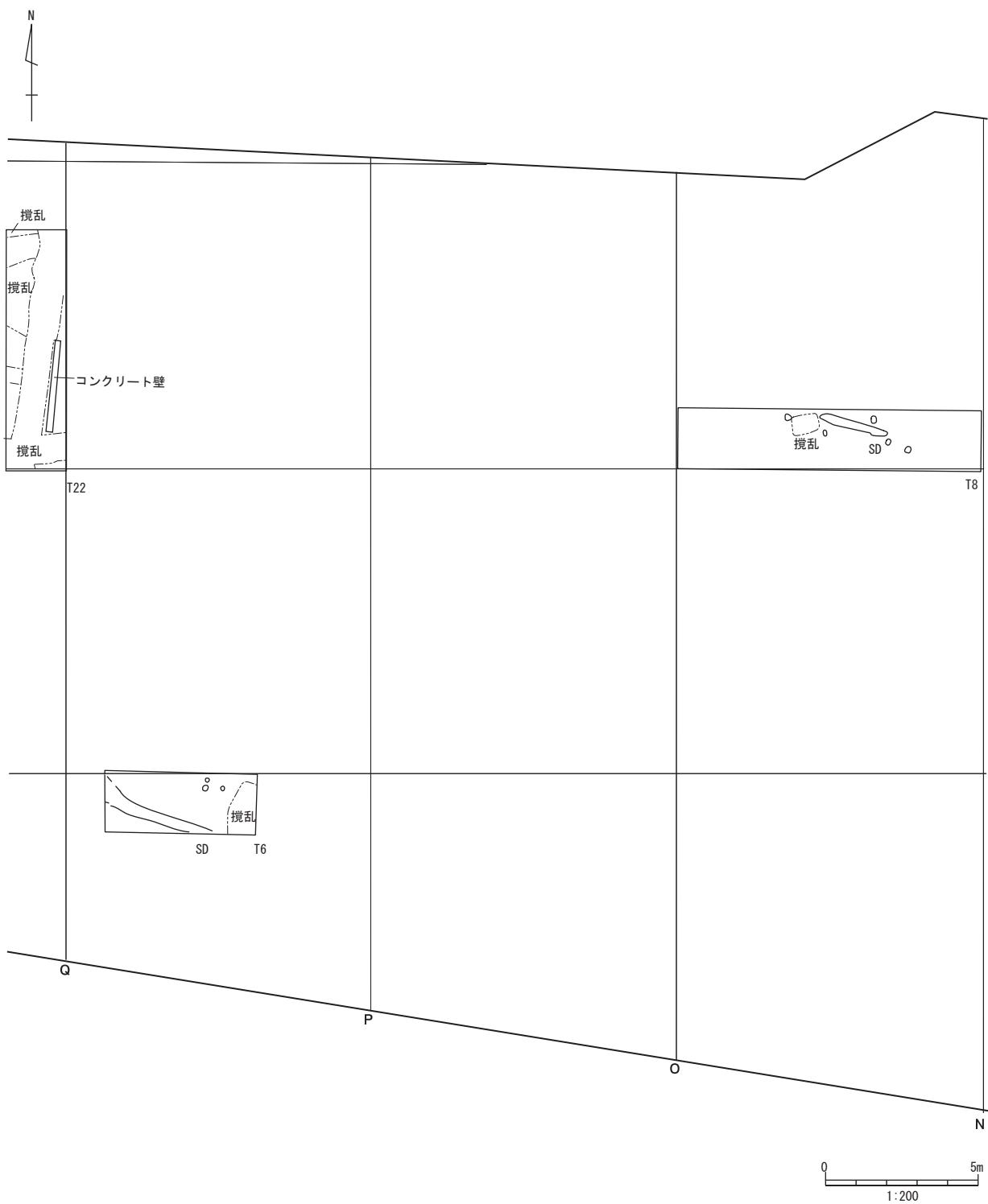


図 10 ニノ丸地区北東部確認調査平面図 (1)

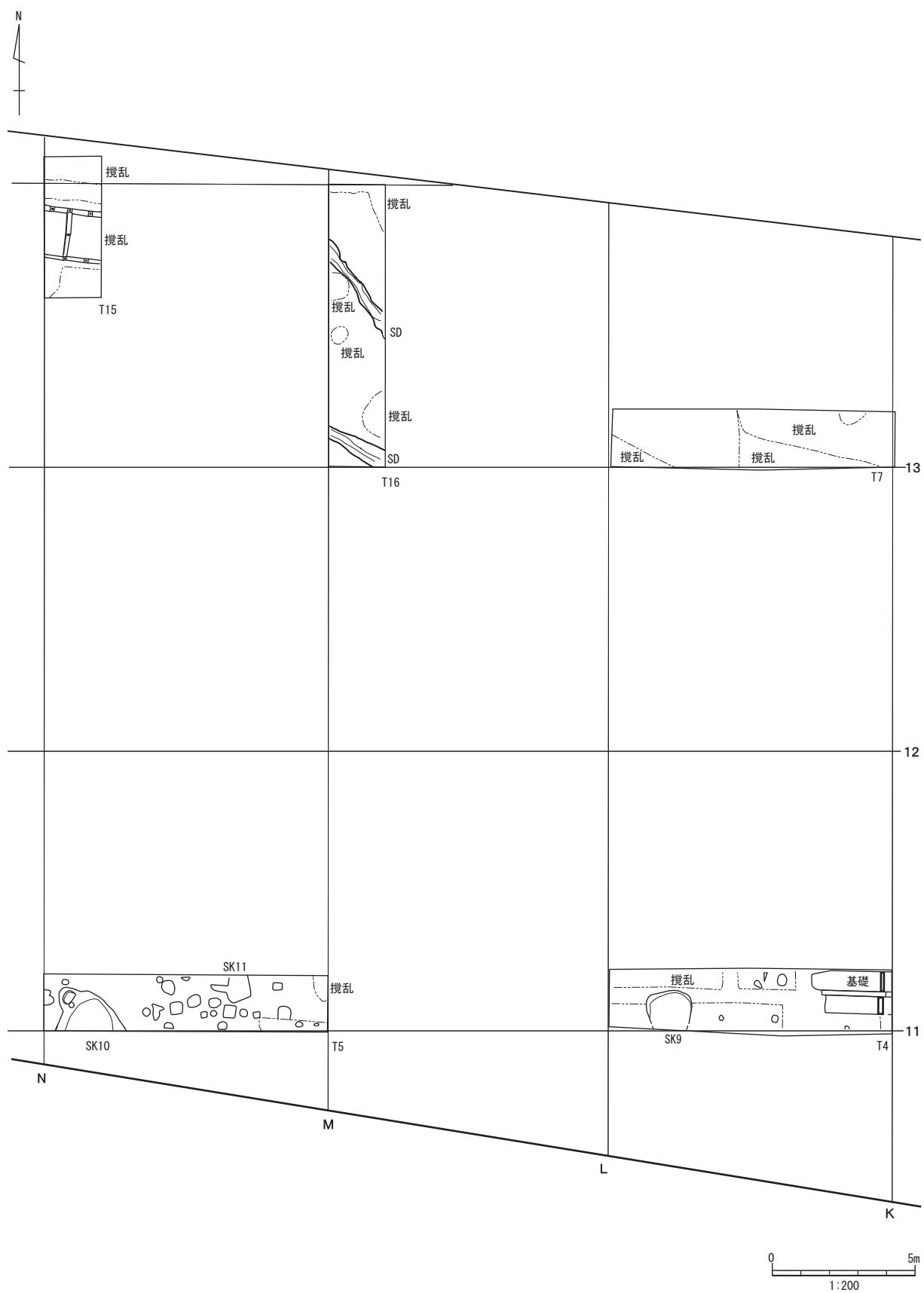


図 11 二ノ丸地区北東部確認調査平面図 (2)

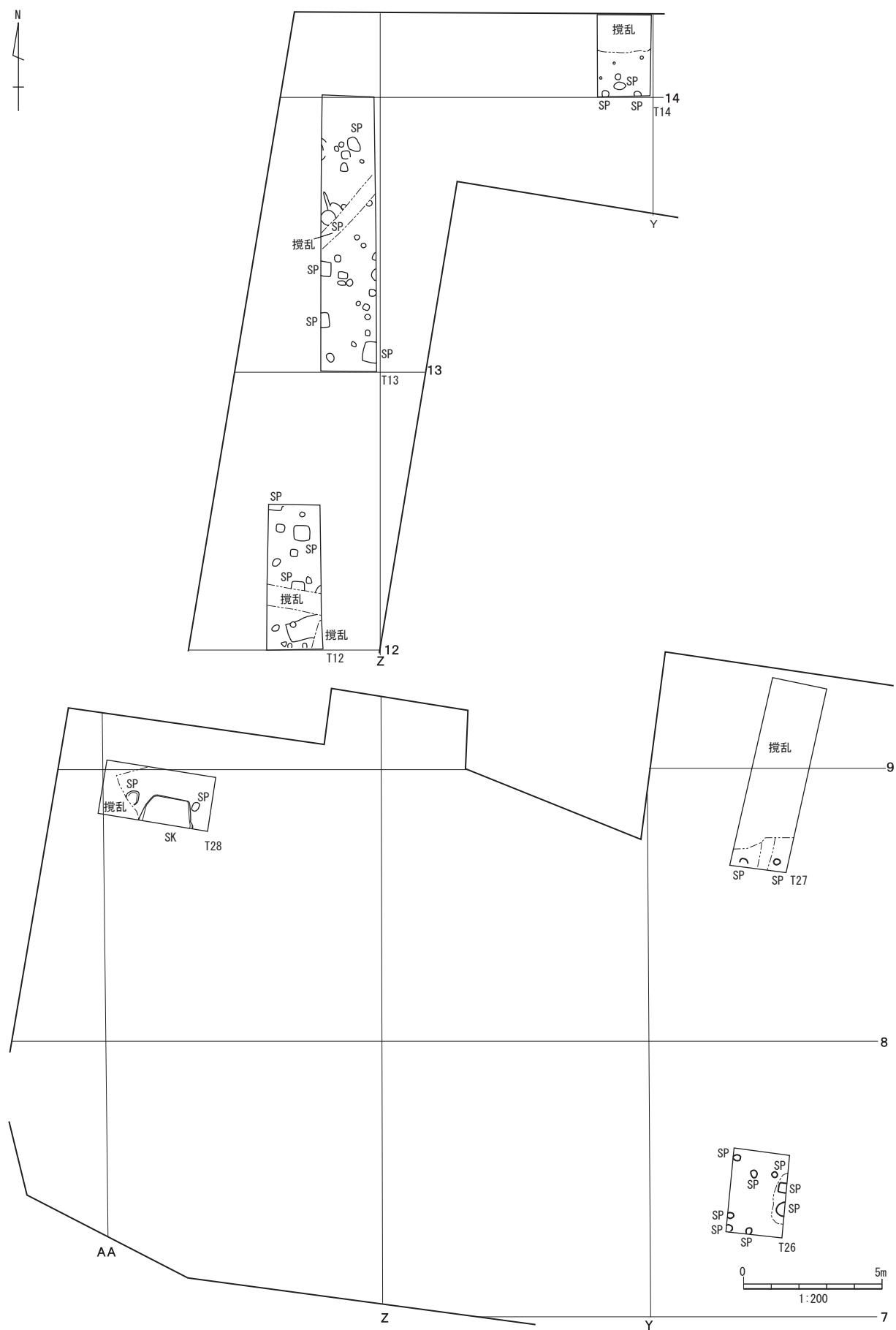


図 12 二ノ丸地区西部確認調査平面図 (1)

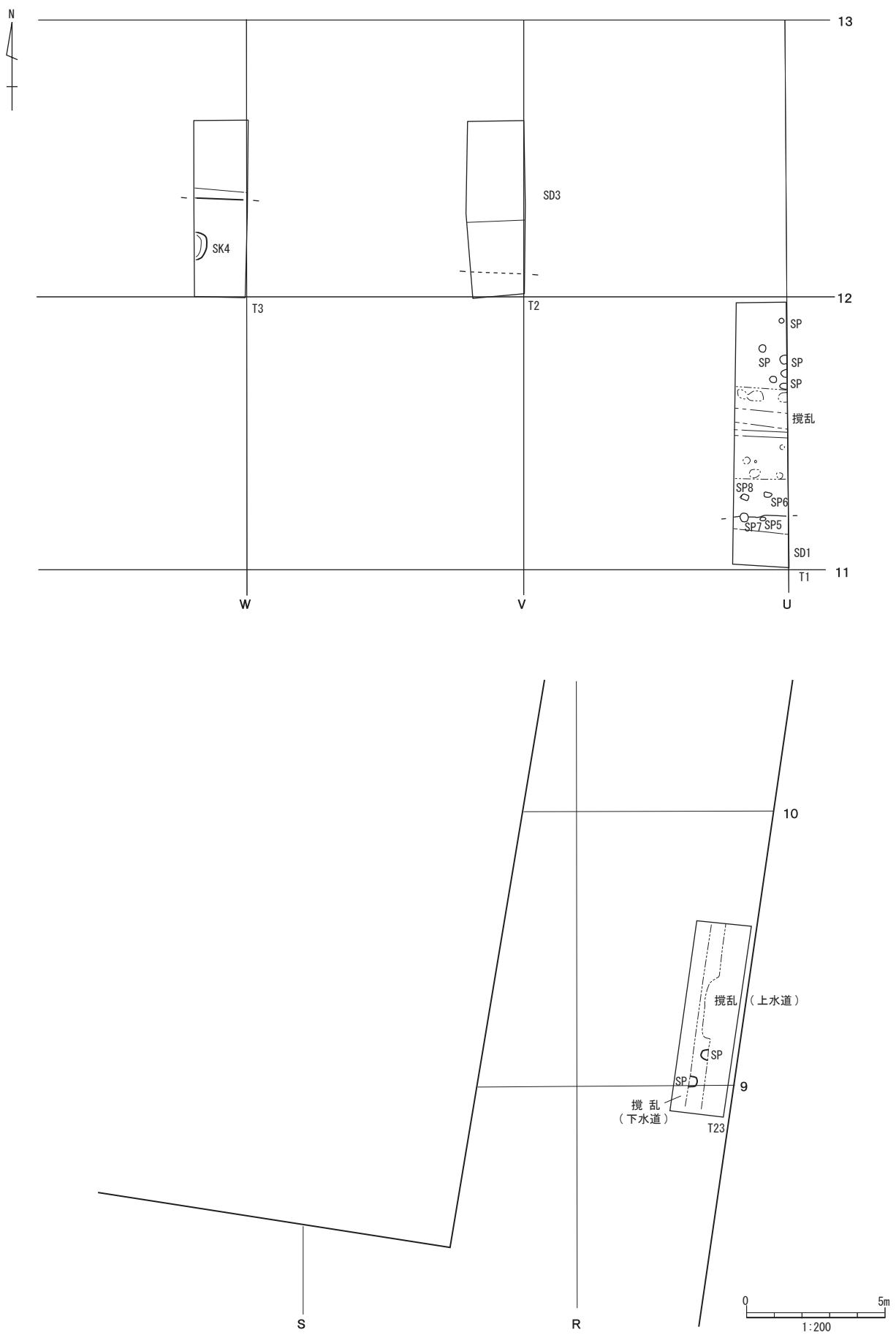


図 13 二ノ丸地区西部確認調査平面図 (2)

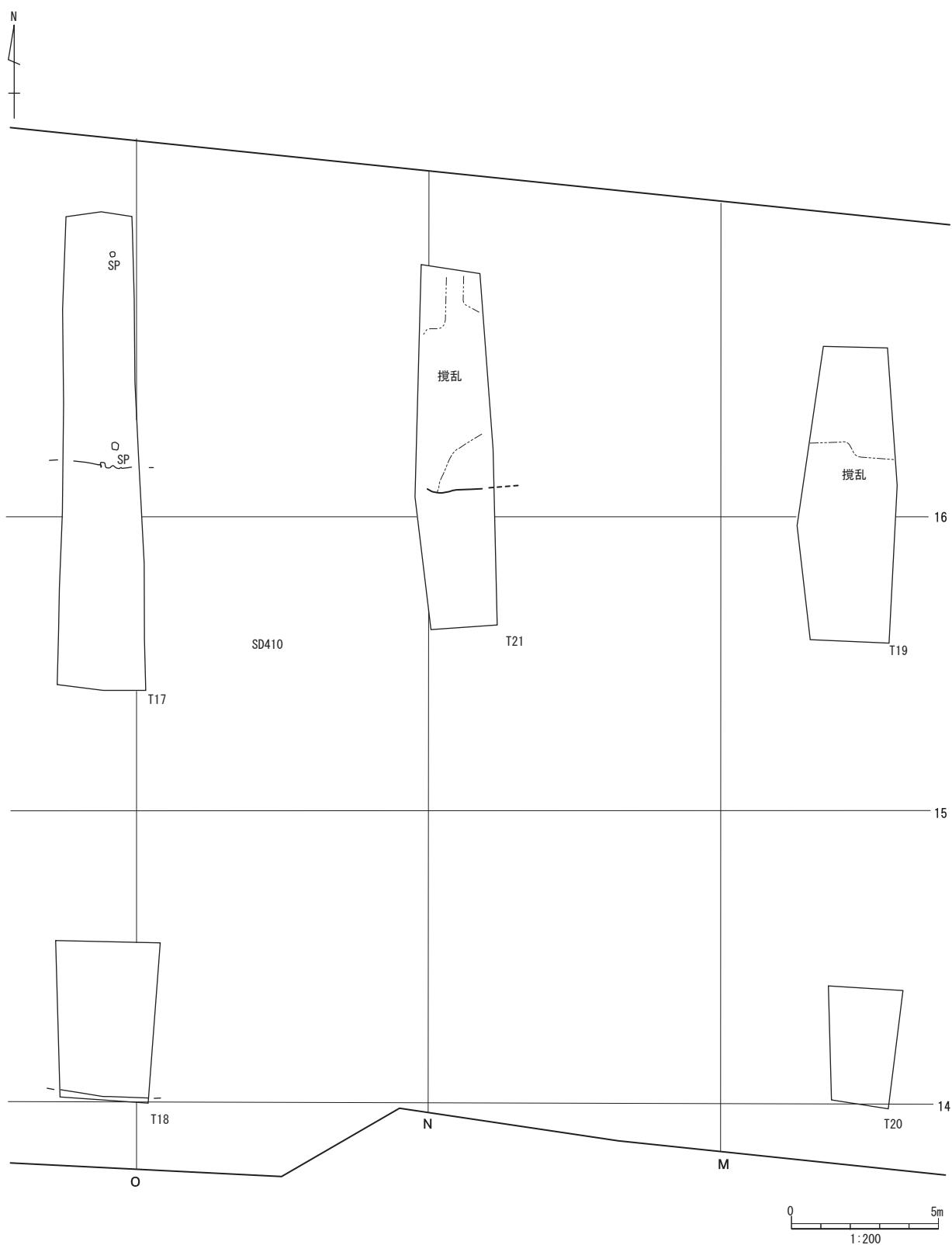


図14 内堀・土墨地区確認調査平面図

**遺物** 土坑内からは近世以前の遺物は陶磁器片1点、土器1点が出土したのみである。図22-1・2は本遺構出土の遺物である。図22-1は肥前産磁器染付碗の底部。図22-2は体部に孔をもつ土器の口縁～体部。このほか明治以降の型紙刷の磁器片が出土しており、本土坑は明治期以降に構築されたものと考えられる。

### 土坑10

**遺構** M-11区に位置する。TR5を調査中に黒色土の落込みを発見し、掘り下げたところ大型の土坑であることを確認した。本土坑の南側は調査区外に拡がり、平面形は不明である。確認部分での規模は長径2.58m、1.3m、深さ0.87mほどである。壁の立ち上がりはゆるやかであるが、西側は若干オーバーハングする。底面は大きく歪む。

**埋土** 黒褐色土と黒色土を基調とし、上層には拳大より大ぶりな礫が多量に混入していた。人為的に埋め戻された様相を示す。

**遺物** 土坑内からは陶磁器片11点、鉄製品1点が出土した。図22-3～9は本遺構出土の遺物である。図22-3・4は肥前産磁器である。3は破片から図上復元を行ったもので、口径10cm、底径6cmほど、器高2cmほどで、口径に対し底径が大きい染付の小皿である。口縁～体部外面には唐草文、口縁～体部内面には矢羽状文が描かれる。見込みに五弁花のコンニャク印判がみられる。17世紀末から18世紀初頭に比定される。4は磁器染付鉢口縁。図22-5～8は陶器片。5は肥前産の京焼風陶器碗。高台内には墨書があり、書かれている字は「壽」ではないかと思われる<sup>1)</sup>。6は三島手象嵌の鉢体部片。7は鉄絵で描かれる大皿または大鉢の底部破片。8は仏花瓶で、接合しないが同一個体と考えられる。19世紀。図22-9は棒状の鉄製品で釘であろうか。

**時期等** 本土坑は前述のとおり、人為的に土砂が廃棄され、埋まっていたとみなされる土坑であり、このことが本土坑の用途を特定する鍵になるものと考えられる。時期は19世紀に属するものと考えられる。

### 土坑11

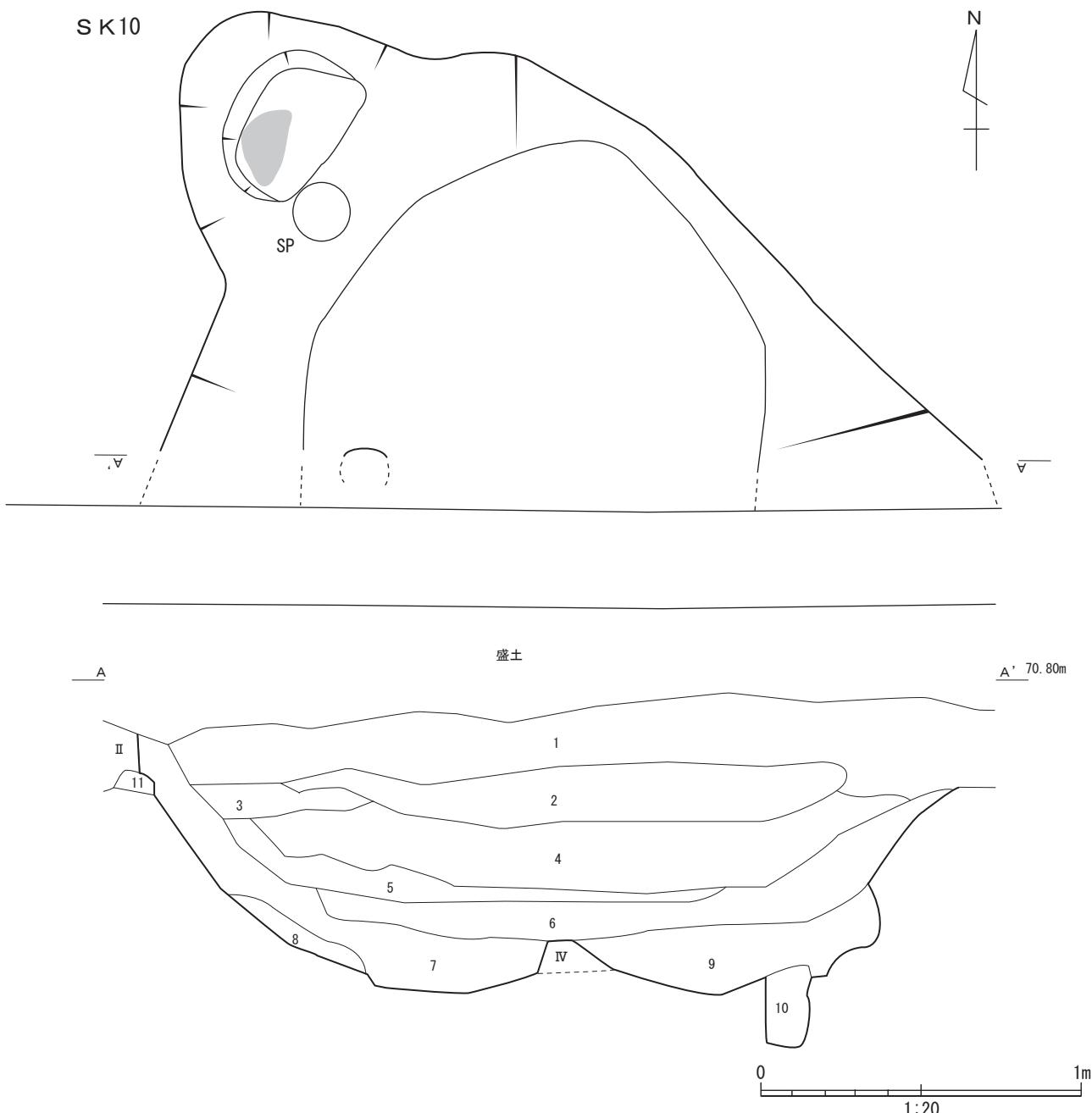
**遺構** M-11区に位置する。TR5を調査中に黒色土の落込みがあったことから、発見した。平面形は隅丸方形を呈する。規模は確認面で径1.8mほどで、本土坑の掘り下げは数cmの段下げに止めた。

**遺物** 上層から磁器片1点が出土したのみである。図22-10は肥前産染付碗である。内外面に二重網目文が描かれる。18世紀前半。

#### 2) 堀跡

検出した堀跡は、城の内堀跡(SD410)及び外堀跡(SD600)、二ノ丸の馬出部分に築かれた堀跡2条(SD1・3)の計4条である。

1) 花巻市博物館 白石睦弥氏のご教示による。



SK10

- |                  |  |
|------------------|--|
| 1 10YR2/2 黒褐色    | 炭化物少量、パミス ( $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ ) やや多量混入。非常に固く締まる。粘性弱。 |
| 2 10YR2/1 黒色     | 礫 ( $\phi 20 \sim 200\text{mm}$ ) 混入。非常に固く締まる。粘性弱。           |
| 3 10YR1.7/1 黒色   | 砂質。固く締まる。粘性弱。  |
| 4 10YR2/3 黒褐色    | 砂質。パミス ( $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ ) 微量混入。締まり有り。粘性弱。          |
| 5 10YR2/2 黒褐色    | 柔かい。粘性有り。  |
| 6 10YR3/2 黒褐色    | 砂質。締まり有り。粘性弱。  |
| 7 10YR3/1 黒褐色    | 拳大の礫多量混入。締まり、粘性有り。   |
| 8 10YR3/1 黑褐色    | 砂質。柔かい。粘性有り。   |
| 9 10YR5/3 にぶい黄褐色 | 黒色土ブロック混入。締まりよし。粘性有り。  |
| 10 10YR2/1 黒色    | 砂質。柔かい。粘性有り。   |
| 11 10YR2/1 黒色    | 砂質。固く締まる。粘性弱。  |

図 15 土坑 10

### 堀跡 1

**遺構** U-11 区に位置する。TR 1 を調査中に黒色土の落ち込みを発見した。北側の一部を確認したのみであり、全体形や規模は不明である。東・西・南に調査区外にさらに拡がる。確認した部分では幅が 1.8mほどあった。調査区が狭い上、湧水もあつたため、発掘は確認面から 70 cmほど掘り下げたところで中止した。このため、堀の底面については確認していない。壁はやや急斜度で立ち上がる。

享保 13 年大館城下絵図では千手院の北側に隣接する堀が描かれており、現存する堀と周辺の地形などを勘案すると、その堀の遺構と考えられる。また、絵図には堀の北側に土居が描かれているが、本遺構の北側に堀の掘上土とみられるオリーブ褐色砂が近代の搅乱を挟んで、幅 6.6m厚さ 10 cm前後で盛土整地されているのが確認された。これに関しては土居の基底部の残存部分の可能性を考えられる。しかし、上部は近代以降の削平や搅乱を受けており、詳細は不明である。なお、この堀は『明治 6 年改正 秋田県第二大区第一小區大館町番号列戸絵図』にも描かれており、明治初期までは存在していた。

また、本遺構の北側に柱穴様ピットが 4 基 (SP 5~8) 確認された。堀に面した柵跡の一部の可能性がある。

**埋土** 黒褐色土と黒色土の互層。上層には基盤層由来の灰白色土ブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻された様相を示す。具体的には、北側に存在していたとみられる土居を崩して埋め戻した可能性が考えられる。

**遺物** 堀跡 1 から出土した遺物は、磁器 2 点である。図 23-1・2 はいずれも肥前産染付の皿である。1 は見込み蛇ノ目釉剥ぎで、火熱を受けている。2 は見込みに建物が描かれる底部破片。蛇ノ目凹形高台。1・2 はともに 19 世紀。

**時期等** 江戸時代の大館城下絵図には、城外と本丸を結ぶ通路部分に堀が 2 条描かれている。このうちの東側の堀跡にあたると考えられる。前述のとおり、明治 6 年の絵図にも描かれており、少なくとも明治初期までは存在していたと考えられる。

### 堀跡 3

**遺構** V・W-12 区に位置する。TR 2 と TR 3 を調査中に黒色土の落ち込みを発見した。いずれも南側の一部を確認したのみであり、全体形や規模の詳細は不明である。堀跡 1 と同様、絵図に描かれた堀で、内堀の南側の堀に当たる遺構と考えられる。堀跡はトレチの長軸方向と直交し、東西方向に走る。堀跡は TR 2 では少なくとも幅が 5.4m以上、深さは確認面から 1.75mあり、規模は大きい。壁は急斜度で立ち上がる。遺構の時期や性格については、堀跡 1 と同様とみられる。

**埋土** 黒色土と黒褐色土を基調とし、基盤層由来の灰白色土ブロックや円礫が混じる。10 層にはガラス片を含むため、10 層より上は近代以降に埋め戻された土層と考えられる。

**遺物** 近世の陶磁器 34 点、土器 1 点、石製品 5 点、礫 17 点、木製品・木材 97 点、鉄製品 4 点が出土した。磁器染付の碗や皿、白磁紅猪口のほか、瀬戸・美濃産の磁器小皿などがある。石製品には硯が 1 点ある。12 層より下位は湧水が見られ、木材が多量に含まれる。堀底を探るため、部分的に深掘りしたところ、木製品（梶）が 1 点出土した。図 23-3~17、図 24 は本遺構出土の遺物である。図 23-3~13 は磁器である。3・4 は碗、5~7 は皿、8 は鉢、9 は段重、10 は水滴、11 は蓋、12 は紅猪口、13 は香炉である。図 23-14~17 は陶器である。14 は瀬戸・美濃産の腰張形の中碗、15 は捏鉢、16 は肥前産播鉢、17 は灯明受皿である。図 24-1 は凝灰岩を使用した長方硯である。図左

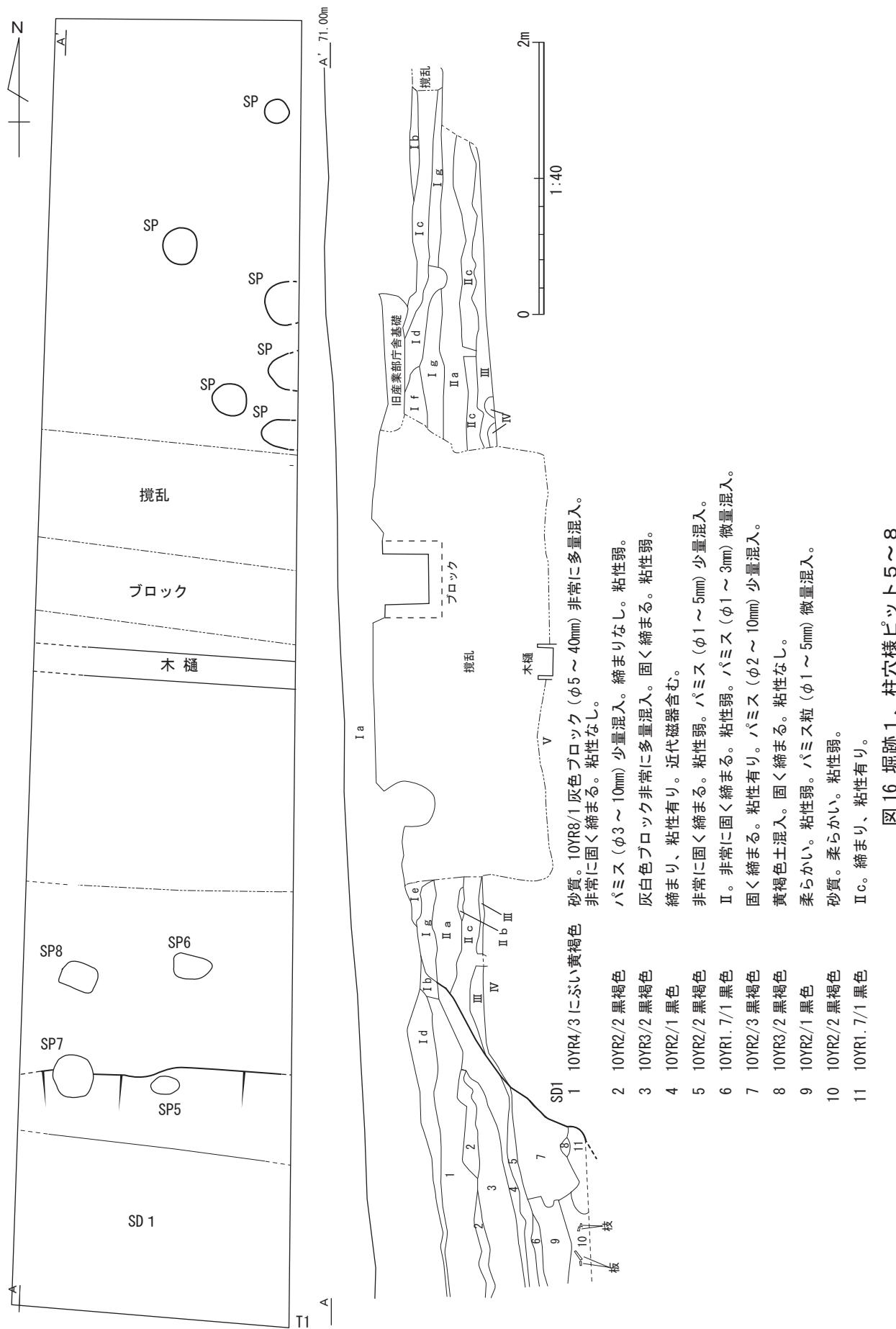


図 16 堀跡 1、柱穴様ピット 5 ~ 8

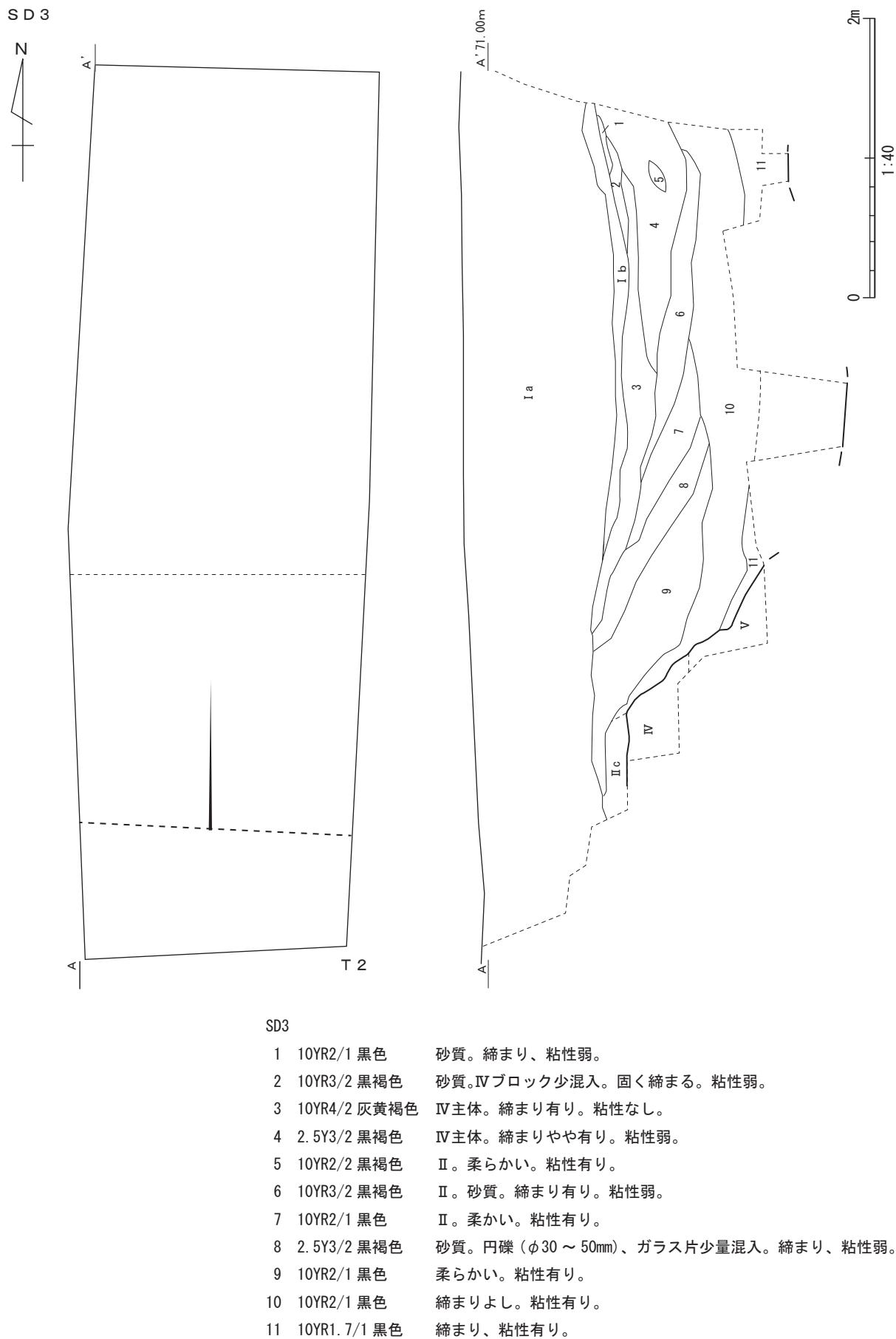
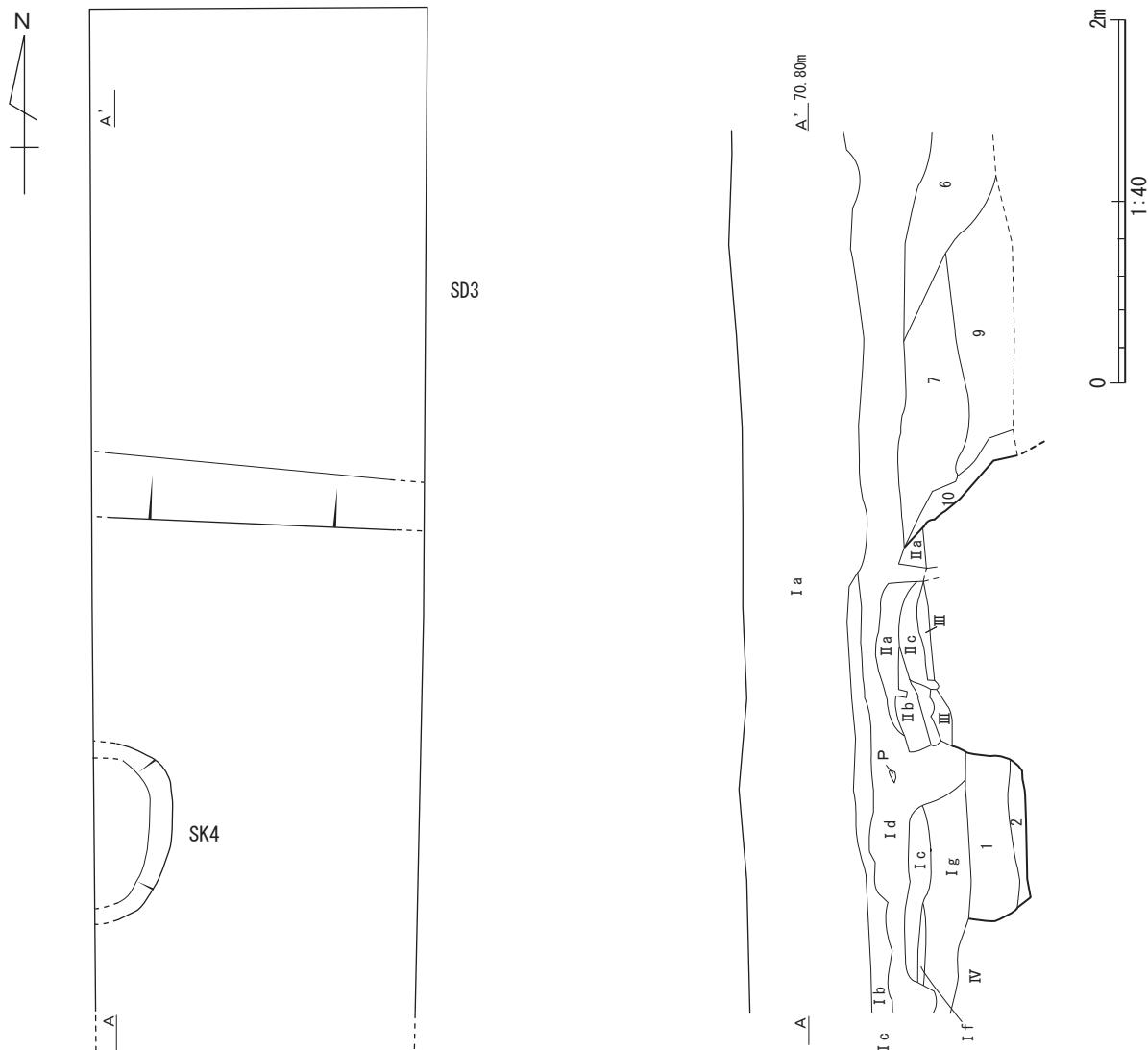


図17 堀跡3



Ia 盛土

- |                     |  |
|---------------------|--|
| I b 10YR2/1 黒色      | IV層状に少量含む。締まりよし、粘性有り。                                  |
| I c 10YR2/2 黒褐色     | IVブロック少混入。締まりよし。粘性弱。                                   |
| I d 10YR2/1 黒色      | 炭化物少混入。砂質、締まりよし。粘性弱。                                   |
| I f 10YR4/2 灰黄褐色    | IV>II。固くしまる。粘性有り。                                      |
| I g 10YR2/2 黒褐色     | 炭化粒微量、パミス ( $\phi 2 \sim 15\text{mm}$ ) 少量混入。締まり、粘性有り。 |
| II a 10YR1.7/1 黒色   | パミス ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) 少量混入。                 |
| II b 10YR5/4 にぶい黄褐色 | 火山灰。固くしまる。粘性なし。  |
| II c 10YR2/1 黒色     | 締まりよし。粘性有り。  |
| SK4                 |  |
| 1 10YR2/1 黒色        | IVブロック微量混入。締まり、粘性有り。                                   |
| 2 10YR2/1 黒色        | IVブロック微量混入。柔かい。粘性強。1よりやや暗い。                            |

図 18 土坑4・堀跡3

側及び下方は折損している。幅 7.5 cm、長さ 11.5 cm、厚さ 3.4 cm。断面は長方形を呈する。陸面に削痕が残る。焼けている。TR 2 出土。図 24-2~6 は木製品である。2 は角杭である。埋土下層より出土したもので上部は折損している。焼けおり炭化している。幅 5.9 cm、長さ 31 cm を測る。3・4 は部材で用途は不明。5 は陰卯下駄差歯。6 は横柾。縦半分が欠損している。4~6 を樹種同定した結果、4・6 はアスナロ属、5 はモクレン属であることが報告されている（巻末付編参照）。

### 堀跡 410

**遺構** L~O-14~16 区に位置する。大館城下絵図に描かれている内堀の跡と考えられる。TR 17~21 を調査中に黒色土の落ち込みがあったことから、発見した。前述のとおり、堀は昭和45年にプール建設の際に埋められたもので、多量の砂礫が混入する。バックホーでこれを掘削したが、1.5mほど掘り下げた段階で、いずれのトレンチも多量の水が周囲から流れ込んだ。水中ポンプを用いて排水したもの、流入する水の方が多く、掘削が困難になったため、中断した。TR 18~21 は近代の造成により、いずれも搅乱が著しく、上面は破壊されている。

堀は調査区外に東西に拡がる。TR 17 と TR 18 からそれぞれ堀の北端と南端を確認した。幅は 21.6m ほどあった。TR 17 では確認面から 80 cm ほど掘り下げたが、多量の湧水のため、中止した。

**埋土** 黒色土と黄褐色土が互層となって堆積している。

**遺物** 陶磁器が 2 点出土した。

### 堀跡 600

**遺構** R・T-6 区に位置する。大館城下絵図に描かれている外堀の跡と考えられる。TR 24・25 を調査中に黒色土の落込みがあったことから、発見した。一部を確認したにすぎず、平面形及び規模等は不明である。TR 24 は 1.7m ほど掘り下げたが、湧水があり、崩落の危険があつたため、掘削を中止した。TR 25 では堀の立ち上がりを部分的に確認した。遺物は出土していない。

#### 3) 柱穴・柱穴様ピット

TR 1・4~6・8~14・17・23・26~28 から確認した。このうち、建物跡を構成する柱穴とみられるものは、TR 5・10・12・13 のものである。TR 5 からは円形と方形の柱穴が一定の間隔をもって検出された。また、TR 10 からは方形の柱痕跡をもつ柱掘方が数基検出され、このうち 4 基は 2 m (6.6 尺) の間隔をもち一列に並ぶ。その特徴から近世の建物跡の可能性が高いが、部分的な調査のため、詳細は不明である。

#### 4) 石敷遺構

TR 9 からは全面にわたり拳大～人頭大の礫が集中して検出された。礫の覆土からは少量の炭化物を伴って近世陶磁器が 97 点出土しており、当該期の遺構と考えられる。主要な遺物の出土位置は図 21 に示したとおりである。出土陶磁器は破片状態での出土であるが、砂目積みの唐津皿や見込み蛇ノ目釉剥ぎの磁器皿などがあり、下限は 17 世紀代に収まる。この礫群は池の州浜の可能性が考えられる。類例は仙台城二の丸跡北方武家屋敷地区第 7 地点にある。<sup>1)</sup> また、TR 9 からは陶磁器のほかに革製品<sup>2)</sup> (図版 10) が出土している。

1) 弘前大学人文社会科学部 関根達人教授のご教示による。

2) 弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター 片岡太郎氏のご教示による。

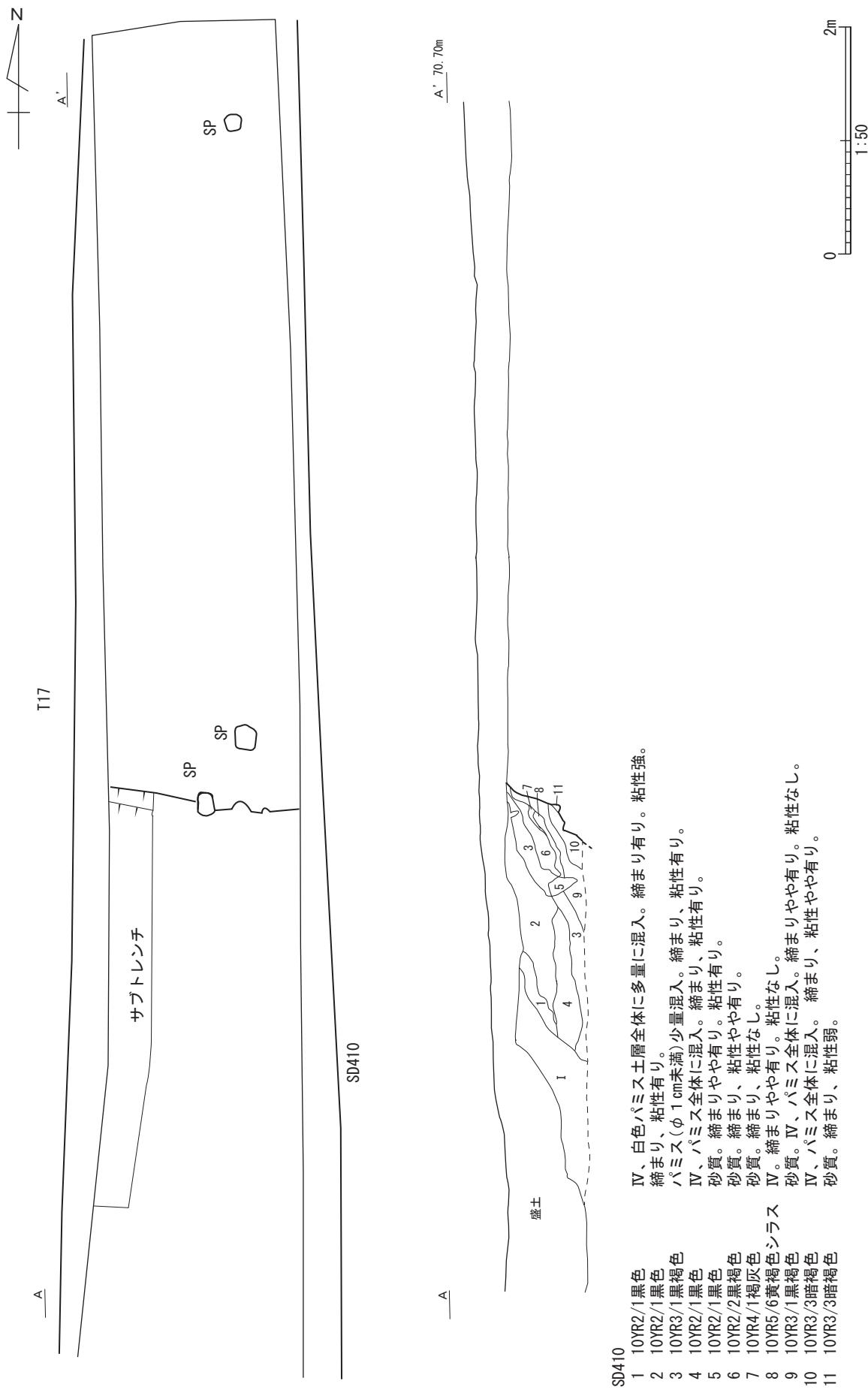


図 19 堀跡 410 (1)

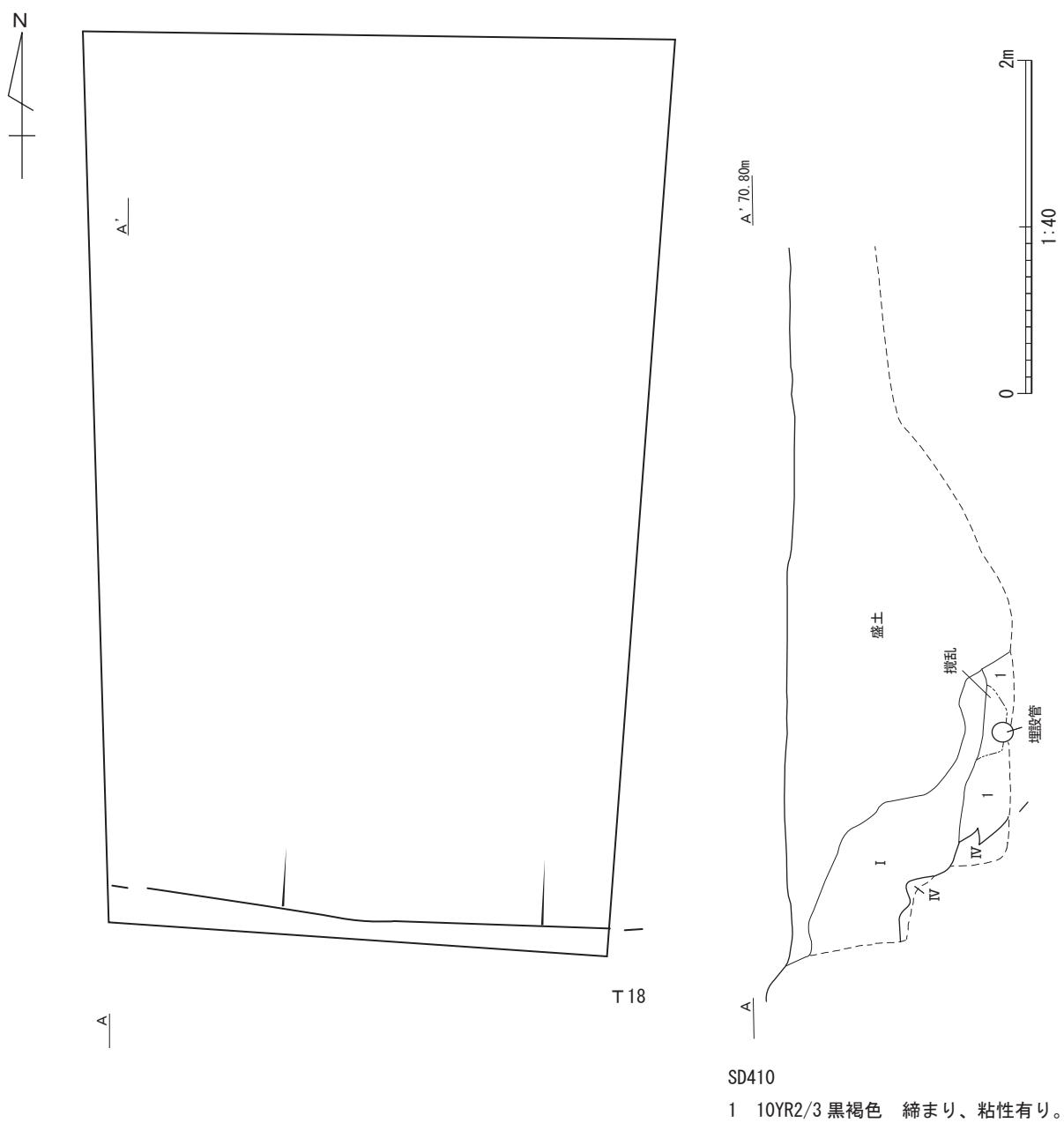


図 20 堀跡 410(2)

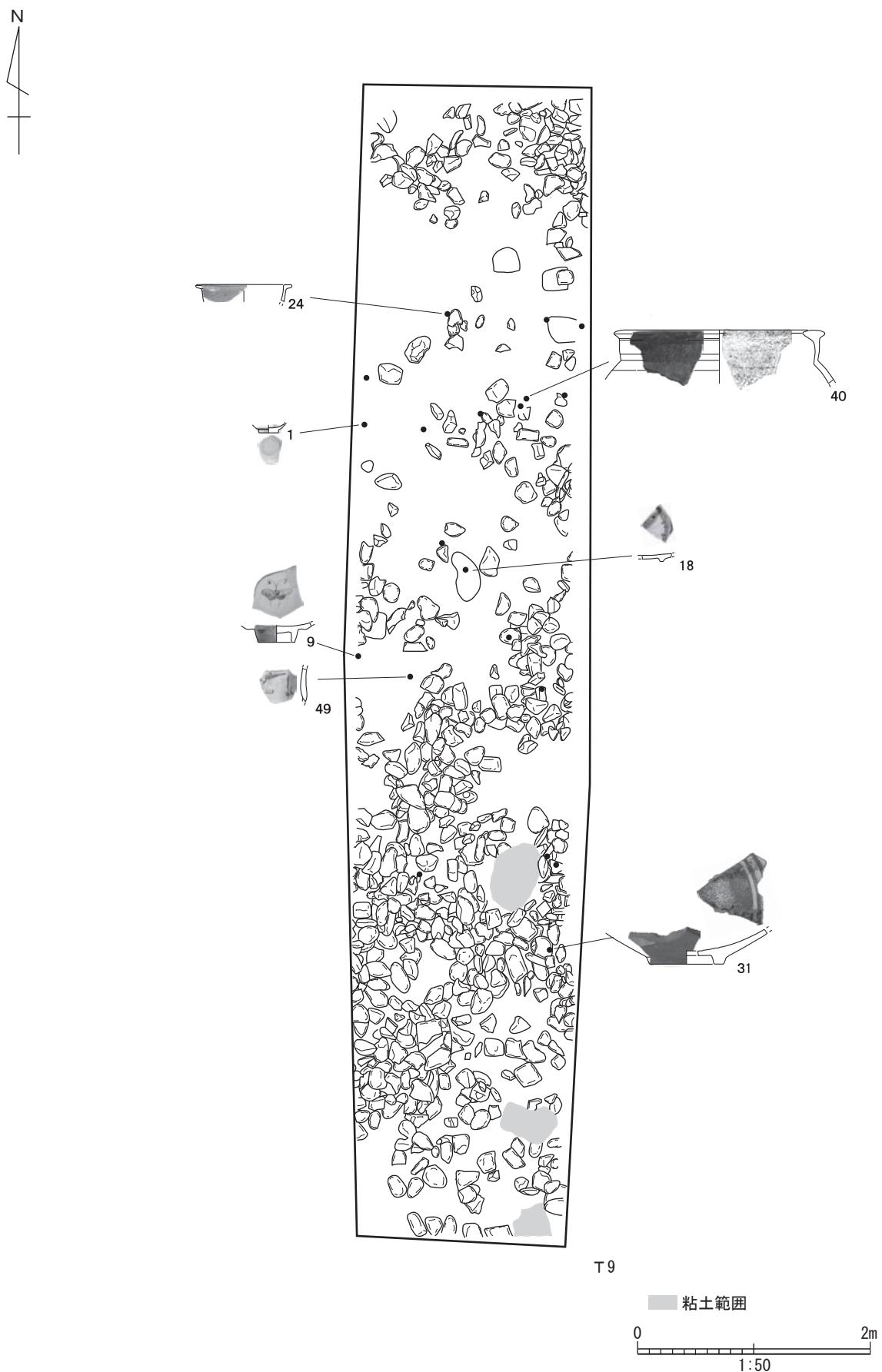
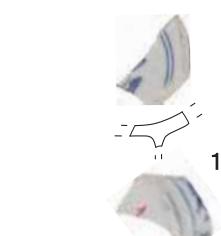
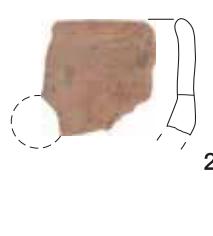


図 21 石敷遺構

SK9

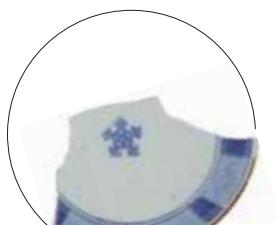


1

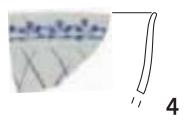


2

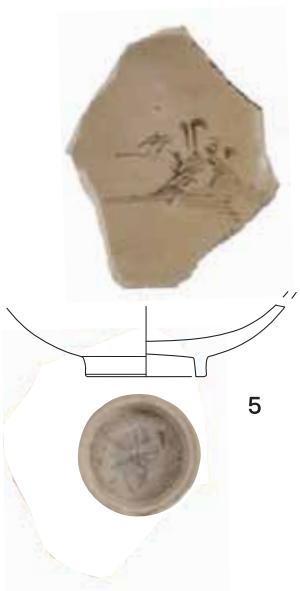
SK10



3



4



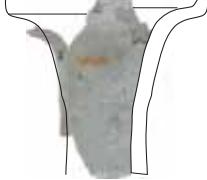
5



6

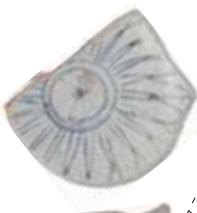


7



8

SK11



10



0 Scale 1:2

5cm



0 Scale 1:3

10cm

図22 土坑出土遺物



図23 堀跡1・3出土遺物

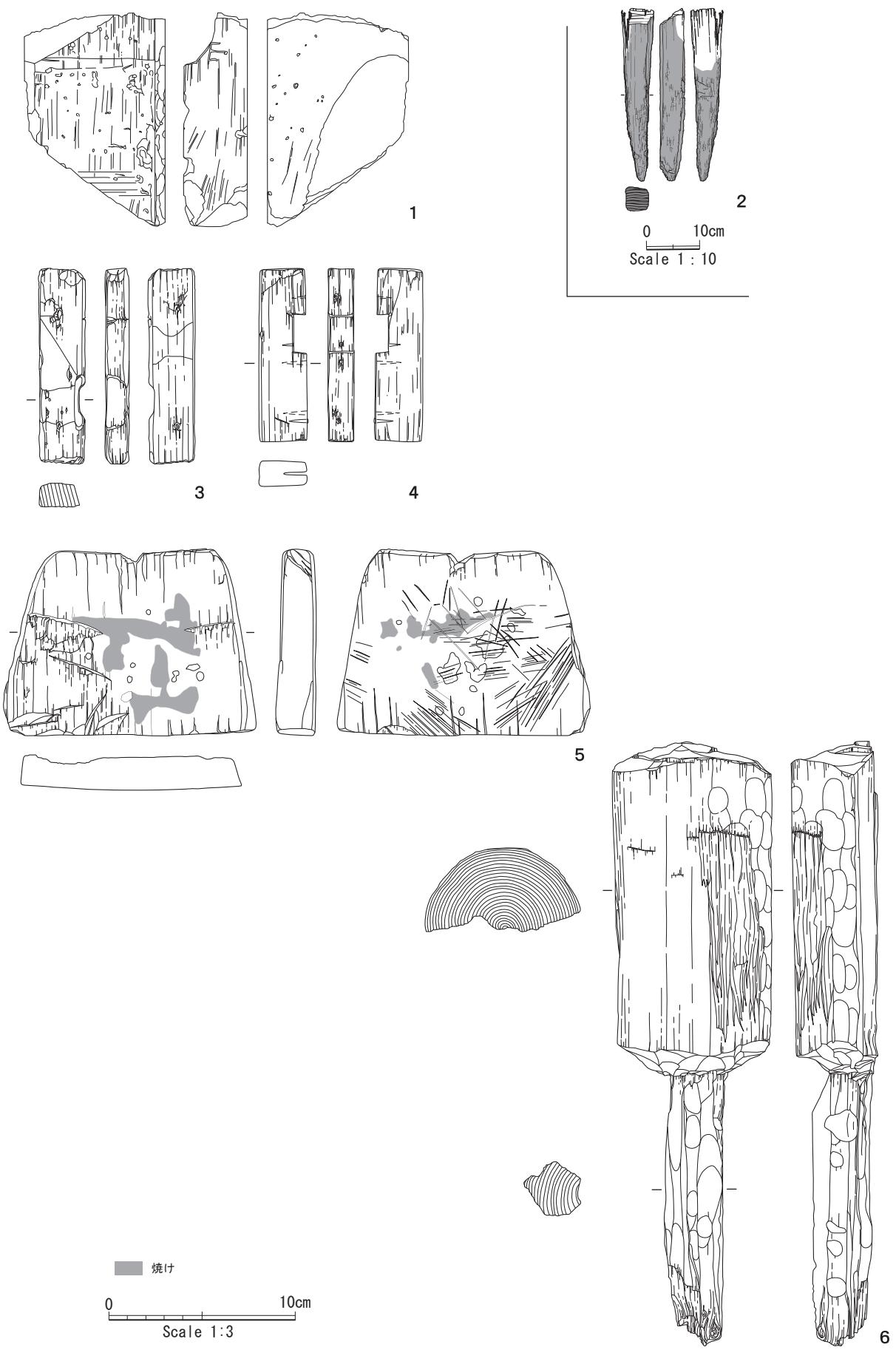


図24 堀跡3出土遺物

#### (4) 遺物

遺構以外の遺物は、陶磁器片 406 点、土陶磁製品 2 点、鉄製品 13 点、石製品・礫 13 点、木製品 2 点、革製品 9 点、合計 445 点である。調査区全域から出土した。

##### 1) 陶磁器・土器

**磁器** 大半が肥前産である。図 25-1～11 が碗類。1 は白磁の小坏。TR 9 出土。17 世紀後半。2～7・9・11 は染付の碗。2 は小碗で TR 2 出土。3 は雁とみられる文様が描かれている。TR 5 出土。17 世紀中葉から後葉。4 は中碗で、外面のみ二重網目文、畳付内には渦福が描かれている。TR 3 出土。18 世紀前半。5 は碗の体部破片。TR 1 の近代の搅乱から出土。18 世紀。6・7 は瀬戸・美濃焼の小碗。いずれも TR 6 搅乱から 4 個体出土した。19 世紀中葉。8 は白磁の碗。TR 9 出土。9・10 はいわゆる高台無釉の碗で、9 は見込みに蝶が描かれている。TR 9 出土。1630～50 年代。10 は青磁。TR 10 出土。11 は体部～底部の破片。TR 11 出土。12～20 が皿類。12 は小皿の口縁部破片。13～16 は波佐見系の見込み蛇ノ目釉剥ぎの小皿。16 は 17 世紀末から 18 世紀。18 は見込みに三方割銀杏文が描かれている小皿。1630～1640 年代。19・20 は大皿の口縁～体部片。19 は折縁で、長吉谷窯でみられるタイプである。図 26-21・22 が水滴。図 26-23 は仏飯器の口縁～体部破片とみられ、蛸唐草文が染付される。肥前V期に比定される。図 26-24 は青磁の鉢。香炉または火入れの可能性もある。

**陶器** 図 26-25～29 は皿。27 は砂目積みの皿。28 は内野山の見込み蛇ノ目釉剥ぎの銅緑釉皿。29 は内面に鉄絵で文様が描かれている大皿の口縁部破片。図 26-30・31 は鉢。図 27-32～36 は擂鉢。32 は口縁部にのみ釉がかかる擂鉢口縁部破片。肥前II期。33 は無台の底部破片。17 世紀後半。34 は付け高台をもつ擂鉢。19 世紀。32～34 は肥前産。35・36 は津軽悪戸焼。37 も悪戸焼で油壺。38 は信楽焼の茶壺。39 は徳利の体部破片で 19 世紀。産地不明。40 は甕の口縁部で T 字形を呈し、端部に面をもつ。体部内面には格子状の叩き目をもつ。肥前産の II から III 期。41 は土瓶か土鍋の底部破片。

**土器** 図 27-42～47 はいずれも土風炉（貝風炉）である。48 は火消し壺の蓋の破片。

##### 2) 磁製品

磁製の色絵人形が 2 点出土した。図 28-49 は 1660 から 1690 年代の製作。50 は俵型の人形で 17 世紀後半。いずれも有田産。

##### 3) 鉄製品

13 点出土した。図 28-51・52 は棒状の鉄製品で、釘とみられる。

##### 4) 石製品

図 28-53 は黒色の粘板岩を使用した用途不明の石製品である。線刻で牛の絵が描かれている。

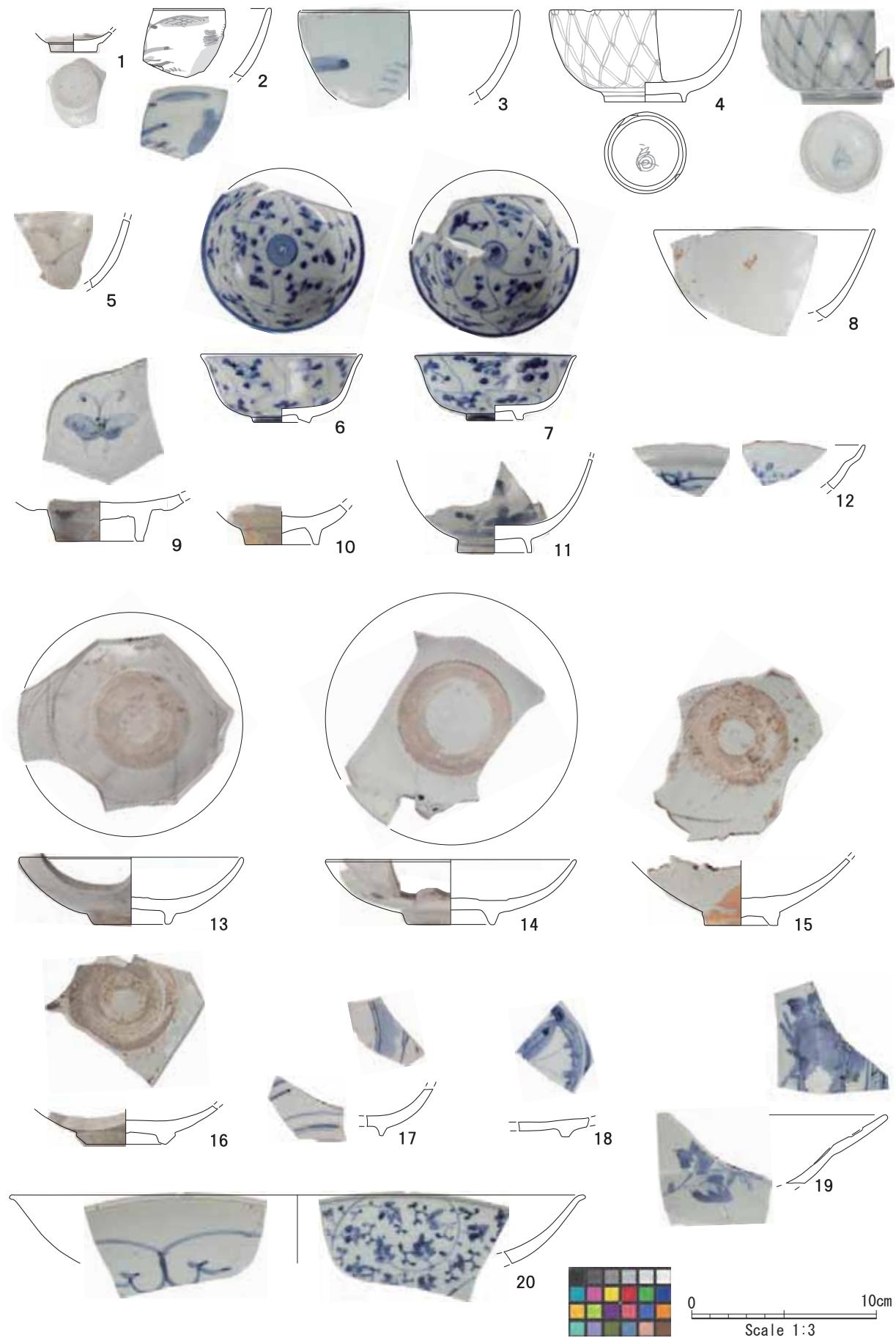


図25 遺構外出土遺物(1)

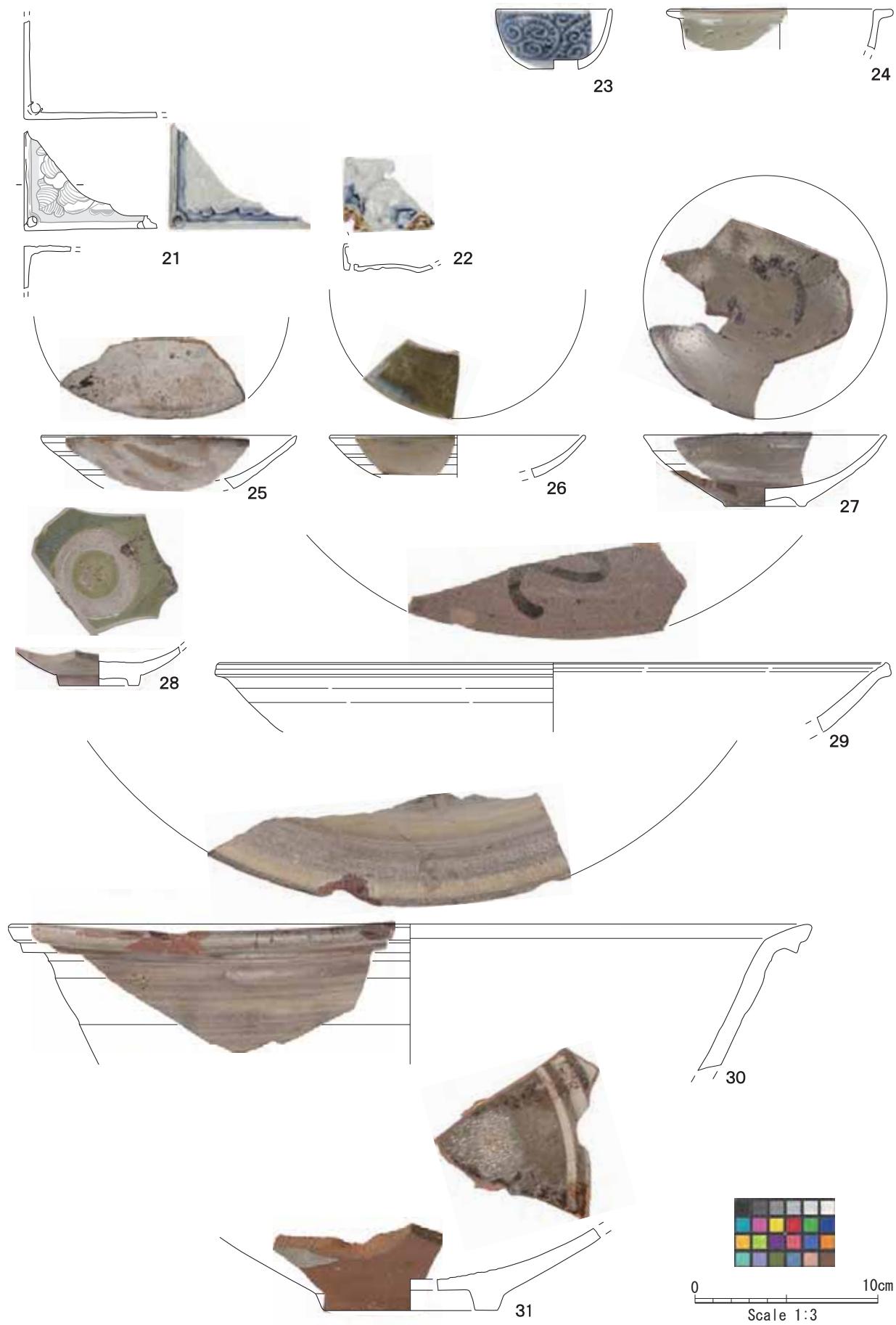


図26 遺構外出土遺物(2)

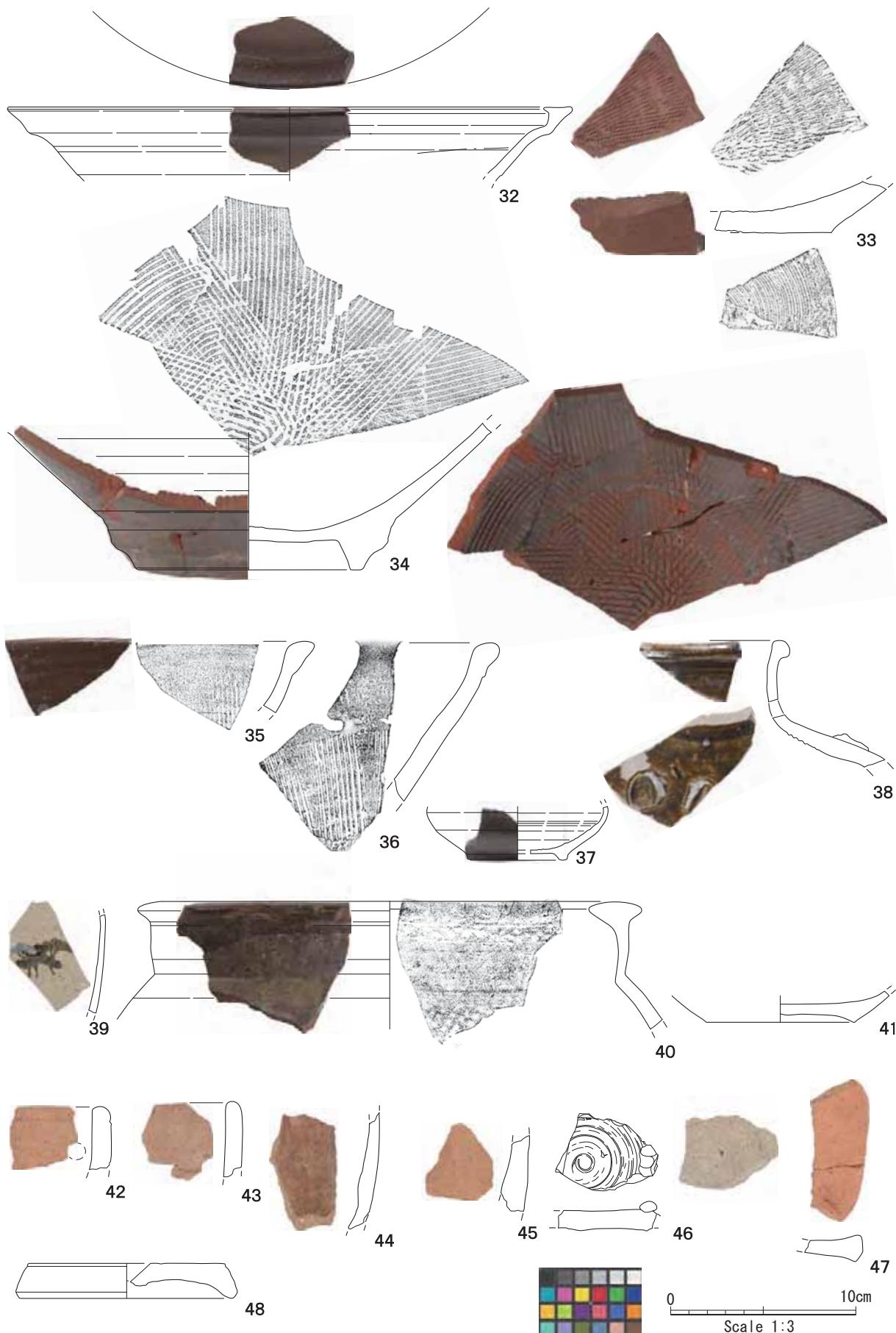


図27 遺構外出土遺物(3)

## (5) まとめ

平成 26 年度から平成 29 年度にわたり、大館城跡の内容を確認するための詳細分布調査を実施した。

遺構・遺物の出土地点をまとめると、表 5・6 のとおりとなり、調査区全体に分布している。したがって、いずれの地点においても発掘調査が必要と判断された。新庁舎は二ノ丸北東部及び内堀・土塁地区に建設されることとなり、平成 28 年度から平成 30 年度にわたり、当市教育委員会が本発掘調査を実施した。

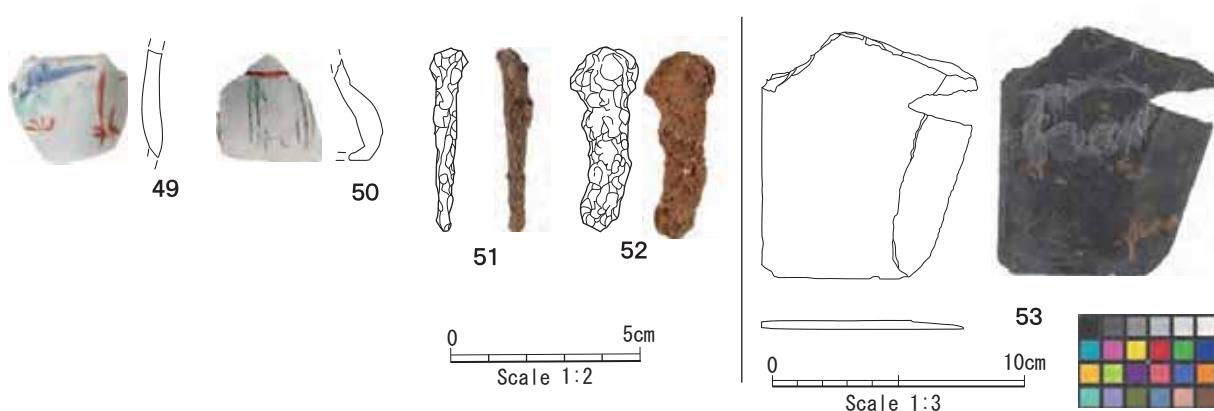


図28 遺構外出土遺物(4)

表3 種別遺構一覧

土坑	溝跡	堀跡	柱穴・柱穴様ピット	石敷遺構	計
11	6	4	152	1	174

表4 遺構計測一覧

遺構種別	遺構番号	平面形	規模			長軸方向N-W	発掘区
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)		
堀跡	S D1	—	(1.80) × —	(1.08) × —	(0.70)	83°	U-11
	S D3	—	(5.40) × —	(3.64) × —	1.75	88°	V・W-12
土坑	S K4	円?	0.92 × —	0.72 × 0.68	0.32	—	W-12
	S K10	長円?	2.58 × —	1.64 × —	0.87	—	M-15

表5 遺構出土遺物一覧

遺構	P	S	W	I	計
S K4	2				2
S K9	2				2
S K10	11			1	12
S K11	1				1
S D1	2		5		7
S D3	35	22	97	4	158
S D410	2				2
計	55	22	102	5	184

表6 遺構外出土遺物一覧

調査区	P	S	C	W	I	革製品	計
T R1	13	3			1		17
T R2	11						11
T R3	14						14
T R4	21				1		22
T R5	68						68
T R6	1				1		2
T R7	4						4
T R8	24						24
T R9	95	9	2	1	5	9	121
T R10	83			1	4		88
T R11	14						14
T R12	7						7
T R13	9						9
T R14	3						3
T R16	1						1
T R18	3						3
T R20	2						2
T R22	3						3
T R23	3						3
T R24	10						10
T R26	13	1					14
T R27	2						2
T R28					1		1
表採	2						2
計	406	13	2	2	13	9	445



調査区近景（T1、北東から）



T1(南から)



T2(南東から)



T3(東から)



調査区近景（T6・T5 西から）



T4(東から)

図版2 調査状況（1）



T5(東から)



T6(北西から)



T7(西から)



T8(東から)



調査区近景(T9、南から)



T9 石敷遺構検出状況(北から)

図版3 調査状況(2)



T10( 北から )



T11( 南から )



調査区近景 ( T13 北から )



調査風景 ( 南から )



T12( 南東から )



T13( 南から )

図版4 調査状況 (3)



T13( 北から )



T12、T13( 南から )



T14( 東から )



T15( 南から )



T16( 南から )

図版5 調査状況(4)



調査区近景 T17～21(西から)



T18調査風景(南西から)



T17調査状況(南から)



T17堀跡410(南東から)



T17堀跡410断面(東から)



T18(東から)



T19(南から)

図版6 調査状況(5)



T20(東から)



T21(南から)



調査区近景( T 22 南西から)



調査風景( 南から)



T22( 南から )



T22( 南東から )



T22溝跡検出状況( 西から )

図版 7 調査状況(6)



調査区近景（T23付近、南から）



T23(南から)



調査地近景（T24・T25北東から）



T24(東から)



T25(東から)



T26(南から)

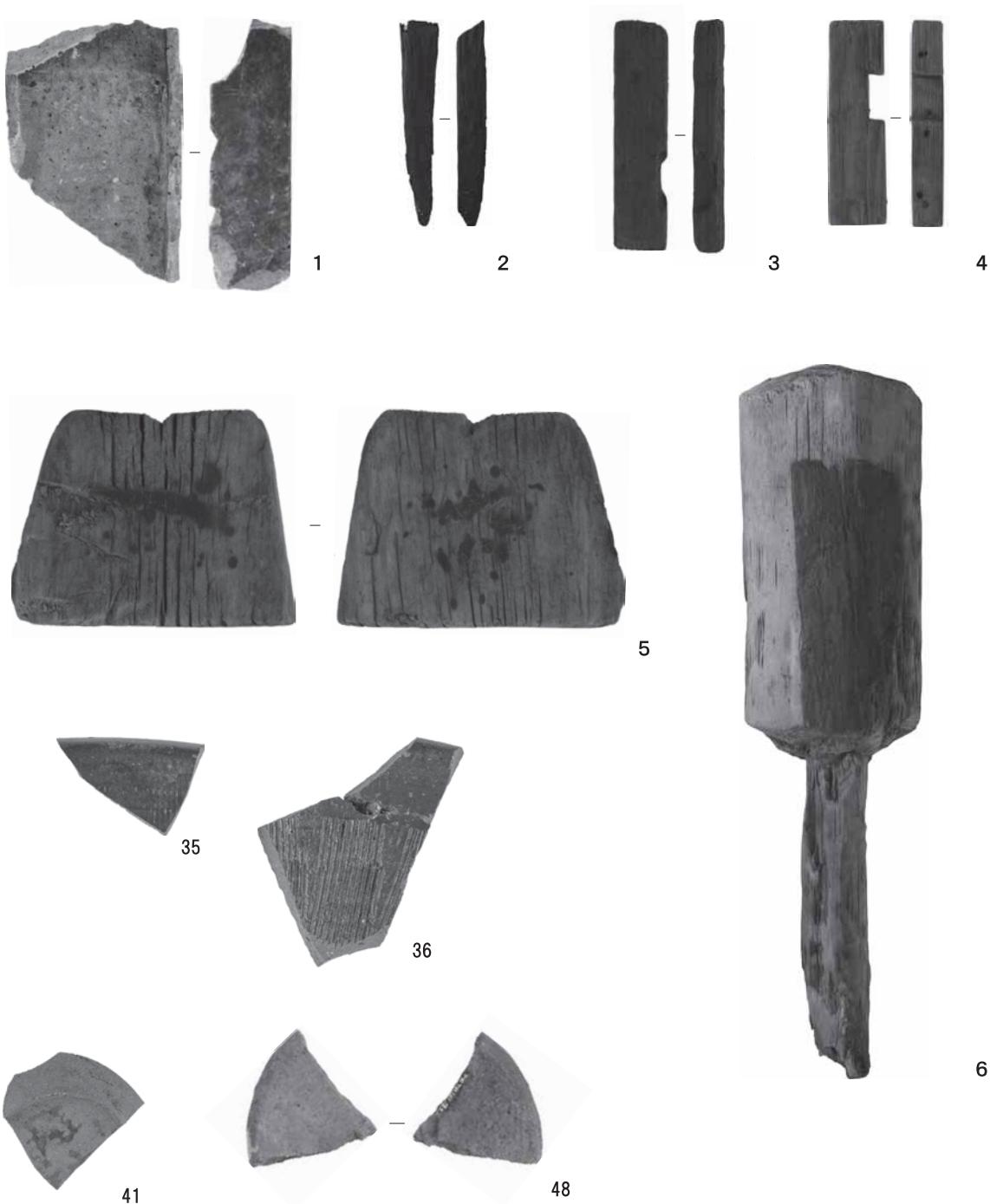


T27(南から)



T28 (東から)

図版8 調査状況(7)



図版9 出土遺物



1 石敷遺構出土革製品



2 破損箇所の表面



3 破損箇所の表面

2・3 片岡太郎 弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター画像提供  
図版 10 石敷遺構出土革製品

### 3 上川沿地区（農地集積加速化基盤整備事業）

#### (1) 調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館段丘南部の微高地に位置する。調査地は池内字砂袋岱、餌釣字大杉、小館花字古館下、山館字中島ほかで、平成26～28年度に実施した。

大館市内の遺跡は、米代川とその支流域の付近の丘陵や台地上に所在するものが多く、大館段丘南縁の台地上には南東から北西へ山館上ノ山遺跡、山館跡、餌釣遺跡、餌釣館跡、上野遺跡、池内遺跡、萩ノ台Ⅱ遺跡、小館花館跡、小館町遺跡と数多くの遺跡が分布する。対象地は、これらに隣接しており、遺跡の所在する可能性がある地区であることから調査を実施した。調査地内の標高は、46～60mほどである。

#### (2) 調査の内容

調査対象地内に任意のトレーナー及びテストピットを設定し、掘削した。掘削は全て人力で行い、遺構・遺物の有無等を調査した。以下に基本層序を示す。

I層 表土及び耕作土。

II層 暗褐色～にぶい黄褐色を呈する土層。TR17・26でのみ確認された。

III層 黒色を呈する腐植土層である。旧表土と考えられる。

IV層 黒褐色～暗褐色を呈する土層である。III層とV層の漸移層である。

V層 褐色～黄褐色を呈するシラス層。

VI層 暗灰黄色～オリーブ褐色を呈する砂層。米代川の氾濫に由来する砂層と考えられ、互層状に堆積している。

VII層 オリーブ黒色を呈する砂層。

#### (3) まとめ

調査の結果、遺構・遺物は確認されず、今回調査を実施した地区については、埋蔵文化財は存在しないものと考えられ、本調査は不要と判断した。

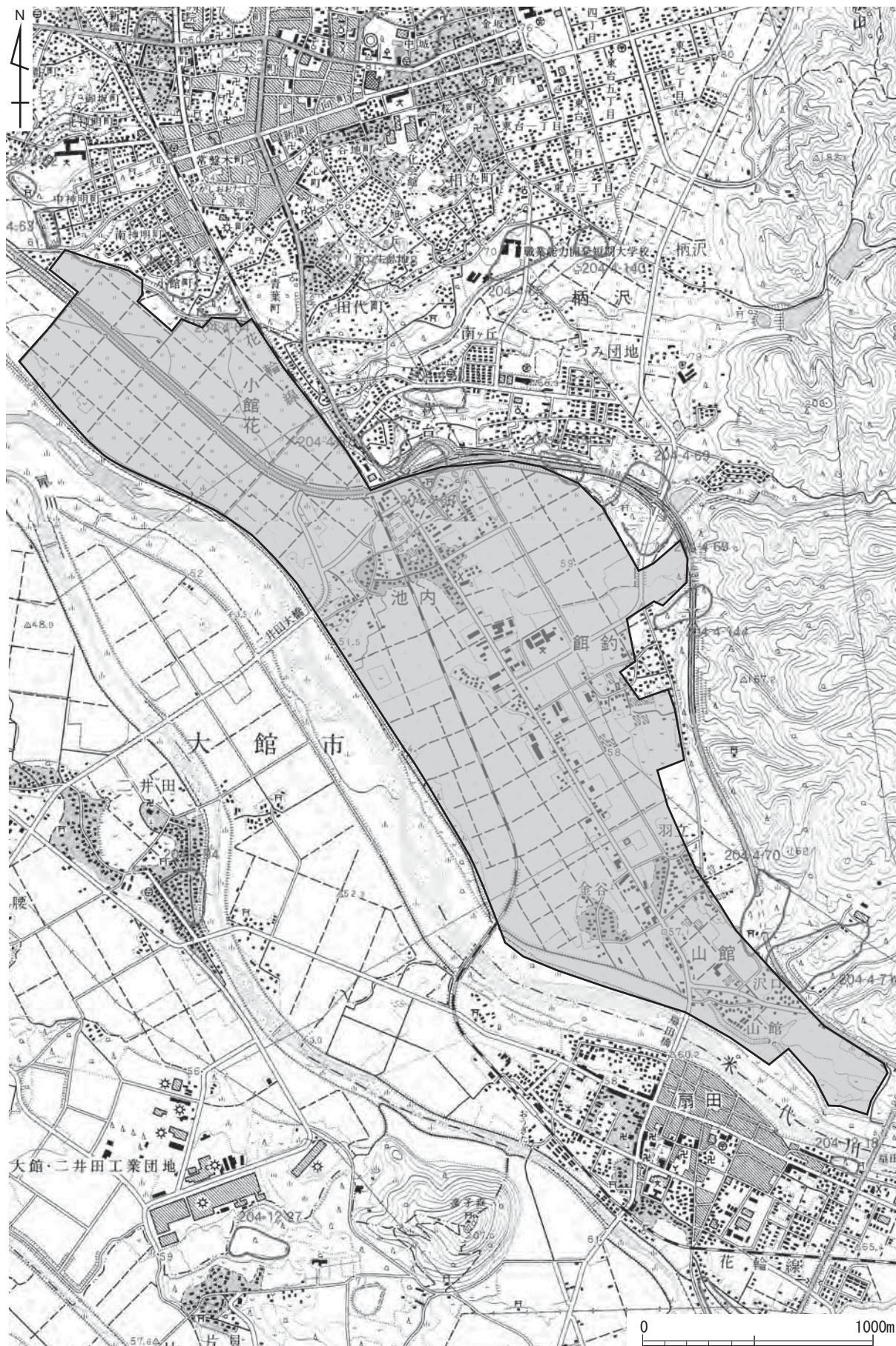


図 29 調査区と周辺の地形 (1 : 25,000)



図 30 調査位置図 (1) (1 : 2,500)

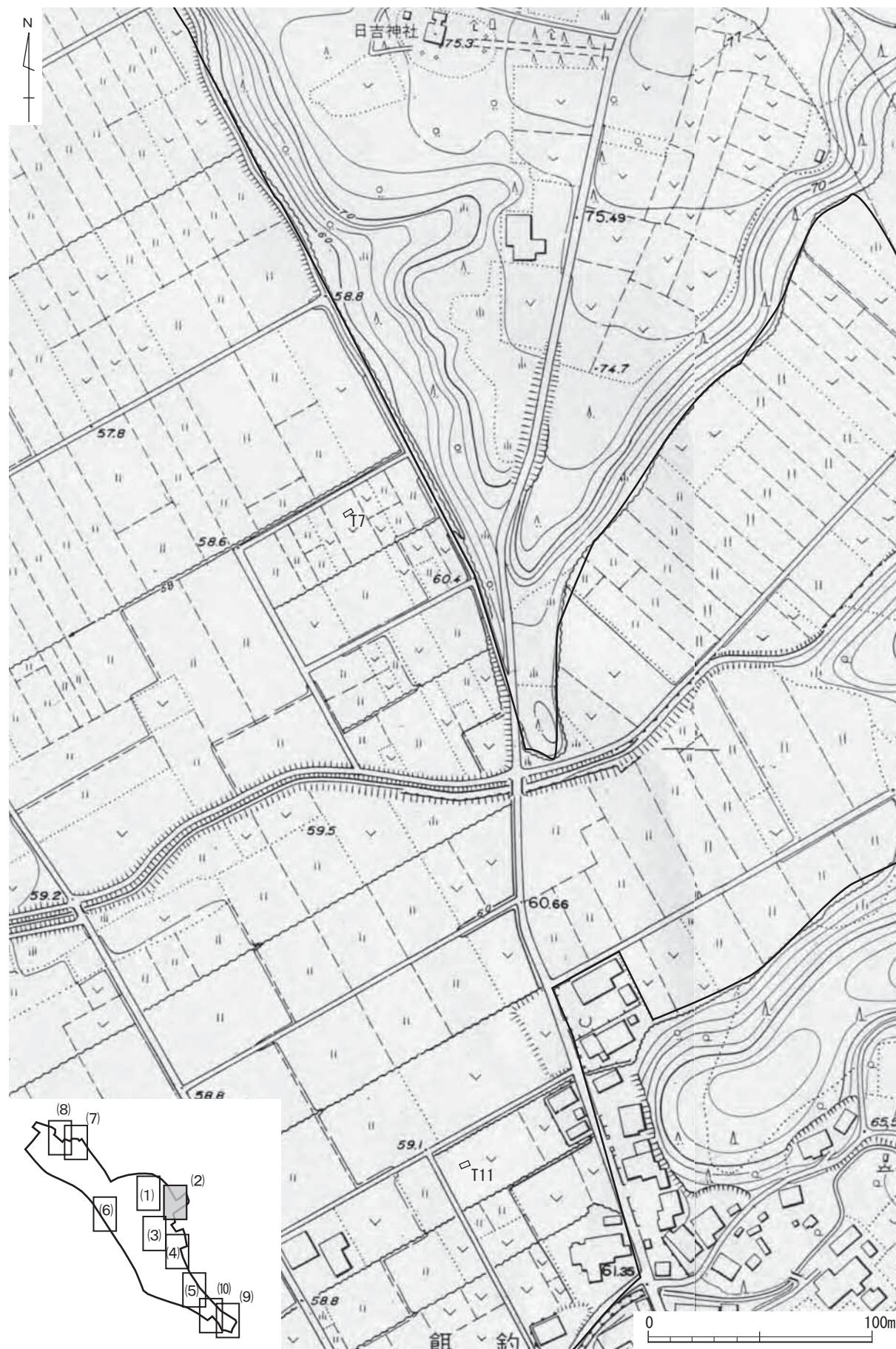


図31 調査位置図(2)(1:2,500)



図 32 調査位置図 (3) (1:2,500)



図 33 調査位置図 (4) (1:2,500)



図 34 調査位置図 (5) (1:2,500)



図35 調査位置図(6) (1:2,500)



図 36 調査位置図 (7) (1:2,500)



図37 調査位置図(8) (1:2,500)



図 38 調査位置図 (9) (1:2,500)

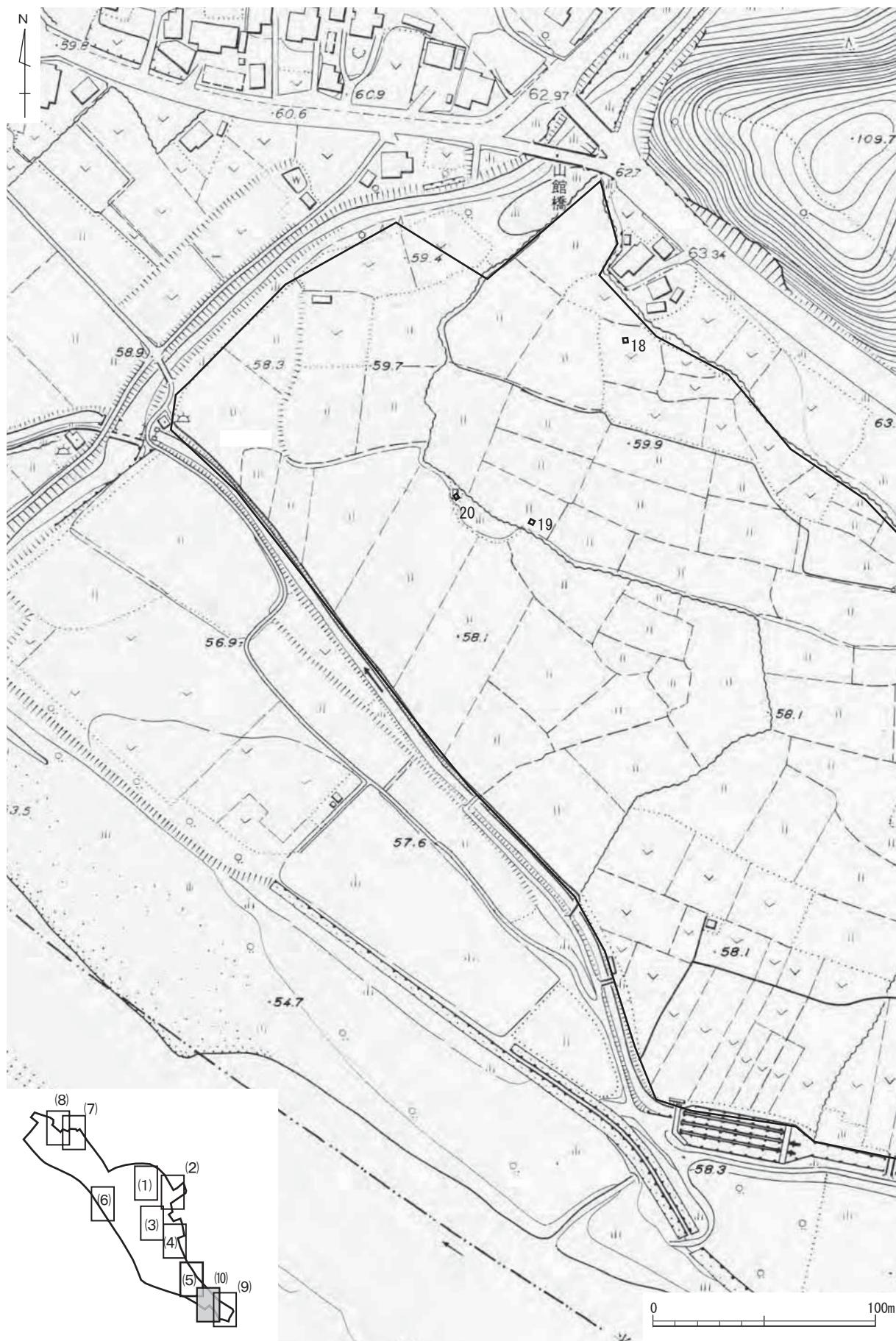


図39 調査位置図(10) (1:2,500)

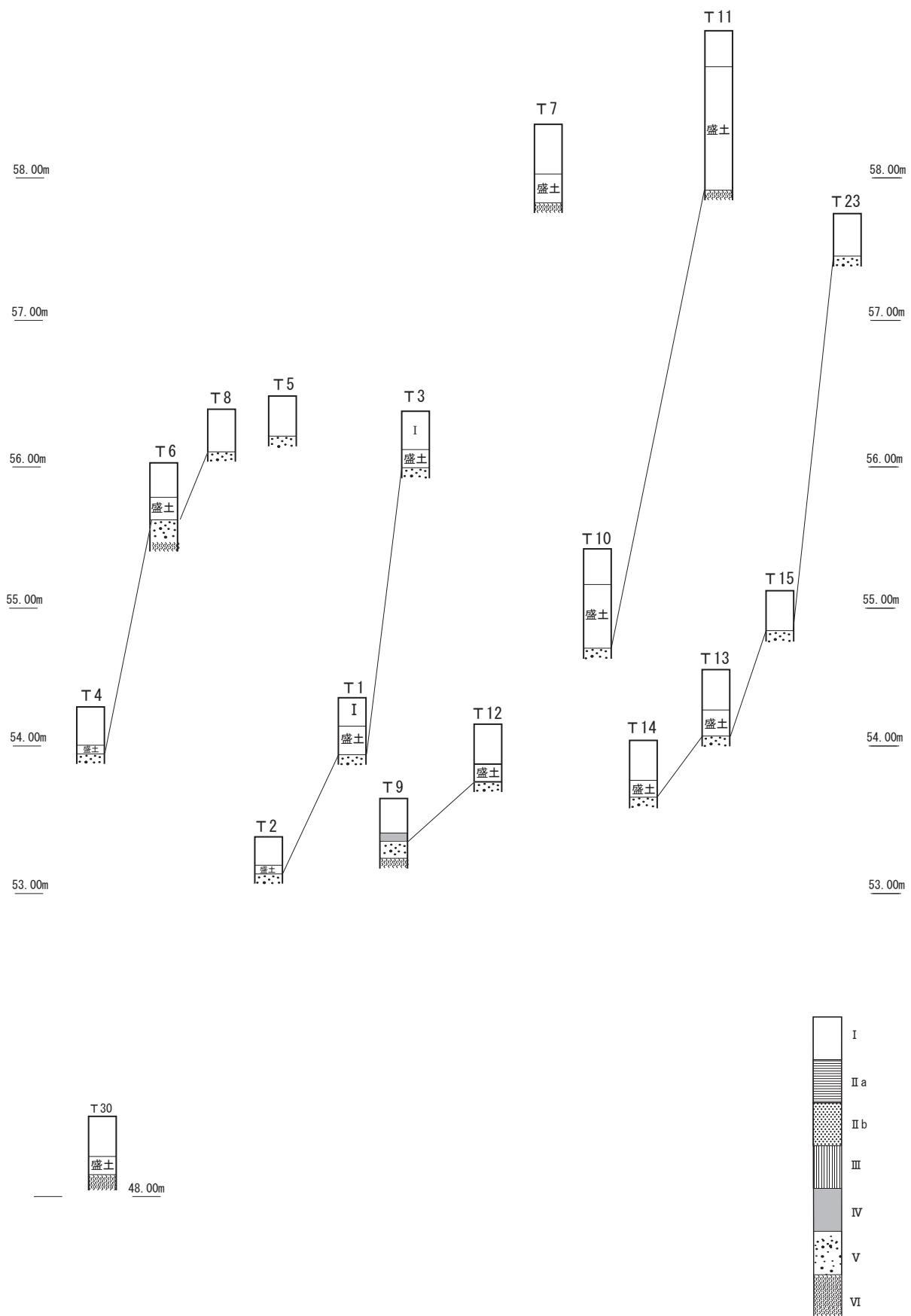


図 40 土層柱状図 (1)

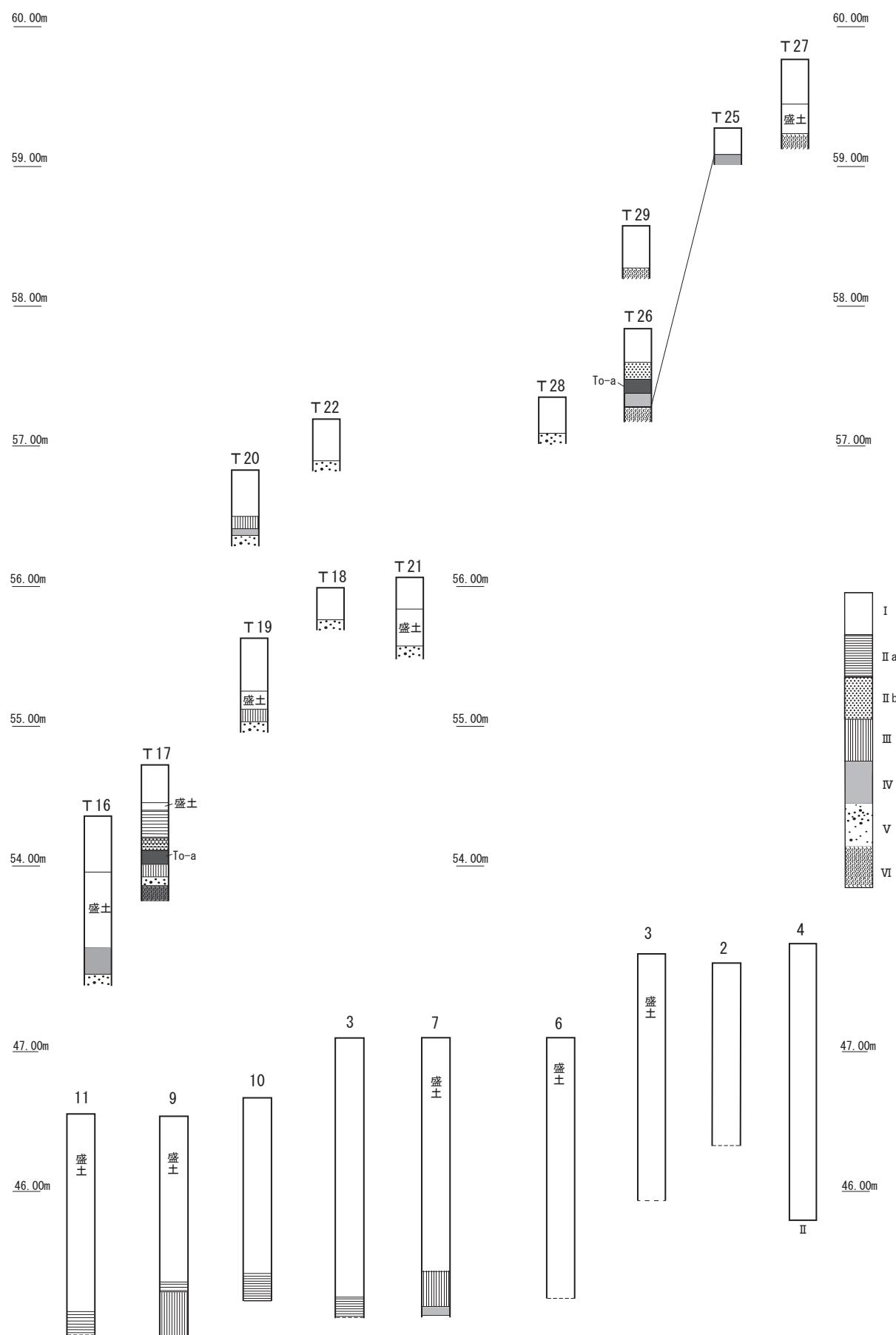


図 41 土層柱状図 (2)

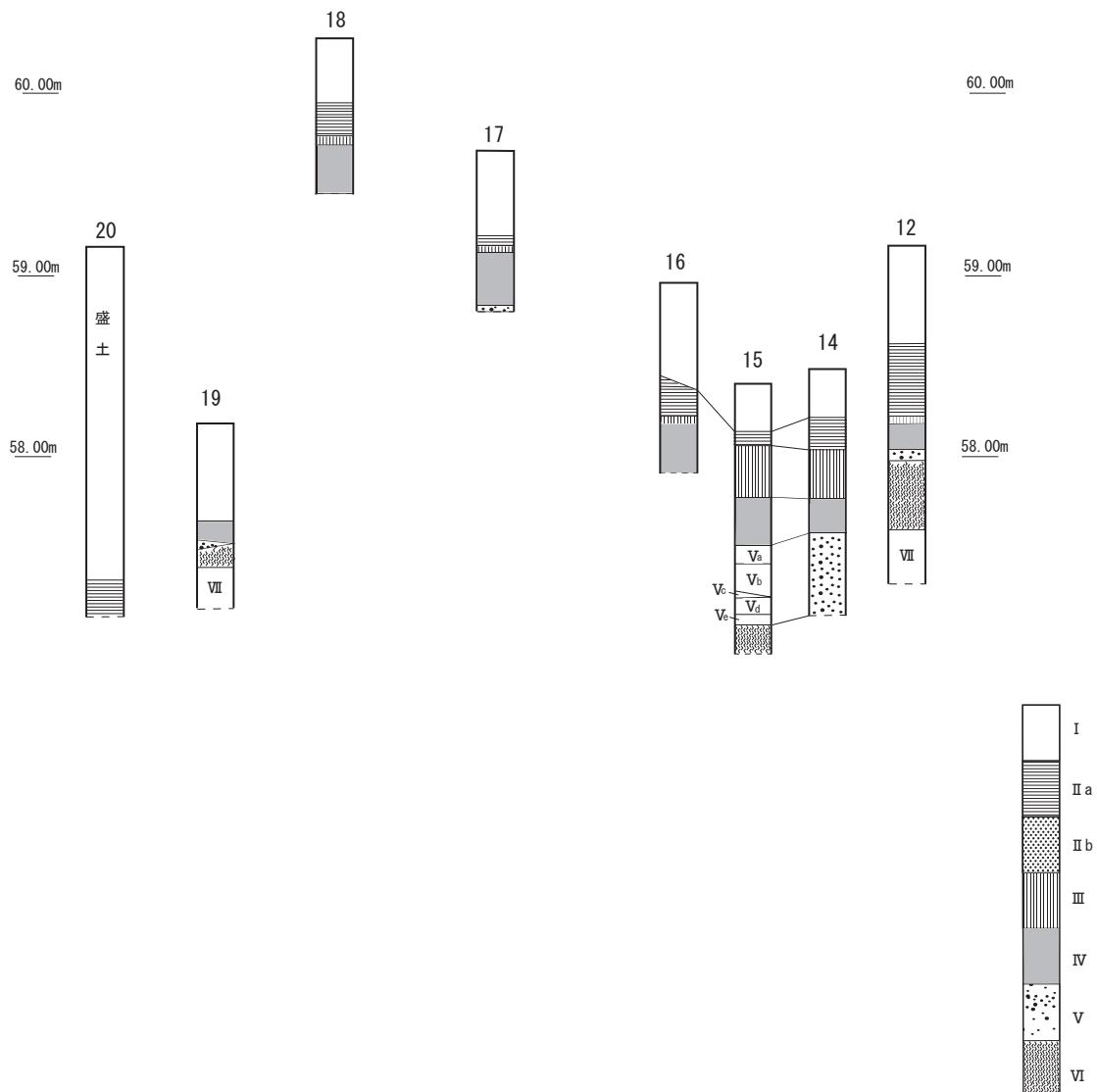


図 42 土層柱状図 (3)



T3~8調査区遠景(南西から)



T1 調査状況



T1 ( 東から )



T19 ( 東から )



T25 ( 西から )



T30 ( 西から )



11

図版 11 調査状況



12

## 4 土飛山館跡①（公共下水道事業）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館市中心部の大館段丘の北側、長木川左岸の段丘北縁が北に向かって突出するところに土飛山館跡は所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 16 分 21 秒、東経 140 度 33 分 12 秒（世界測地系）で、標高は 63～65m である。

大館段丘北縁には、同様にこの突出した地形に立地する城館跡が存在する。遺跡周辺では東側に近世の城館跡である大館城跡、北西側には縄繩文時代と中世の遺跡である片山館コ遺跡が所在する。

### (2) 調査の内容

公共下水道工事によって掘削される範囲内を対象として実施した。重機を用いて盛土及び黒色土を除去した後、人力にて基盤層に相当する黄褐色土層（V 層）まで掘り下げ、底面と壁面を精査し、埋蔵文化財の有無等を調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色土層の上に腐植土層が堆積する。

I 層 表土および盛土。

II 層 黒色を呈する腐植土層で、遺物包含層である。

III 層 黒色を呈する腐植土層で、遺物包含層である。II 層より若干明るい。

IV 層 黒～暗褐色を呈する土層。III 層と V 層の漸移層である。

V 層 黄褐色～明黄褐色を呈する砂質土層。十和田火山起源の火山灰二次堆積層とみられる。

VI 層 明黄褐色を呈する砂層。十和田火山起源の火山灰二次堆積層とみられる。

### (3) まとめ

調査の結果、調査区全体から平安時代の遺構・遺物が確認されたことから、工事に先立ち発掘調査が必要と判断した。よって、確認調査が終了した部分の発掘調査にも並行して取り掛かり、平成 27 年 12 月 17 日まで本調査を実施した。調査概要及び調査結果については来年度報告の予定である。

表 7 種別遺構一覧

堅穴建物跡	土坑	溝跡	堀跡	製鉄遺構	焼土遺構	柱穴・柱穴 様ピット	計
7	1	6	1	2	4	23	44

表 8 出土遺物一覧

分類 調査区遺構	P				S	I	合計			
	7		8							
	1	2	1	2						
S D 14		5	12	5	22	3	25			
S I 17		10			10	1	19			
2		7			7	1	8			
3		1	2		3	2	6			
4	2	161	1		164	1	204			
5	4	73			77	38	115			
6	5	176	1	3	185	7	297			
合計	11	433	16	8	468	10	866			



図 43 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

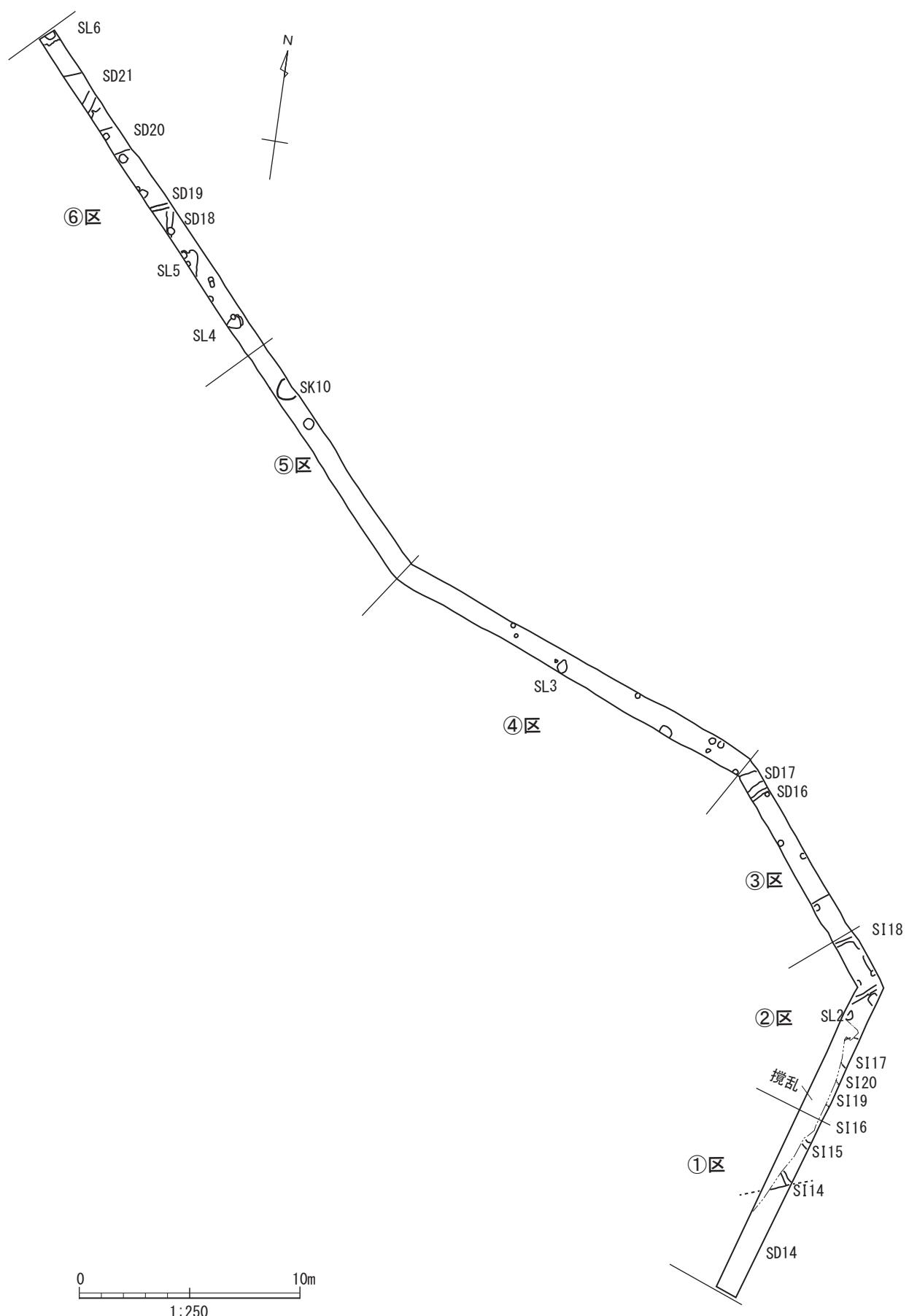


図 44 検出遺構図



①、②区近景（南から）



③～⑤区近景（南東から）



①区調査状況（北から）



②区調査状況（北から）



③区調査状況（南東から）

図版 12 調査状況

## 5 土飛山館跡②（集合住宅建設事業）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

土飛山館跡の位置と周辺の環境については、前節で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度16分22秒、東経140度33分11秒（世界測地系）、標高は65mである。

### (2) 調査の内容

トレンチは、基本的に2m幅とし、調査対象範囲内を主として、任意で設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層に相当する黄褐色土層（V層）まで掘り下げ、遺構の記録・遺物の収集等を行った。出土遺物は、層位ごと、トレンチごとに取り上げた。

調査地内の基本層序は、前節で述べたとおりである。なお、調査区内は、以前宅地であったことから宅地造成の掘削・削平によりⅡ～Ⅳ層が消失して、基盤層に相当するV層に盛土のI層が堆積するだけであった。

### (3) 遺構

本遺跡は、空堀で区画された郭が連なった館跡である。主郭と考えられる遺跡北側の段丘面を囲むように空堀が配されているとみられ、幅約10m、深さ1mほどの溝状のくぼみとして現地形から空堀跡を確認できる。このくぼみ上にアパート建設が計画されたため、くぼみに対しほぼ直交する方にトレンチを設定した。調査の結果、TR1・2から土壙1条、空堀1条、溝跡1条を確認した。

#### 1) 土壙

##### **土壙5**

TR1を調査中に人為的なロームの再堆積層が検出されたことから発見した。土壙の西側半分ほどを調査したのみで、東側は調査区外に拡がる。規模は、幅3.2m以上で、現存高さは1.9mである。盛土の色調と堆積状況から時期差があり、2時期に分かれると考えられる。どの程度の時期差があったかは不明である。時期の新しい方は、堆積順に黒褐色土層（25～30層）、地山ロームを主体とする黄褐色土層（31、32、34～44、82層）、黒褐色土層（45～50層）とに分けられる。時期の古い方は、黒～暗褐色土層を主体としてまれに黄褐色土を挟むように盛土しており（51～81層）、特に上部では2～10cmの厚さで黒色土と黄褐色ロームを交互に薄く築き固めている。また、どちらも土壙の盛土を除去すると空堀とほぼ並行する溝状の掘り込みが確認されたことから、土壙が築かれる以前は、溝が3重に巡っていた可能性も考えられる。堀跡14と土壙を合わせると幅10.7m以上で、土壙頂点から堀跡底面まで比高差は2.8mと規模は大きい。遺物は、須恵器1点、鉄関連遺物44点が出土した。出土した鉄滓の多くは、下層の黒～黒褐色土より出土している。図48-1は土壙下層の黒色土層（77層）より出土した須恵器の甕体部破片。小破片であり、器形はわからない。外面は縄目状の斜交する平行文、内面が鳥足状文である。断面は還元せず、色調はにぶい赤褐色を呈する。五所川原MD7号出土品（五所川原市教育委員会2003）に類似する。10世紀前半に比定される。

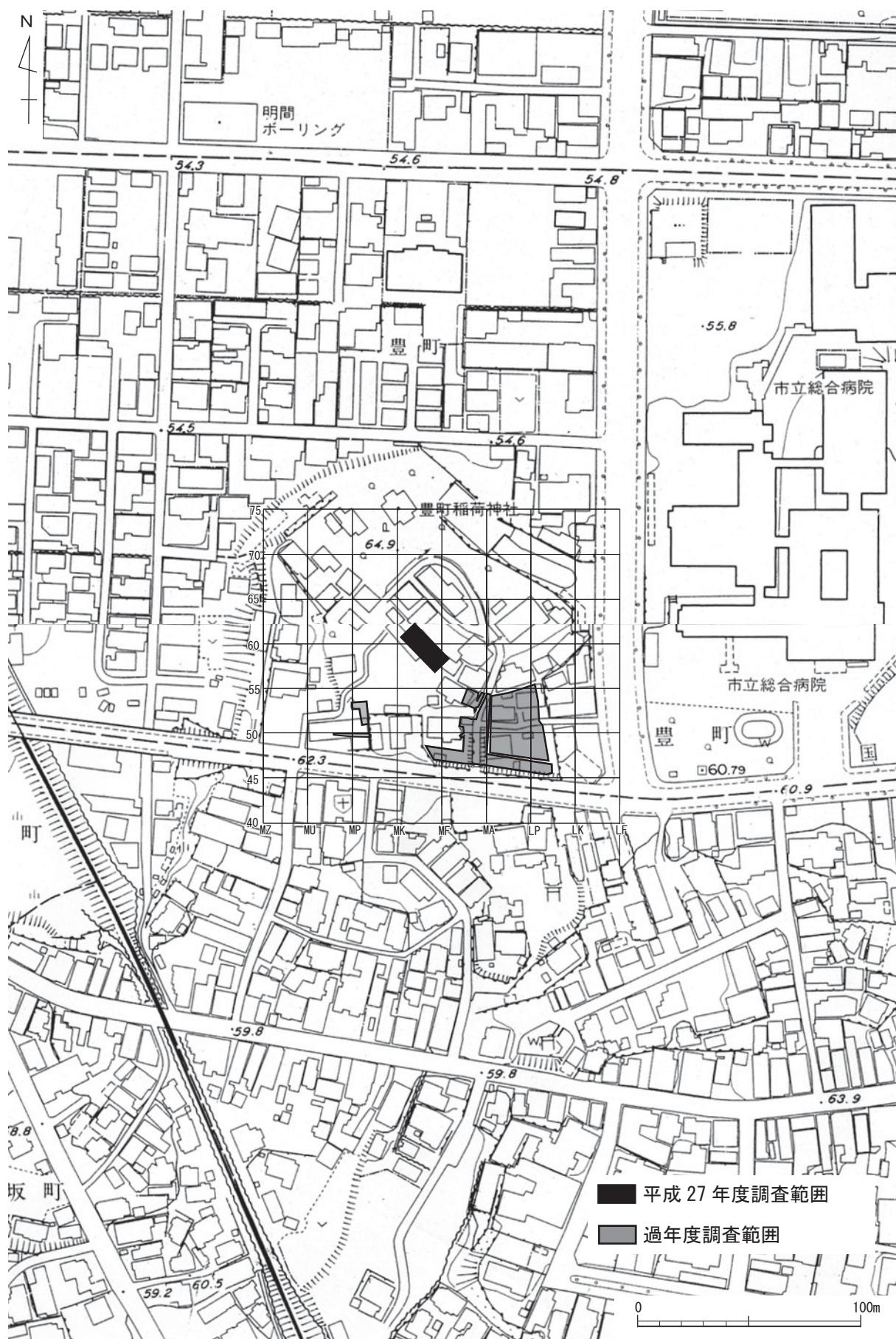


図 45 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

## 2) 空堀

### 空堀 14

TR 1・2にまたがって位置する。両トレンチを調査中に黒色土の落ち込みを発見した。底面及び堀の北端をTR 1より、南端をTR 2より確認した。両トレンチにより空堀の幅を確認できた。幅は7.1mほどで、確認面からの深さは1.5mほどで、底面はほぼ平坦である。北西から南東方向に台地を縦断する。空堀の北東側に土壙5が確認され、南側では2mほど隔てて並行する溝跡をもう1条検出した。遺物は、土師器10点、株洲系陶器1点、近世陶器1点、石製品・礫4点、鉄関連遺物210点が出土した。鉄滓が多量に出土したが、その多くは下層からの出土で、廃棄された可能性も考えられる。また、株洲系陶器は、堀下層のほぼ底面から土師器や鉄滓、羽口などとともに出土した。図48-2は株洲系陶器の甕体部。外面の叩き目はきめが細かい。内面は円形押圧痕である。外面には自然釉がかかり、黒色で堅緻。図48-3は自然礫を転用した砥石で、表面に砥面を有する。

## 3) 溝跡

### 溝跡 15

TR 2を調査中に黒色土の落ち込みを発見した。空堀14とは約2mの平坦面を隔てて並行し、同様に北西から南東方向に走る。確認した範囲内の幅は1.5m以上で、深さは確認面から0.6m程である。空堀14と溝跡15が二重に巡っていたと考えられる。遺物は、鉄滓14点が出土した。

## (4) 遺物

遺構外の遺物は、表土から土器や陶磁器など104点が出土した。図48-4～6はいずれもTR 1の表土から出土した。4は株洲系陶器の壺。叩き目の条線は比較的太い。外面には自然釉がかかり、オリーブ黒色で堅緻。TR 1表土出土。5・6は染付磁器。5は肥前系の広東形の中碗。見込みに「寿」の崩し字が書かれる。1780～1840年代に比定される。6は肥前産の皿。18世紀前半。

## (5) まとめ

調査の結果、調査区は以前宅地として使用されていたため、遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層は残存していないなかつたが、平安時代から中世の遺構・遺物が確認された。よって、今回の調査範囲において開発を行う場合には保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、発掘調査が妥当と判断した。

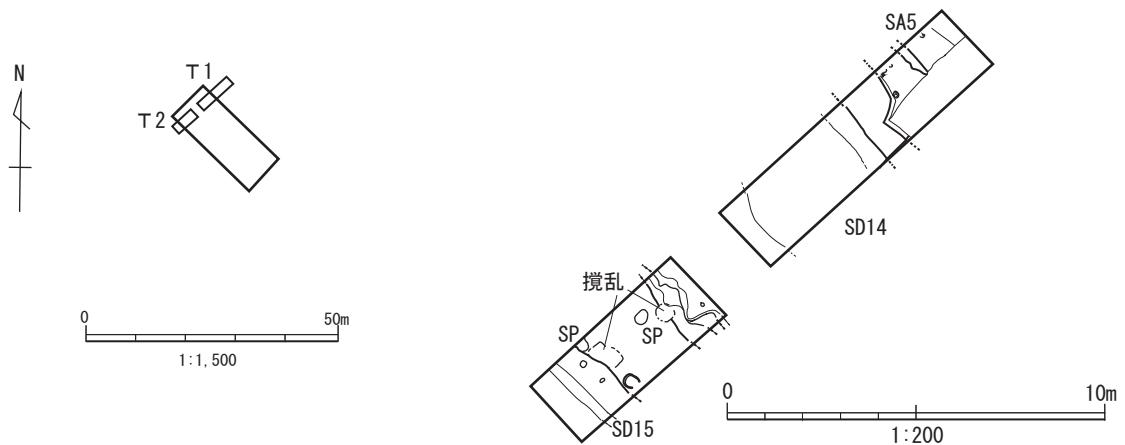


図46 調査位置と検出遺構図



図 47 堀跡 14・土塁 5

## S D 14

- 1 10YR2/2黒褐色 砂。締まり有り。粘性なし。  
 2 10YR1.7/1黒色 碳少量混入。締まり、粘性有り。  
 3 10YR2/3黒褐色 砂質。パミス(Φ2~10mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。  
 4 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質。黒褐色土多量混入。パミス(Φ1~3mm)少量混入。締まり有り。粘性なし。  
 5 10YR2/2黒褐色 パミス(Φ1~10mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。  
 6 10YR2/1黒色 パミス(Φ2.5mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。  
 7 10YR2/2黒褐色 碳少量混入。締まりよし。粘性弱。  
 8 10YR2/2黒褐色 炭化物、スラグ、礫少量混入。締まり有り。粘性弱。  
 9 10YR3/3暗褐色 パミス(Φ1~4mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。  
 10 10YR3/3暗褐色 砂質。パミス(Φ1~5mm)微量混入。締まりよし。  
 11 10YR4/2灰黄褐色 砂質。小礫少量混入。固く締まる。粘性弱。  
 12 10YR2/3黒褐色 砂質。固く締まる。粘性なし。  
 13 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質。パミス(Φ2~5mm)多量混入。固く締まる。粘性なし。  
 14 10YR2/2黒褐色 スラグ多量、礫少量混入。締まり、粘性有り。  
 15 10YR4/2灰黄褐色 砂質。締まり有り。粘性弱。  
 16 10YR3/2黒褐色 砂質。締まり有り。粘性弱。  
 17 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質。締まり有り。粘性弱。人為的埋土。  
 18 10YR3/3暗褐色 砂質。締まり有り。粘性弱。  
 19 10YR2/1黒色 締まり有り。粘性弱。  
 20 2.5Y4/2暗灰黄色 砂。締まり有り。粘性なし。  
 21 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂。締まり有り。粘性なし。  
 22 2.5Y4/4オリーブ褐色 砂。締まり有り。粘性なし。  
 23 2.5Y5/2暗灰黄色 砂。礫少量混入。締まり、粘性なし。  
 24 2.5Y5/2暗灰黄色 砂。締まり有り。粘性なし。

## S A 5

- 25 10YR3/2黒褐色 砂質。締まり弱。粘性なし。  
 26 10YR2/2黒褐色 締まりなし。粘性弱。  
 27 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂質。パミス(Φ1~2mm)微量混入。締まり、粘性弱。  
 28 10YR3/2黒褐色 砂質。パミス(Φ1~10mm)微量、礫、V少量混入。締まり弱。粘性なし。  
 29 10YR2/2黒褐色 砂質。礫少量混入。締まり、粘性弱。  
 30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂質。パミス(Φ3mm)微量、礫(Φ10mm以下)少量混入。締まりよし。粘性なし。  
 31 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト。パミス(Φ5~10mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。  
 32 2.5Y2/2暗オリーブ褐色 砂質。パミス(Φ2~25mm)少量混入。締まり有り。粘性なし。  
 33 10YR3/2黒褐色 砂質。礫(Φ6mm以下)少量混入。締まりなし。粘性弱。  
 34 10YR6/6明黄褐色 V主体。締まり、粘性なし。  
 35 10YR3/2黒褐色 締まりなし。粘性弱。  
 36 10YR2/3黒褐色 パミス(Φ3~10mm)多量混入。締まり有り。粘性なし。  
 37 10YR4/4褐色 砂質。V主体。パミス(Φ2mm)微量混入。締まりよし。粘性なし。  
 38 10YR4/3にぶい黄褐色 V主体。締まり弱。粘性なし。  
 39 10YR4/3にぶい黄褐色 V主体。締まり、粘性なし。  
 40 7.5YR4/4褐色 砂。締まり。粘性なし。  
 41 10YR8/3浅黄橙色 砂質。V.締まりよし。粘性なし。  
 42 10YR3/2黒褐色 砂質。パミス(Φ2~5mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。  
 43 10YR4/3にぶい黄橙色 砂質。礫(Φ3~5mm)。パミス(Φ2~12mm)微量混入。柔かい。粘性弱。  
 44 2.5Y4/4オリーブ褐色 砂。V主体。パミス(Φ1~30mm)非常に多量混入。締まり有り。粘性なし。  
 45 10YR2/1黒色 締まりよし。粘性弱。  
 46 10YR2/2黒褐色 パミス(Φ1~5mm)微量、礫(Φ50mm)以下少量混入。締まり、粘性有り。  
 47 10YR2/2黒褐色 パミス(Φ2~1mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。  
 48 10YR2/2黒褐色 炭化物、Vブロック少量混入。締まり有り。粘性弱。  
 49 10YR3/1黒褐色 砂質。Vブロック少量混入。締まり有り。粘性弱。  
 50 10YR3/2黒褐色 砂質。締まりなし。粘性弱。  
 51 10YR2/2黒褐色 パミス(Φ5mm)、Vブロック、礫微量混入。締まり、粘性有り。  
 52 10YR2/2黒褐色 磕(Φ5~15mm)少量混入。固く締まる。粘性弱。  
 53 10YR3/2黒褐色 磕(Φ5~10mm)多量混入。固く締まる。粘性弱。  
 54 10YR2/3黒褐色 パミス(Φ2~4mm)微量。Vブロック少量混入。締まり、粘性有り。  
 55 10YR2/1黒色 V粒少量混入。締まり、粘性有り。  
 56 10YR2/2黒褐色 V粒少量混入。締まりよし。粘性弱。  
 57 10YR2/1黒色 炭化物、Vブロック少量混入。固く締まる。粘性有り。  
 58 10YR3/1黒褐色 砂質。Vブロック少量混入。固く締まる。粘性弱。  
 59 10YR2/1黒色 Vブロック少量混入。締まりよし。粘性弱。  
 60 10YR2/2黒褐色 炭化物、白色パミス微量、礫(Φ5~10mm)微量混入。締まり、粘性有り。  
 61 10YR2/3黒褐色 砂質。V>II。締まりよし。粘性弱。  
 62 10YR2/1黒色 炭化物、V粒微量混入。締まり、粘性有り。  
 63 10YR4/3にぶい黄褐色 砂。V主体。パミス(Φ2~6mm)微量混入。締まり、粘性なし。  
 64 10YR3/2黒褐色 砂質。固く締まる。粘性弱。  
 65 10YR3/1黒褐色 パミス(Φ1~3mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。  
 66 10YR2/3黒褐色 炭化物、パミス(Φ2~3mm)微量、V粒少量混入。締まりよし。粘性弱。  
 67 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質。締まり有り。粘性なし。  
 68 10YR2/1黒色 V粒少量混入。締まりよし。粘性弱。

- |    |               |                                     |
|----|---------------|-------------------------------------|
| 69 | 10YR2/3黒褐色    | パミス(Φ5mm)少量、Vブロック非常に多量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 70 | 10YR2/2黒褐色    | パミス(Φ1~5mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。          |
| 71 | 10YR1.7/1黒色   | 黒褐色土、Vブロック非常に多量混入。固く締まる。粘性有り。       |
| 72 | 10YR2/1黒色     | 礫混入。柔かい。粘性弱。                        |
| 73 | 10YR3/3暗褐色    | 砂質。締まり有り。粘性弱。                       |
| 74 | 10YR3/1黒褐色    | 礫(Φ3mm)少量混入。締まり、粘性有り。               |
| 75 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | V。砂。固く締まる。粘性なし。                     |
| 76 | 10YR3/2黒褐色    | 砂。締まりよし。粘性なし。                       |
| 77 | 10YR2/1黒色     | II < V。Vブロック非常に多量混入。締まり、粘性有り。       |
| 78 | 5YR5/8明赤褐色    | V。締まりよし。粘性なし。                       |
| 79 | 2.5Y4/2暗灰黄色   | V主体。礫多量混入。締まりよし。粘性なし。               |
| 80 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | V。固く締まる。粘性なし。                       |
| 81 | 10YR2/2黒褐色    | 砂。固く締まる。粘性なし。                       |
| 82 | 10YR3/2黒褐色    | 締まり弱。粘性なし。                          |

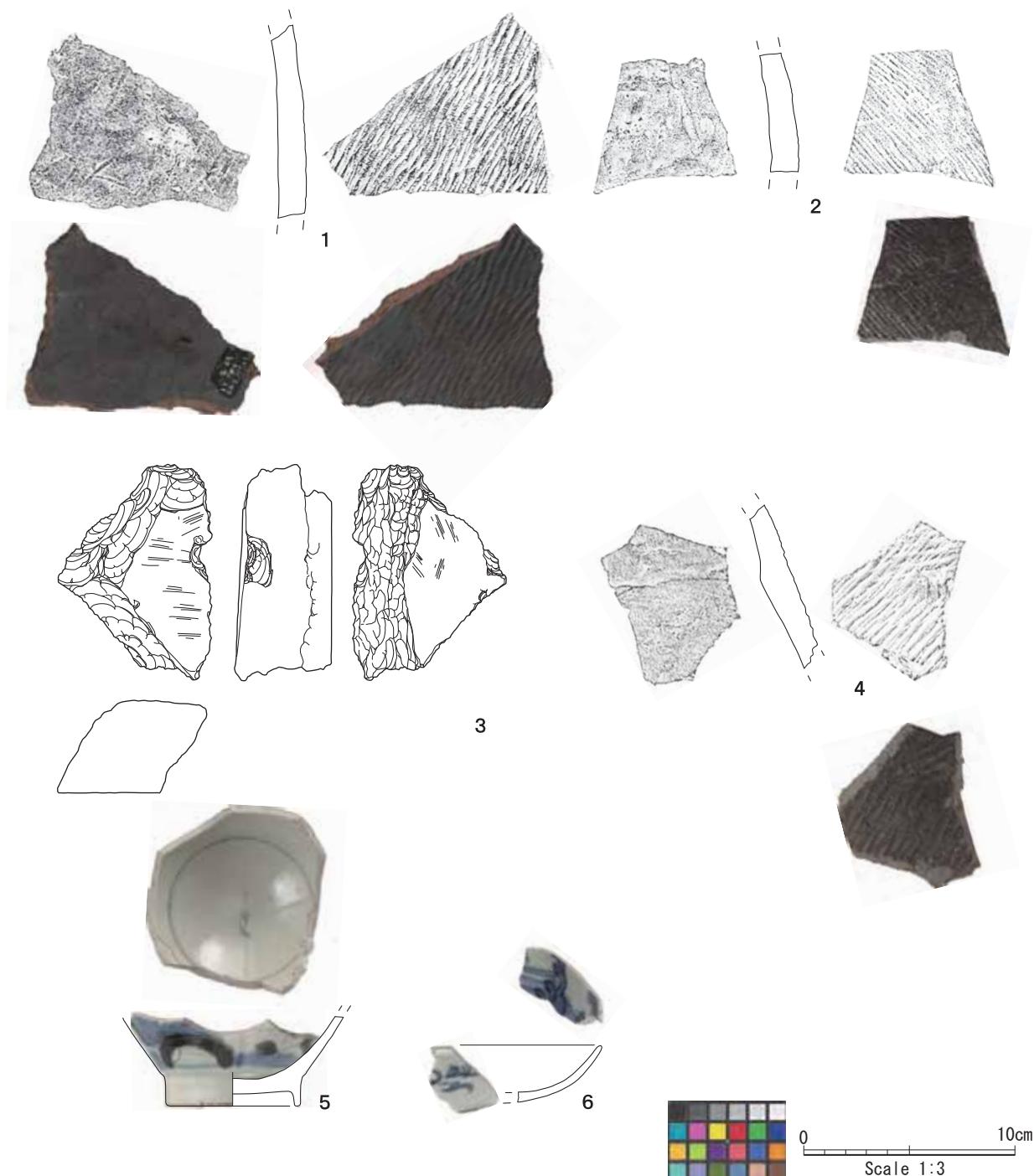
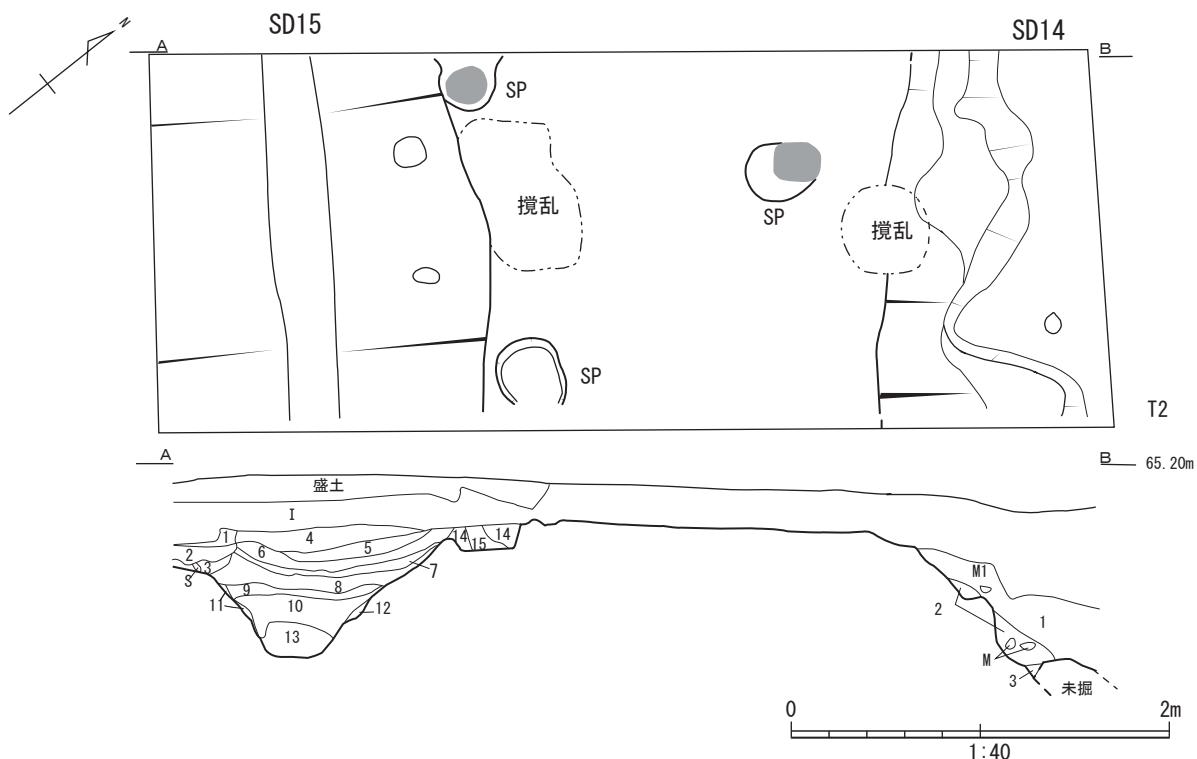


図48 出土遺物



## SD 15

1 10YR2/2 黒褐色  
2 10YR2/1 黒色  
3 10YR2/2 黒褐色  
4 10YR2/1 黒色  
5 10YR2/2 黒褐色  
6 10YR2/2 黒褐色  
7 10YR1.7/1 黒色  
8 10YR2/2 黒褐色  
9 2.5Y3/1 黒褐色  
10 10YR2/2 黒褐色  
11 10YR4/3 にぶい黄褐色  
12 10YR2/3 黒褐色  
13 10YR4/4 褐色

V粒多量混入。固く締まる。粘性なし。  
V主体。パミス ( $\phi 1 \sim 30\text{ mm}$ ) 非常に多量混入。固く締まる。粘性弱。  
V粒少量混入。締まり、粘性有り。  
白色パミス ( $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ ) 微量混入。締まり、粘性有り。  
Vブロック少量、パミス ( $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ ) 微量混入。固く締まる。粘性有り。  
パミス ( $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ ) 微量、礫 ( $\phi 10 \sim 20\text{ mm}$ ) 少量混入。締まり、粘性有り。  
締まりやや有り。粘性有り。  
砂質。パミス ( $\phi 2 \sim 8\text{ mm}$ ) 少量混入。  
ローム多量混入。締まり有り。粘性弱。  
パミス ( $\phi 1 \sim 12\text{ mm}$ ) 少量、Vブロック多量混入。締まり、粘性有り。  
V。締まりなし。粘性弱。  
砂質。締まりよし。粘性弱。  
V主体。締まりなし。粘性弱。

## SP

14 10YR2/2 黒褐色  
15 10YR2/1 黒色

パミス ( $\phi 2 \sim 3\text{ mm}$ ) 微量混入。固く締まる。粘性弱。  
白色パミス ( $\phi 2 \sim 5\text{ mm}$ ) 微量混入。固く締まる。粘性有り。

## SD 14

1 10YR2/1 黒色  
2 10YR1.7/1 黒色  
3 10YR2/1 黒色

II. パミス ( $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ ) 微量混入。締まり、粘性有り。  
締まり、粘性有り。  
砂質。締まり有り。粘性弱。

図 49 溝跡 15、堀跡 14

表9 種別遺構一覧

土壙	空堀	溝跡	柱穴・柱穴様ピット	計
1	1	1	3	6

表10 遺構出土遺物一覧

遺構	P			S	I	計
	7		8			
	1	2	2			
SD 14		10	2	4	210	226
SD 15					14	14
SA 5	1				44	45
計	1	10	2	4	268	285

表11 発掘区別出土遺物一覧

調査区	P				S	I	計			
	7		8							
	1	2	1	2						
TR 1	4	13	6	1			39 63			
TR 2		1	4			1	35 41			
計	4	14	10	1	1	74	104			



調査区近景（東から）



T1 作業状況（北東から）



T1 調査状況（南から）



SD14 底面遺物出土状況（南東から）



SD14 土層断面（南東から）



SA5 土層断面（南東から）



T2 調査状況（南東から）



SD15 完掘（南東から）

図版 13 調査状況

## 6 大館城跡②（個人住宅改築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館城跡の位置と周辺の環境については、第2章2で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度16分24秒、東経140度33分44秒（世界測地系）、標高は69mである。

### (2) 調査の内容

発掘区の設定は、平成26年度調査（2節）を踏襲した。座標系は、本丸・二ノ丸地点との関連を考慮し、X・Y軸のラインを平成26年度の調査で設定した座標軸にあわせた。ただし、その座標では、三ノ丸地区全体を包括できないことなどから、座標の名称は新規に設定した。発掘区における公共座標は、AJ-32区でX=30,390.000、Y=-23,020.000、AK-33区でX=30,400.000、Y=-23,030.000である（世界測地系）。調査区における基本区画は、10×10mとし、名称は南東角の座標で表示する。今回の調査範囲は、X=32～33、Y=A I～AKである。

トレーナーは、幅2mとし、グリッドの交点にあたる箇所を基点に南北方向を長軸とし、調査範囲内に収まるように設定した。トレーナーの掘削はバックホーで行い、基盤層である黄褐色土層（IV層）まで掘り下げ、遺構の記録・遺物の収集等を行った。

### (3) まとめ

調査の結果、調査対象地内から、井戸跡1基、柱穴及び柱穴様ピットを37基の遺構と近世以降の陶磁器片、砥石など31点の遺物を得たことから、平成28年6月1日～7月9日の期間で発掘調査を実施することとなった。調査概要及び調査結果については今年度刊行の大館市文化財調査報告書第16集に報告した。

表12 種別遺構一覧

土坑	柱穴・柱穴 様ピット	計
1	37	38

表13 出土遺物一覧

調査区	P		S	計
	8		1	
	1	2	7	
T R 1	22	3		25
T R 2	2	3	1	6
計	24	6	1	31



図50 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

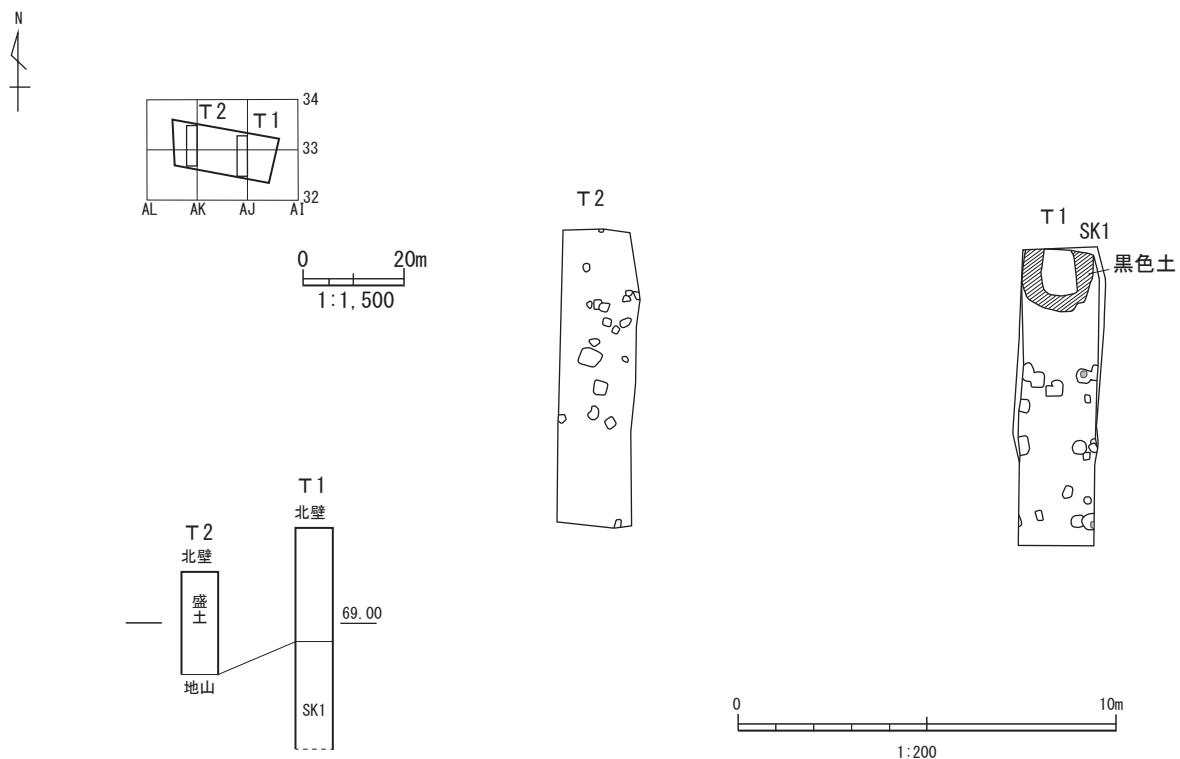


図 51 調査位置図



調査地近景（南東から）



作業状況（南東から）



T1確認状況（南から）



T2 確認状況（南から）

図版 14 調査状況

## 7 林ノ上遺跡隣接地（携帯電話基地局建設工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

林ノ上遺跡は引次川左岸に所在する。遺跡の位置は、北緯40度14分11秒、東経140度30分7秒（世界測地系）である。標高は52mほどである。遺跡の南側には、大子内館跡、沢を挟んだ北側に、縄文時代の遺跡である曲沢遺跡が所在する。調査地区は、遺跡の北30mほどに位置し、林ノ上遺跡より一段低い段丘上の隣接地である。

### (2) 調査の内容

調査地内にトレンチ（2×4m）を設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、埋蔵文化財の有無等について調査した。表土（耕作土）の下は盛土が厚く堆積していた。現地表面より2mの深さまで掘り下げたが、近代の盛土が堆積しているのみであり、遺構・遺物は確認されなかった。

### (3) まとめ

調査地は、かつて水田として利用されていた。調査の結果、地表面から深さ2mまで掘削したが、旧表土の下から、近代の基盤整備等による盛土などが厚く堆積しており、地山を確認できなかった。深さ1.9m付近で湧水があり、木根が検出されたものの、遺構・遺物は確認されなかった。

したがって、本調査地が遺跡のエリアに含まれる可能性は低く、これ以上の調査は不要と判断した。



遺跡遠景（北東から）



トレンチ（南から）

図版15 調査状況

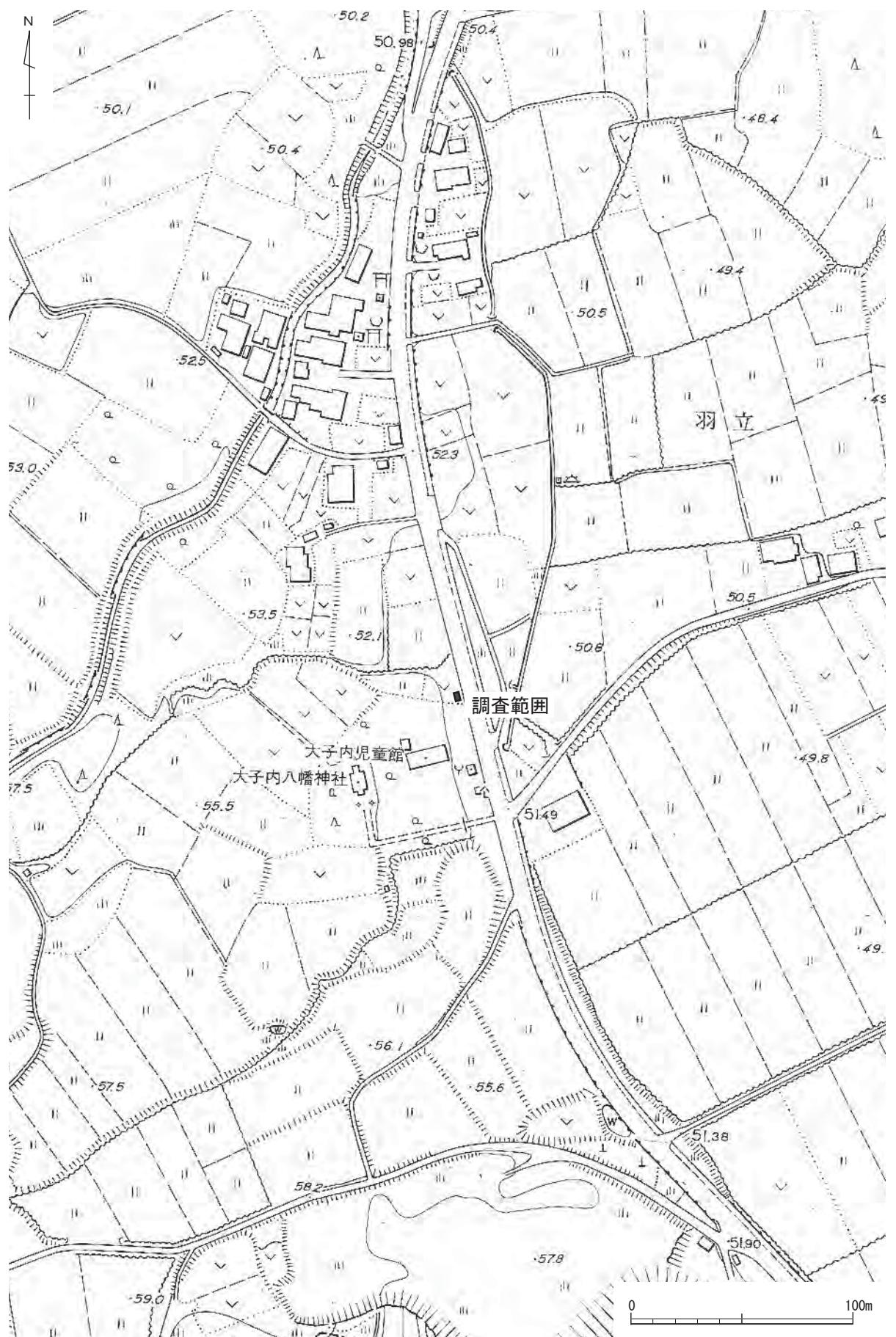


図 52 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

## 8 川口地区（送電線建設工事）

### (1) 調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、米代川に流れていた沢により浸食された台地上に位置する。調査地の地番は川口字上野 260 番地、字大人沢 28 番地で、平成 28 年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは段丘を開析する沢の付近に分布する。調査地は、沢跡が縦断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

調査は、鉄塔が建設される予定地のうち、No.1－1（A地区）とNo.1－2（B地区）の2地区を対象に実施した。A地区の位置は、北緯 40 度 16 分 33 秒、東経 140 度 28 分 30 秒（世界測地系）である。標高は 53m である。B 地区の位置は、北緯 40 度 16 分 33 秒、東経 140 度 28 分 19 秒である。標高は 50m である。

調査地の東側には川口館跡、北東側には栗木山遺跡が所在する

### (2) 調査の内容

調査対象地に任意で 1.5～2 m 角のテストピットを設定し、掘開した。A地区では4カ所、B地区では3カ所のテストピットを設定した。テストピットの掘削は人力で行い、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層の上に黒色腐植土層が堆積する単純なものである。なお、B地区については大半が削平されており、II～III層は失われていた。

I層 表土および盛土。層厚 10～50 cm。

II層 黒色の色調を示す腐植土層である。層厚 4～29 cm。

III層 黒褐色の色調を示す土層。II層とIV層の漸移層である。層厚 3～10 cm。

IV層 褐色～浅黄色の粘土層。

### (3) まとめ

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったため、今回調査を実施した地区については、埋蔵文化財は存在しないものと判断される。

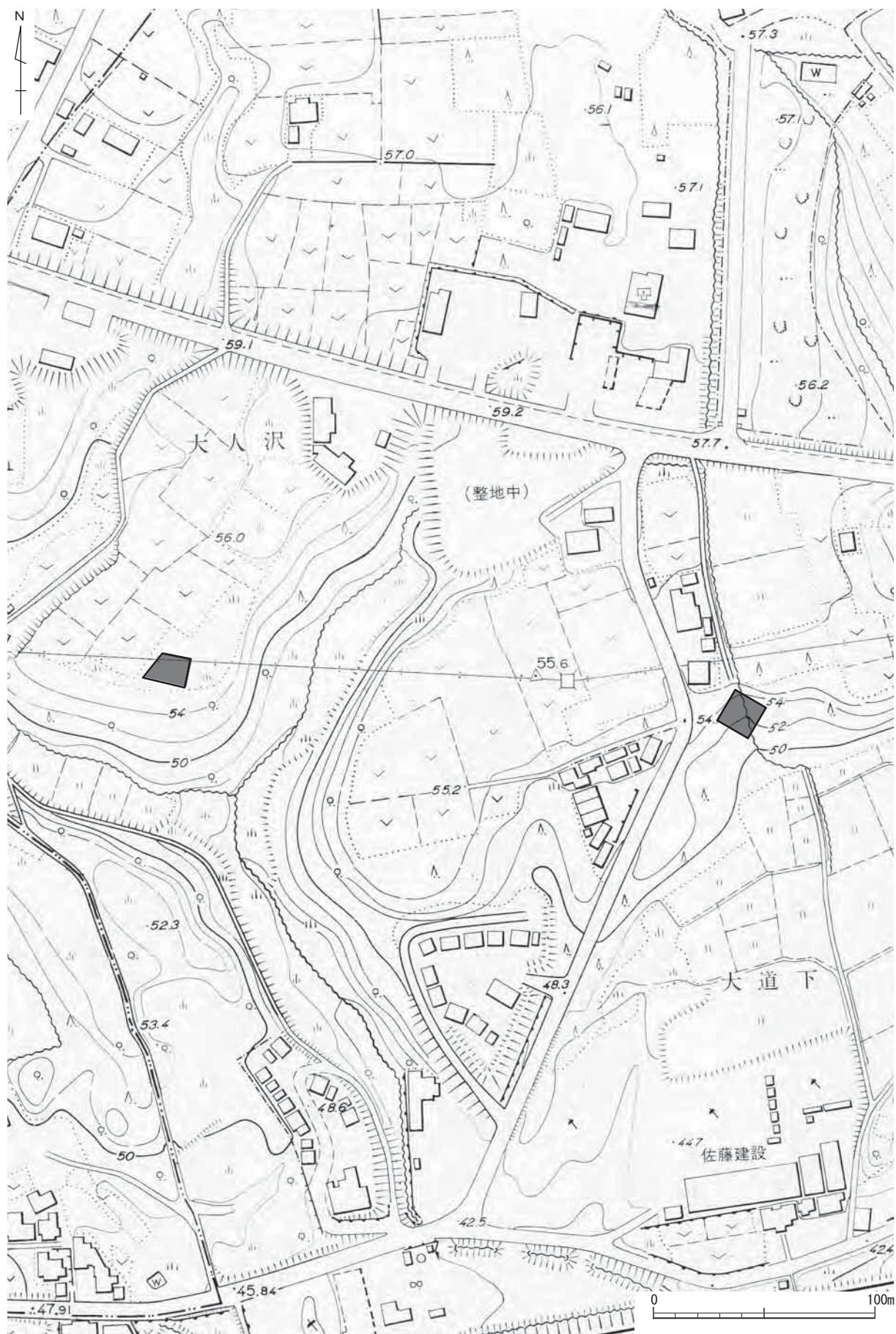


図 53 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

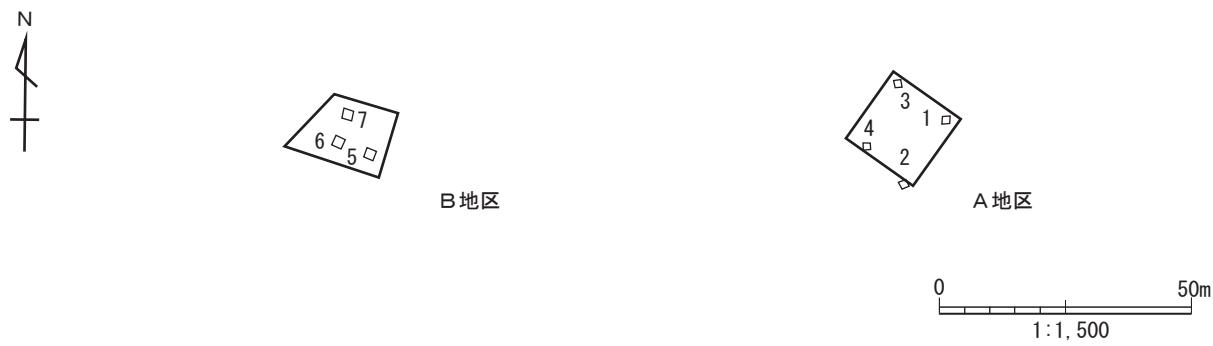


図 54 調査位置図



B地区近景（東から）



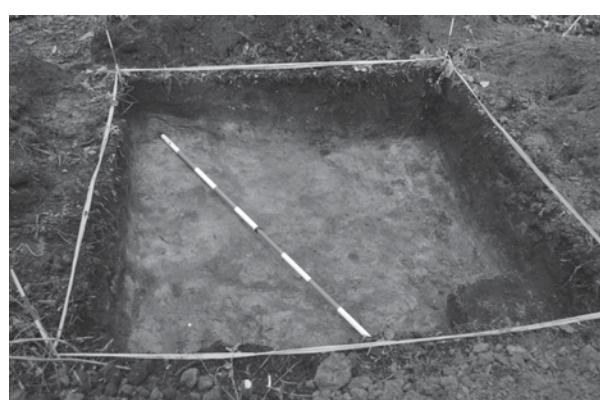
作業状況



1



2



5(南西から)



6(南から)

図版 16 調査状況

## 9 花岡町地区（個人住宅建設工事）

### (1) 調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、花岡町地区にある長森溜池の南東に位置する。調査地の地番は花岡町字長森30番地1で、平成29年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは段丘を開析する沢の付近に分布する。調査地は、沢跡が縦断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

調査地の位置は、北緯40度20分22秒、東経140度33分13秒（世界測地系）である。標高は96mほどである。土地所有者の話によれば、調査地はかつて畠として利用されていたという。

調査地の北側には、300mほどのところに、中世の遺跡である長森遺跡が所在する。長森遺跡では、平安時代末期～鎌倉時代初期の珠洲焼ないし珠洲系陶器壺3個が出土している。これらは大館市有形文化財に指定されている。調査地区は、長森遺跡と同じ段丘上に立地する。

### (2) 調査の内容

事業者の要望により、建設予定箇所の隣接地に任意のトレンチ（2×5m）を1本設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、埋蔵文化財の有無等について調査した。調査地内の基本層序は、基盤をなす褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 盛土（碎石）。層厚60cm前後。

II層 黒色を呈する腐植土層である。層厚5～15cm。

III層 にぶい黄褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層である。

IV層 褐色を呈する粘土層。

調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物はII層中から土師器片5点が出土した。

### (3) まとめ

調査の結果、遺構は確認されず、遺物は土師器片5点が出土した。遺物は、旧耕作土中からの出土とみられ、一次的な遺物包含層ではないと考えられる。遺構も確認されていないことから、今回の調査地を遺跡には登載しなかった。しかしながら、今回の調査で土師器片が出土していることから、平成29年6月21日に事業者協力のもと、工事立会調査を実施した。



図 55 調査区と周辺地形 (1:2,500)

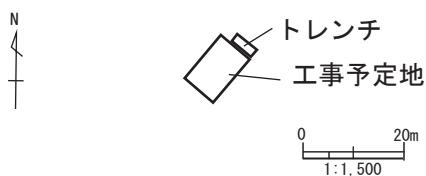


図 56 調査位置図



図版 17 調査状況

## 10 大館城跡③（薬局新築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館城跡の位置と周辺の環境については、第2章2で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度16分16秒、東経140度34分2秒（世界測地系）、標高は72mである。今回の調査地は、宅地で字中城と上町の境界にあたり、江戸時代には外堀に面した土居部分に該当する。享保13（1728）年の大館絵図によれば、馬場目源右エ門の屋敷地にあたる。

### (2) 調査の内容

発掘区の設定は、平成26年度調査（2節）を踏襲した。ただし、平成26年度の座標では、大館城跡全体を包括できないことなどから、Y軸の座標の名称は新規に設定した。西から東へのアルファベットにーを付し、-A、-B、-Cのように呼称した。発掘区における公共座標は、-J-5区でX=30,120、Y=-22,570、-E-10区でX=30,170、Y=-22,620である。今回の調査範囲はX=7～8、Y=-E～-Fである。

トレチは幅2mとし、調査対象地に南北方向を長軸とするトレチを2本（TR1・2）設定し、掘開した。トレチの掘削は全てバックホーで行い、近代の盛土層を除去し、遺構の記録・遺物の収集等を行った。

調査区内は、調査区南側（TR1付近）はII層が良好に残存するものの、北側において、II層は既存の工事等によりほとんど消失していた。

今回の調査により、TR1から柱穴様ピット8基、TR2から柱穴様ピット8基、遺物はTR1から近代とみられる陶磁器片4点のほか、隣接地で工事中の廃土から近世磁器片を2点得た。土居については、調査範囲内では基底部まで完全に削平されており、一切残存していない。

### (3) まとめ

調査の結果、調査区の北側半分については、当時の生活面と考えられるII層はほとんど残存していないかった。また、調査区内から近世の遺物も出土していないことから、柱穴様ピットの時期も明確にしえなかった。

以上のことから、保護措置は必要と考えるが、措置の内容は、工事立会等の軽微なものが妥当と判断した。なお、平成29年8月5日及び10月6日に事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

表14 種別遺構一覧

柱穴・柱穴様 ピット	計
16	16

表15 出土遺物一覧

調査区	P	計
	8	
TR1	4	4
表採	2	2
計	6	6



図 57 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

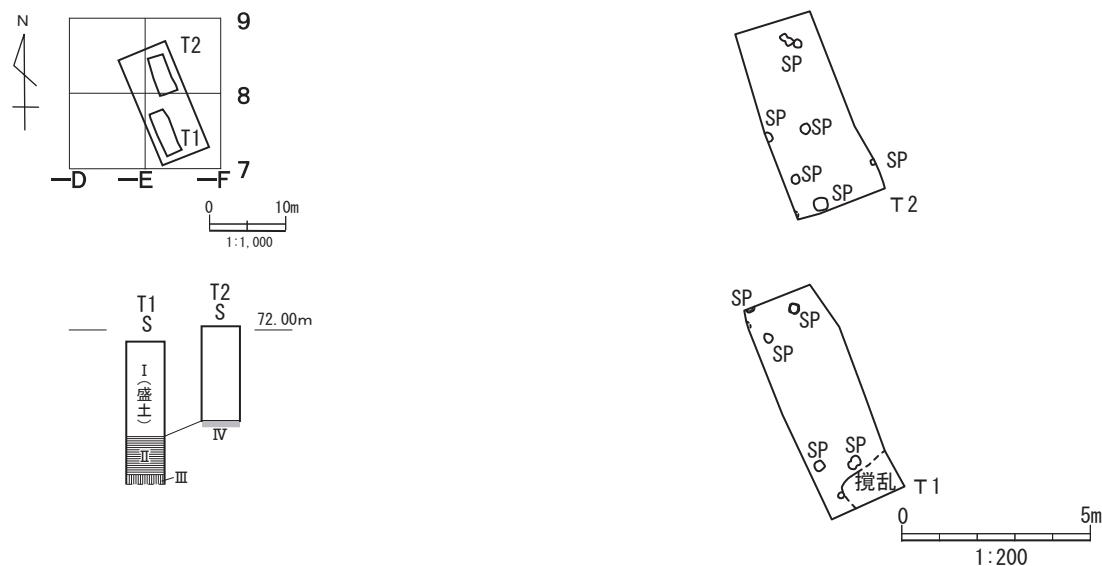


図 58 調査位置図と検出遺構図



調査地近景



作業風景



T 1 確認状況



T 2 確認状況

図版 18 調査状況

## 11 大館野遺跡（比内地鶏放牧場移設工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館野遺跡は下内川右岸に所在する。調査地の位置は、北緯40度20分13秒、東経140度35分1秒（世界測地系）である。標高は、北東側で103m、南西側で101mである。

本遺跡は、昭和62年～平成元年に発掘調査が実施されており、平安時代の堅穴住居跡が60軒ほど検出されたほか、縄文時代の落し穴、弥生時代の土坑などが検出されている。遺跡の西側には中羽立遺跡と粕田遺跡、沢を挟んだ北側には、平安時代の遺跡である両堤遺跡が所在する。

### (2) 調査の内容

テストピットは、2m角とし、調査対象地内におおむね10m間隔に任意に設定した。テストピットの掘削は全て人力で行い、基盤層である黄褐色粘土層（IV層）まで掘り下げ、遺構の記録・遺物の収集等を行った。テストピットの位置情報等については、有限会社 小笠原測量設計事務所の協力を得て、計測し、計測データの提供を受けた。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 表土および盛土。

II層 黒色を呈する腐植土層で、本来の遺物包含層である。

III層 暗褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層である。

IV層 黄褐色を呈する粘土層。

調査区内は、調査区中央側（TP6付近）はII層が良好に残存するものの、南側、北西側において、II層は既存の耕作等によりほとんど消失していた。

今回の調査により、TP3から柱穴様ピットを2基発見し、遺物はTP2から須恵器1点を得た。また、TP3付近から須恵器片1点を採集したほか、近世磁器片を表面採集した。

図60-1・2は須恵器甕体部片。外面は縄目状の平行叩き目である。3は磁器染付の小碗で半筒形を呈し、花（菊？）が染付される。肥前系で18世紀後半～19世紀初頭頃であろう。

### (3) まとめ

調査の結果、明確な遺構は確認されず、試掘坑からの出土遺物もTP2から1点を得たのみである。今回の調査地には遺構は分布していない可能性が高い。したがって、保護措置は必要と考えるが、措置の内容は、工事立会等の軽微なものが妥当と判断した。

なお、平成30年5月7日～5月29日に、事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。



図 59 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

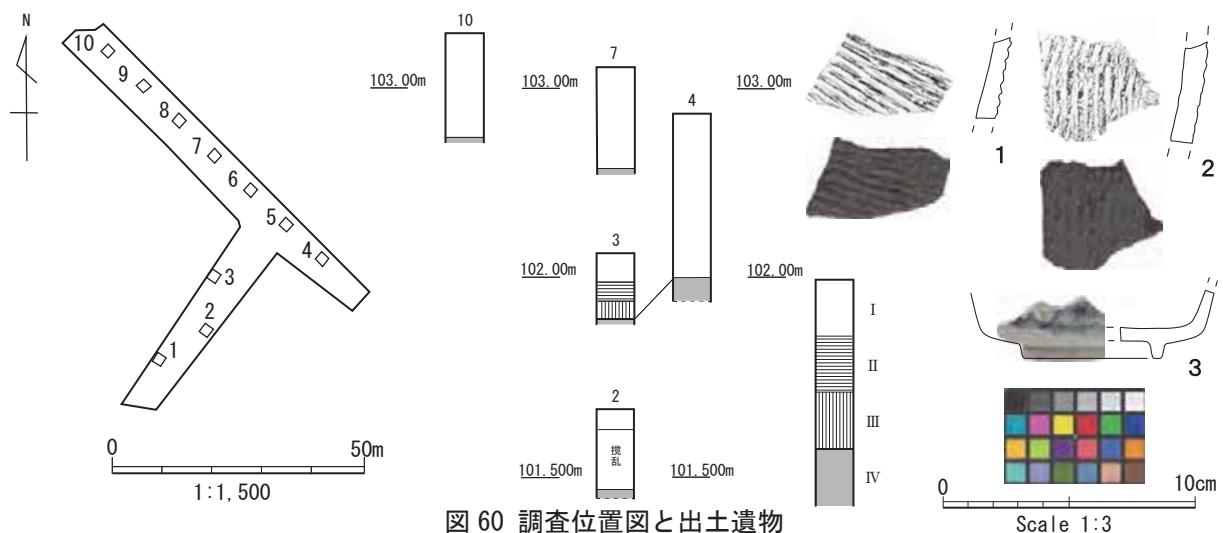


図 60 調査位置図と出土遺物



調査地遠景



作業状況



2



3



4



7

図版 19 調査状況

## 12 釈迦内古館跡（釈迦内産業団地排水路整備工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

釈迦内古館跡は、大館市北部を南流する下内川とその支流の乱川に挟まれた台地上に所在する。遺跡の位置は、北緯40度18分13秒、東経140度33分39秒（世界測地系）、標高は、最も高い台地上で70m、南西の市道側で61mである。

遺跡の南東側、乱川の対岸には中世の館跡である釈迦内古館跡、東側約0.6kmのところには、縄文時代及び平安時代の遺跡である釈迦内中台II遺跡、西側の下内川の対岸、約1kmのところには、中世の館跡である高館跡が所在する。調査地は遺跡西部の道路部分である。

### (2) 調査の内容

テストピットは、約2～3m角とし、調査対象地内に20～50m間隔に任意に設定した。テストピットの掘削は事業者の協力のもと、全てバックホーで行い、遺構の確認、遺物の収集等を行った。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす黄褐色砂質土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 盛土及び旧表土。

II層 黒色を呈する腐植土層で、遺物包含層である。

III層 黄褐色～褐色を呈する砂質土層。調査区北側の標高の低い箇所では、砂質が強い。

調査区内は、調査区中央側（TP3～4付近）はII層が良好に残存するものの、南側において、II層は既存の工事等によりほとんど消失していた。TP3～6は遺跡西端の段丘低位面にあたり、砂礫が1m以上盛土されていた。TP3・4は深さ1.5m以上掘り下げたが、基盤層を確認することができなかった。また、TP4～6は高位段丘面からの湧水があり、TP4・5では遺構の有無を確認できなかった。

今回の調査により、遺構は確認されなかったものの、遺物はTP3から土師器4点を得た。遺物はいずれもII層より得たものであり、上位の段丘上からの流れ込みとみられる。また、遺跡隣接地の工事の立会調査において、縄文土器片を1点回収した。図62-1は遺跡隣接地の工事中に発見した2群土器胴部片。内面にも縄文が施されるもので、赤御堂式・早稻田5類に相当するものとみられる。2はTP3 II層より出土した土師器小甕体～底部である。底部外面は中心部分にのみ砂の付着がある。

### (3) まとめ

調査の結果、明確な遺構は確認されず、遺物もTP3から土師器4点が出土したのみである。今回の調査地のうち、現在埋蔵文化財包蔵地カードに登載している範囲はTP4より南側とTP5より北側であるが、TP5以北については遺跡の範囲には含まれないと考える。また、TP1・2付近は基盤層まで削平を受けていた。したがって、II層が残存し、遺物が出土したTP3を包括する範囲であるTP2からTP4のうち、TP3の含まれる直線部分の範囲を保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、工事立会等の軽微なものが妥当と判断した。なお、平成29年10月13日～14日及び平成30年4月2日～4日、4月19日に事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。



図 61 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

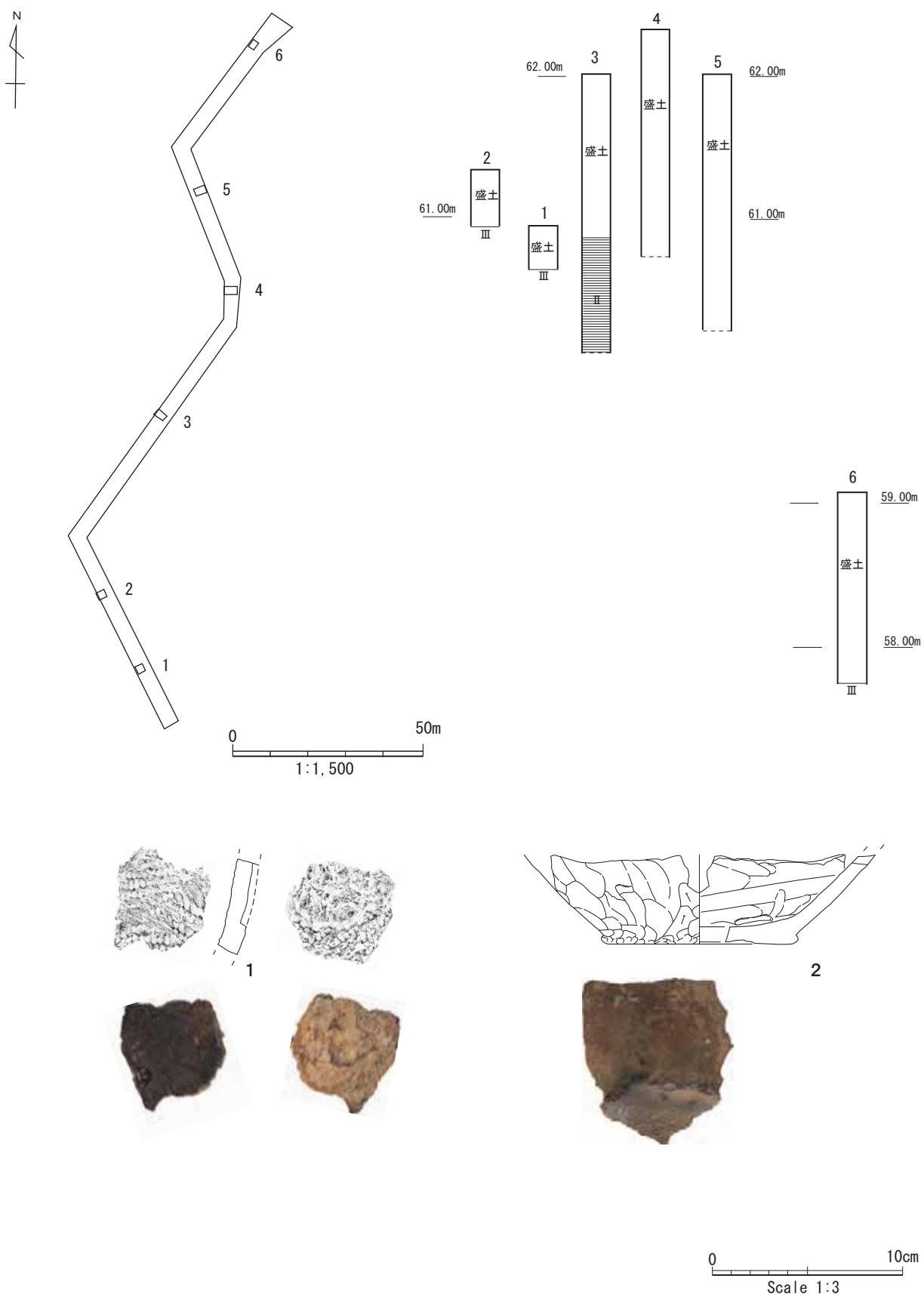


図 62 調査位置図と出土遺物



遺跡近景(1付近南から)



1(南から)



2(南から)



3



4



遺跡近景 (5付近北から)



5



6

図版 20 調査状況

## 13 雪沢地区（消防団消防車庫新築工事）

### (1) 調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館市北東部の段丘東縁付近に位置する。調査地の地番は雪沢字雪沢 33 番地 2 で、平成 29 年度に実施した。大館市内の遺跡の多くは段丘を開析する沢の付近に分布する。調査地は、沢跡が縦断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

調査地の位置は、北緯 40 度 17 分 53 秒、東経 140 度 39 分 41 秒（世界測地系）である。標高は 133m ほどである。調査地の西側 1.5 km ほどのところに、縄文時代晚期の遺跡である小雪沢遺跡が所在する。

### (2) 調査の内容

開発予定地内に任意のトレンチ ( $2.5 \times 4$  m) を 1 本設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、埋蔵文化財の有無等について調査した。

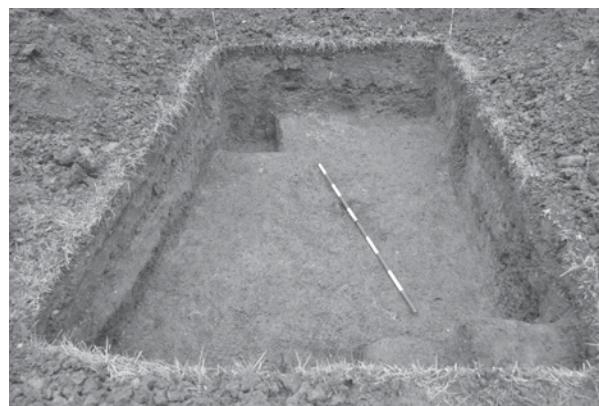
調査地は、近現代の砂礫層が厚く盛られていた。掘削深度が 80 cm を超えても盛土が続き、調査要因である車庫の基礎工事の掘削の深さを上回ったため、掘削を中止した。そのため、以下の地層は確認できなかった。遺構・遺物は確認されなかった。

### (3) まとめ

調査地は、地元の方の話によれば、かつて水田として利用され、近代に盛土したという。調査の結果、遺構は確認されなかった。したがって、今回の調査地には埋蔵文化財が存在する可能性は低いと判断した。



調査地近景(東から)



調査状況(南から)

図版 21 調査状況



図 63 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

## 14 大館城跡④（市民体育館・武道館解体事業）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館城跡の位置と周辺の環境については、第2章2で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度16分20秒、東経140度33分58秒（世界測地系）、標高は70～71mである。今回の調査地は、旧市民体育館及び武道館の建物部分で、大館城跡の本丸東部及び東門、城の内堀及び土居部分に該当する。

### (2) 調査の内容

発掘区の設定は、平成26年度調査（2節）を踏襲した。発掘区における公共座標は、D-18区でX=30,250、Y=-22,700、I-23区でX=30,300、Y=-22,750である。今回の調査範囲はX=16～22、Y=A～Iである。遺跡内の基本層序は2節に準ずる。

今回の調査は、旧市民体育館部分及び旧武道館部分、それに隣接する部分について実施した。旧市民体育館部分では、3本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、北側のTR4には包含層が残存していたものの、南側は、市民体育館造成工事により包含層はほとんど残存していなかった。X=18、Y=F・Gの範囲は、盛土が1.3m以上に及ぶ。おそらくこの範囲は、包含層が消失したものと思われる。この箇所からは、TR3より土坑1基（SK614）と柱穴様ピット1基、TR4より土坑1基（SK615）、遺物は近世の陶磁器53点、土器1点を得た。

旧武道館部分では、1本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。旧地表面より、深さ1.5mまで掘り下げたものの、現代の盛土が厚く堆積しているのみであり、包含層は確認されなかった。盛土中より多量の磁器やガラス瓶が出土したが、磁器の大半は「公立大館病院」と記載された碗や皿であり、おそらくこの箇所は昭和45年に埋められた内堀部分に当たるものと思われる。近世の遺物は磁器片4点、木製品2点が得られたのみである。

旧市民体育館隣接部分では、1本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、北側が市民体育館部分同様、近代の造成工事等により削平されていたものの、南側は包含層が残存していた。この箇所で検出した遺構は、土坑1基、溝跡1条、柱穴様ピット7基、遺物は陶磁器6点を得たのみである。

### (3) 遺構

#### 土坑512

**遺構** D-20区に位置する。TR1を調査中に黒色土の落込みがあったことから、発見した。本土坑の西側は調査区外に拡がり、平面形は不整形を呈し、底面は平坦である。底面から小ピットが1基検出された。平面プランの内側に黒色土のプランがあり、その周囲に地山主体の土が堆積しており、掘り方と考えられる。トレンチに平行してサブトレンチを設定し、一部を掘削したのみであるが、南北とともに壁が急斜度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

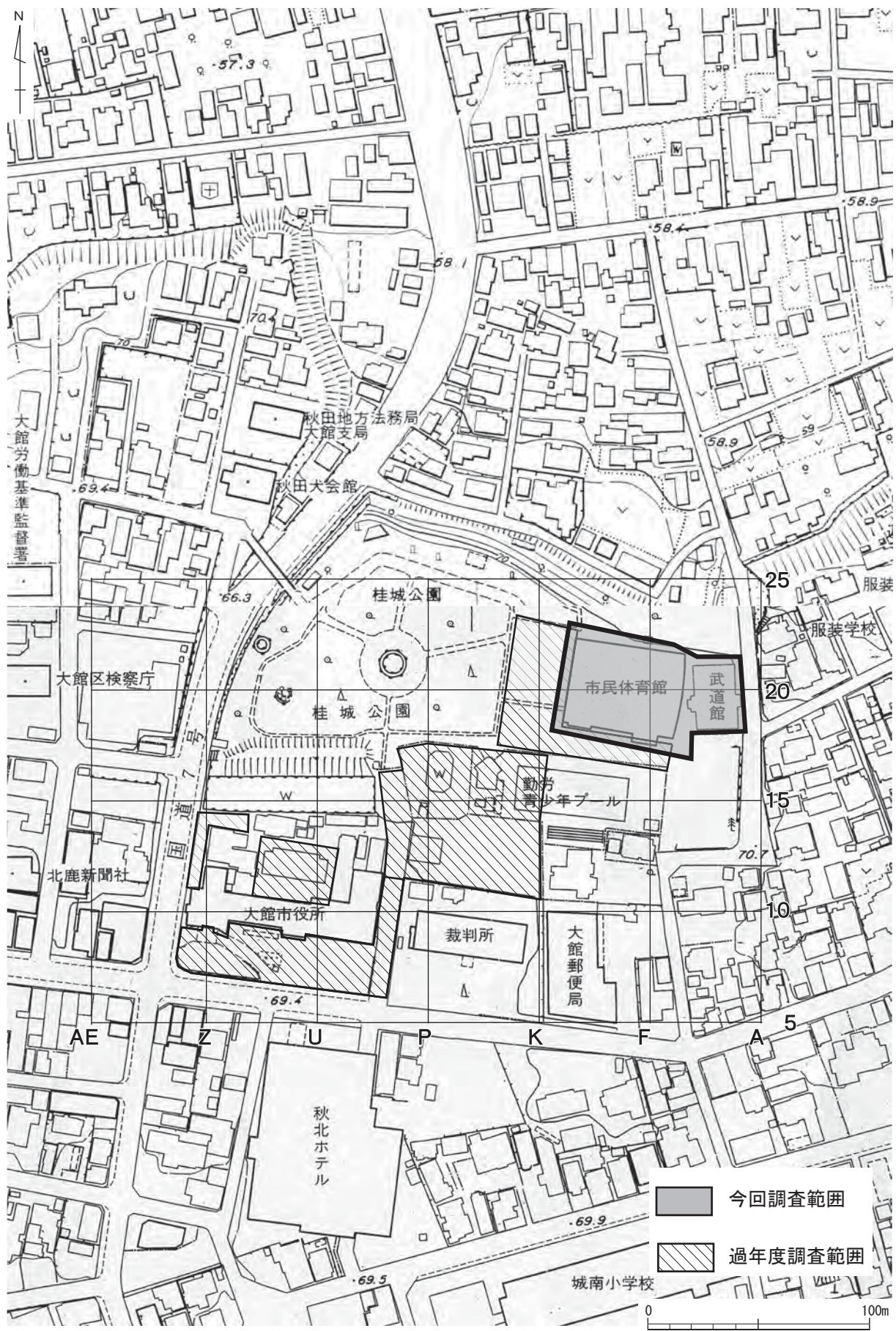


図 64 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

## 土坑 615

**遺構** F-21 区に位置する。TR 4 を調査中に黒色土の落込みがあったことから、発見した。本土坑の西側は調査区外に拡がり、平面形は円形を呈すると考えられる。確認面での規模は長径 2.9m 以上と推定され、深さは 0.62m ほどである。

**遺物** 土坑 615 から出土した遺物は陶磁器 11 点である。肥前産の 17~18 世紀頃に位置づけられる。いずれも小破片で、二次的に混入したものである。

## 柱穴様ピット 510・511

**遺構** D-19・20 区に位置する。TR 1 を調査中に黒色土の落込みがあったことから、発見した。いずれも東側を部分的に検出したのみである。SP 510 は径 15 cm ほどの柱痕跡が確認された。SP 511 から柱痕跡は確認されていない。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。建物跡の復元はできなかった。

### (4) 遺物

遺構以外の遺物は、陶磁器片 52 点、土器片 1 点、木製品 2 点、合計 55 点である。全域から出土した。陶磁器片の属する時期は、その大半が大館城の存在していた 17 世紀後半から 18 世紀前半に位置づけられる。

**磁器** 35 点出土した。青磁（1）、染付（2~6）に大別される。1 は龍泉窯青磁の碗である。ヘラ先による線描の連弁文をもつもので 1 点のみである。口縁部は外反しない。連弁の間隔はせまい。釉はうすく、火を受けて灰オリーブ色を呈する。上田分類（上田 1982）の B-IV 類にあたると思われる。15 世紀後半から 16 世紀前半位に比定されるようである。染付は碗と皿、猪口がみられる。2 は有田産で小壺または小碗。17 世紀末から 18 世紀初頭。3 は全体に灰味をおびており、呉須が褐色を呈する。4・5 は小皿。4 は芙蓉手。3~5 は 17 世紀後半。6 は有田産の猪口。17 世紀後半から

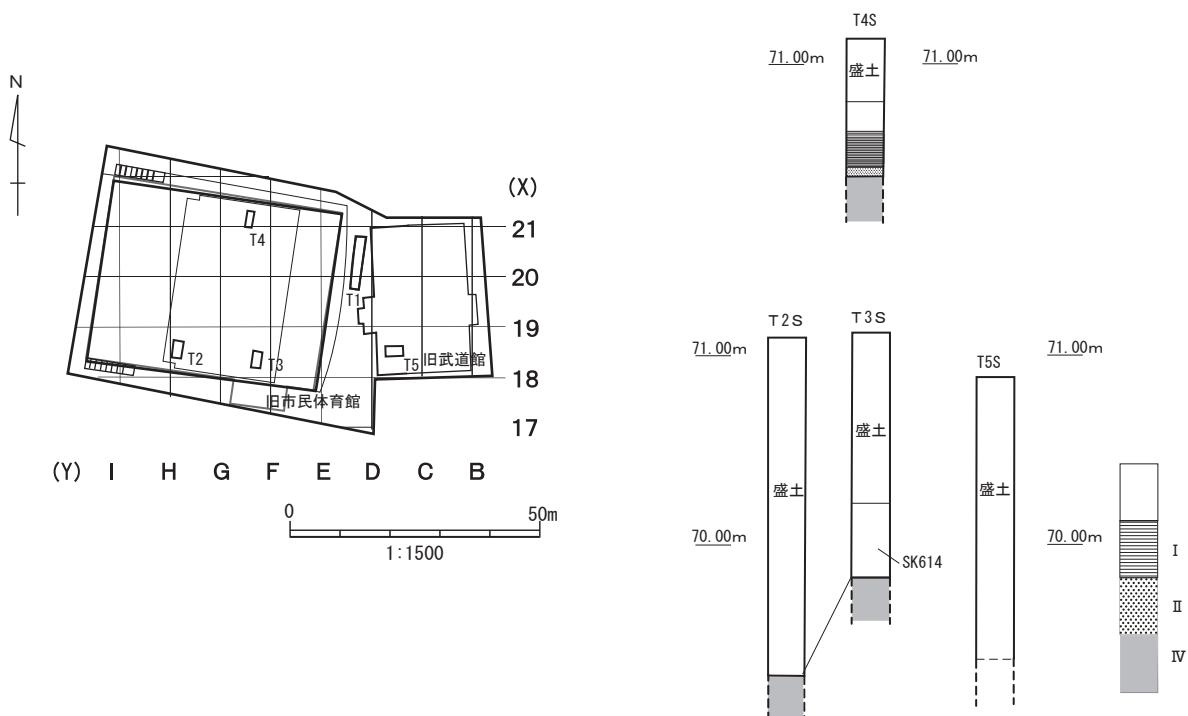


図 65 調査位置図



図 66 検出遺構図

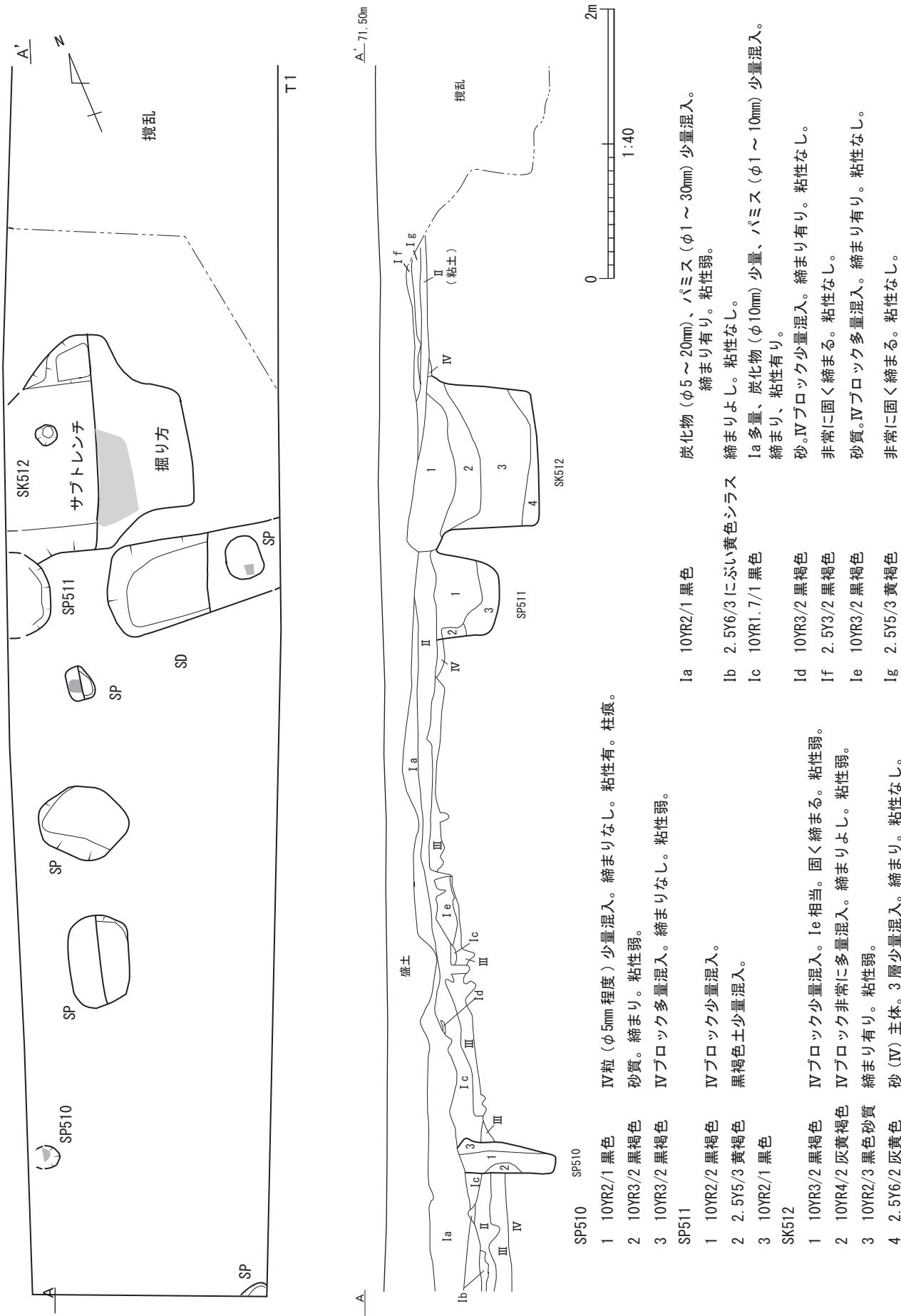


図 67 土坑 512・柱穴様ピット 510・511

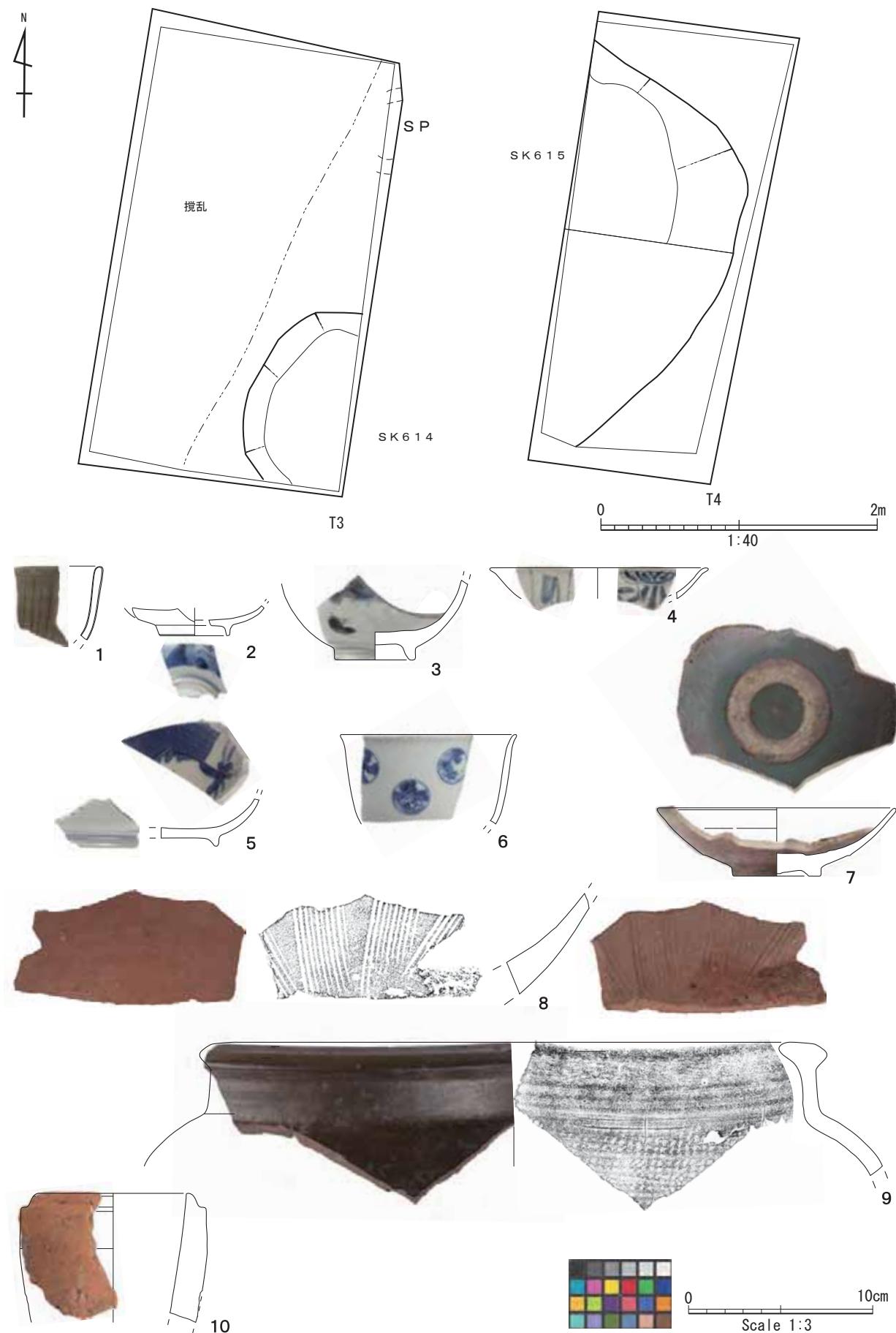


図68 土坑614・615とトレンチ4出土遺物

18世紀初頭。いずれもTR4出土。

**陶器** 17点出土した。7は見込み蛇ノ目釉剥ぎの小皿。重ね焼の方法は砂目であり、17世紀第4四半期から18世紀前半に比定される。火を受け釉が赤味をおびる。8は擂鉢の体部で、内外面無釉である。17世紀前半。9は甕の口縁～体部。口径約35cmと推定される大型品である。口縁部は内側にも突出するT字形で、端部は外側に傾斜する広い面をもつ。体部内面は叩き目、口縁部はヨコナデである。内面の叩き目は格子目状で、17世紀第2四半期から後半。いずれもTR4出土。

**土器** 1点のみ出土した。10は焼塙壺。板作り成形で深桶形・蓋受大である。TR4出土。

### (5) まとめ

平成29・30年度は、武道館部分では遺構を発見できなかつたものの、市民体育館東側及び北側とその隣接地の本丸東部にあたる箇所から土坑等の埋蔵文化財を発見し、遺構が残存することが確認されたことは、調査の成果と言える。しかし、今回発見した遺構が残存する部分と消失した部分との間は、20mほど離れており、市民体育館西側部分の状況が未調査であることから、遺構が残存する範囲がどこまで拡がるかという課題が残された。以上のことから、今回の調査範囲において開発を行う場合には保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、遺構に影響が及ぶ場合は発掘調査が必要となる。

表16 種別遺構一覧

土坑	柱穴・柱穴 様ピット	計
3	8	11

表17 遺構計測一覧

遺構 種別	遺構 番号	平面形	規模			長軸方向 N-W	発掘区
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)		
土坑	SK512	不整	1.59 × —	1.02 × —	0.90	—	D-20
	SK614	円?	— × —	— × —	0.40	—	F-18
	SK615	円?	— × —	— × —	0.62	—	F-20
柱穴	SP510	円?	0.18 × —	0.15 × —	0.70	—	D-19
	SP511	—	0.51 × —	0.42 × —	0.48	—	D-20

表18 遺構出土遺物一覧

遺構	P		計	
	8			
	1	2		
SK615	8	3	11	

表19 遺構外出土遺物一覧

調査区	P			W	計		
	8						
	1	2	3				
TR1	3	3			6		
TR2	6	5			11		
TR3	2	1			3		
TR4	20	8	1		29		
TR5	4			2	6		
計	35	17	1	2	55		



人力による精査（北から）



T 1 (南から)



T 1 南部(東から)



T 1 中央部(東から)



T 1 北部(東から)



SP510(東から)



SP511(東から)



SK512(東から)

図版 22 調査状況 (1)



調査地近景



調査区近景（体育館内）



調査区近景（武道館内）



作業状況



TR2 調査状況（東から）



TR3調査状況（西から）



TR4 調査状況（北から）



TR5 調査状況（北から）

図版 23 調査状況 (2)

## 15 釈迦内館跡（店舗敷地造成工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

釈迦内館跡は大館市北部を流れる乱川に面した台地上に所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 18 分 5 秒、東経 140 度 33 分 49 秒（世界測地系）である。標高は、最も高い台地上で 71 m、北の市道側で 63m である。

遺跡の北東側、乱川の対岸には平安時代の遺跡である釈迦内中台Ⅱ遺跡、同じく北西側には、中世の館跡である釈迦内古館跡が所在する。

調査地は遺跡北東部の宅地・畠地・原野部分である。

### (2) 調査の内容

トレーナーは、幅 2 m とし、調査対象地内に 10~20m 間隔に任意に設定した。トレーナーの掘削は全てバックホーで行い、遺構・遺物の有無等を調査した。トレーナーの位置情報等については、有限会社小笠原測量設計事務所に計測を依頼した。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす黄褐色砂質土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I 層 盛土及び旧表土。

II 層 黒色を呈する腐植土層で、遺物包含層である。

III 層 黄褐色～褐色を呈する砂質土層。

調査区内は、調査区南側（TR 1 付近）は II 層が良好に残存するものの、それ以外の地点では、II 層は既存の工事等によりほとんど消失していた。調査区北半（TR 6 ~ 10 付近）は 10 年ほど前までは宅地となっていた箇所であるため、搅乱が著しく、中世以前の遺構・遺物は確認されなかった。したがって、北半部については、既に消失しているとみられる。

今回の調査により、溝跡とみられる黒色土落ち込み 2 カ所、土坑 1 基、柱穴・柱穴様ピット 7 基、空堀跡 1 条と堀に面した切岸を発見し、土師器片など計 29 点を得た。

堀（SD 5）は館の郭を取り囲むように巡る。幅は 5 ~ 6 m、検出面からの深さは 1.3 ~ 1.8 m ほどある。壁の立ち上がりは東西いずれも明瞭で急斜度である。切岸は SD 5 の西側を掘削し、急斜面として造成されている。遺物は TR 3 から近世の白磁の小皿が 1 点出土した。図 71-2 はやや青味をおびた灰白色を呈する。素地は灰白色できわめて精良・堅緻である。肥前産で 17 世紀後半。

遺構以外の遺物は、土師器片 16 点、陶磁器片 10 点、フイゴ羽口 1 点、礫 1 点、合計 28 点である。図 71-1 は、TR 1 周辺の平坦面から表採した瀬戸・美濃産陶器おろし皿。体部の立ち上がりは弱く、口縁端部内側（内端）が若干ひき出され、水平な面をもつ。おろし目の部分は欠損している。口縁部に淡黄緑色の灰釉がかかる。素地は淡灰黄色で、堅緻である。時期は藤澤良祐の編年（藤澤 1991）で古瀬戸後 II 期の 14 世紀末から 15 世紀初頭に位置づけられ、館の時代の遺物と考えられる。図 71-3 は肥前産染付小鉢で、肥前 V 期（1780 ~ 1860 年代）。図 71-4 はフイゴ羽口の先端部。表面はガラス質化している。

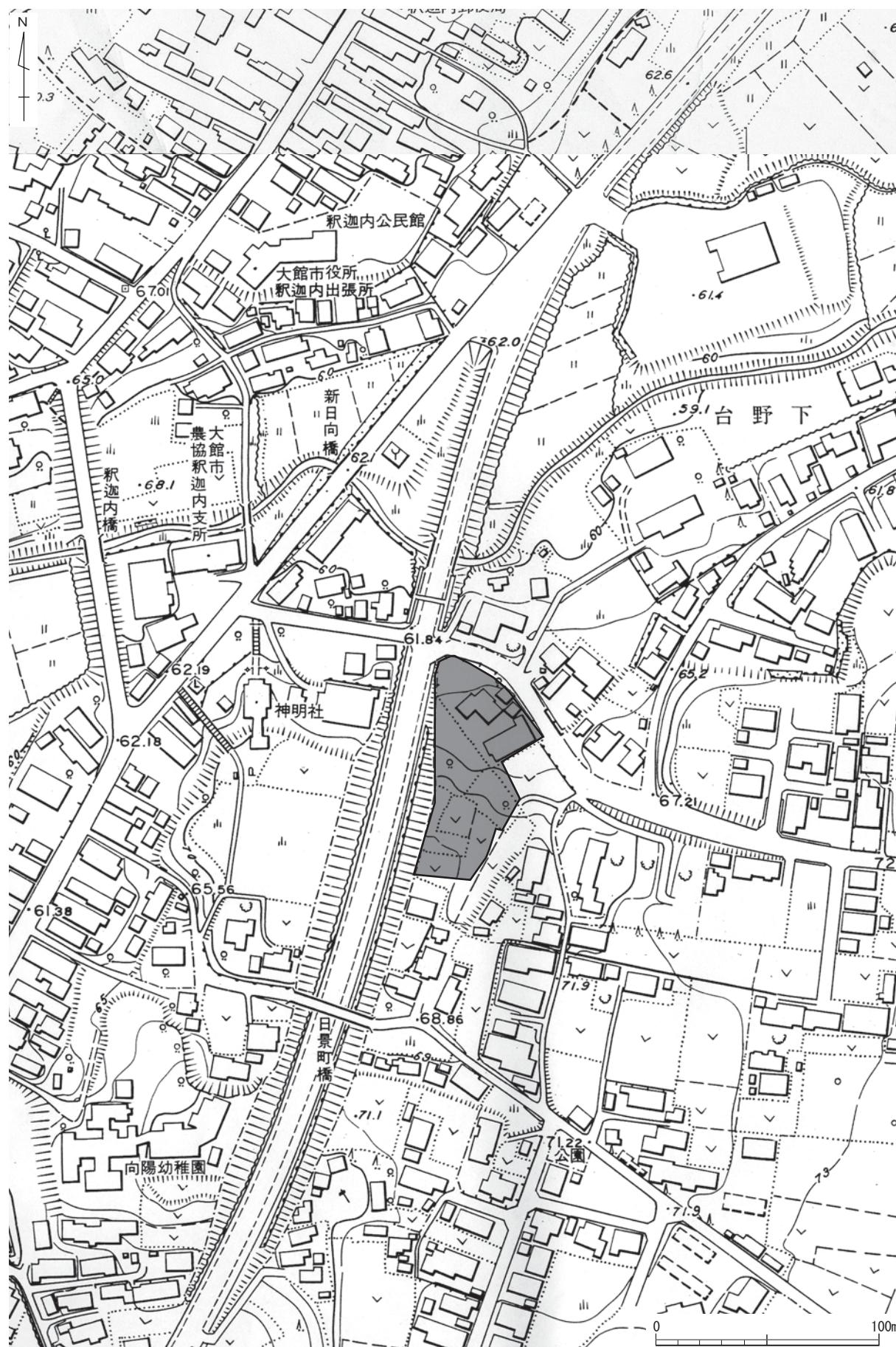


図 69 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

### (3) まとめ

調査の結果、TR 1 から溝跡や柱穴など中世の館跡を構成する遺構が確認され、TR 3～5 からは堀跡（SD 5）が 1 条確認された。遺物は少ないながらも、TR 1 から土師器 9 点、TR 3 からフィゴ羽口 1 点が出土したため、TR 1 周辺には平安時代の遺構が存在する可能性も考えられる。

一方、今回の調査地の北半については、館跡に伴う中世以前の遺構・遺物は一切確認されていない。近・現代の造成等により、遺構等は既に消失していると考えられる。

以上のことから、遺構が発見された調査地南半部については、保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、発掘調査が妥当と思われる。

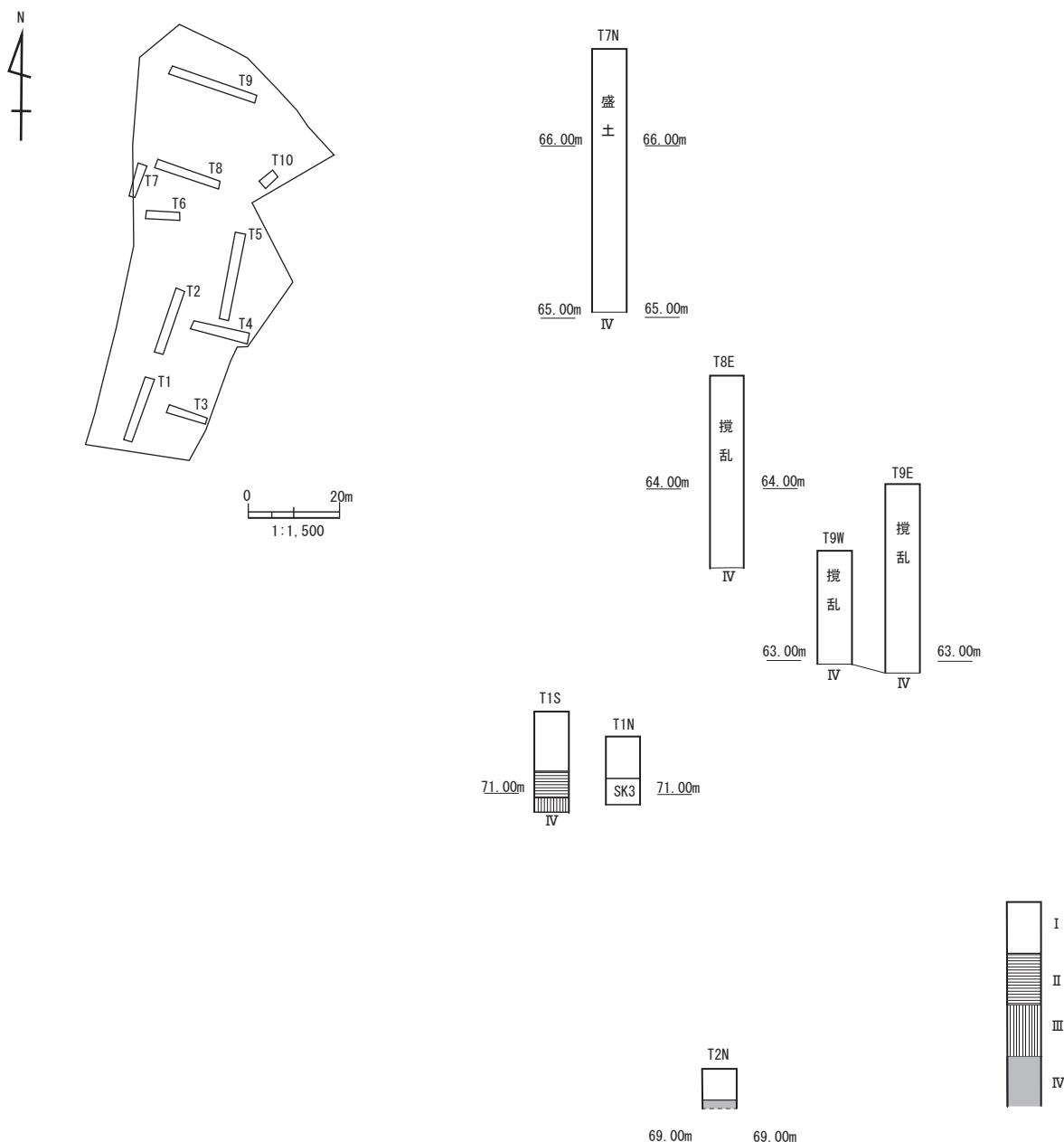


図 70 調査位置図

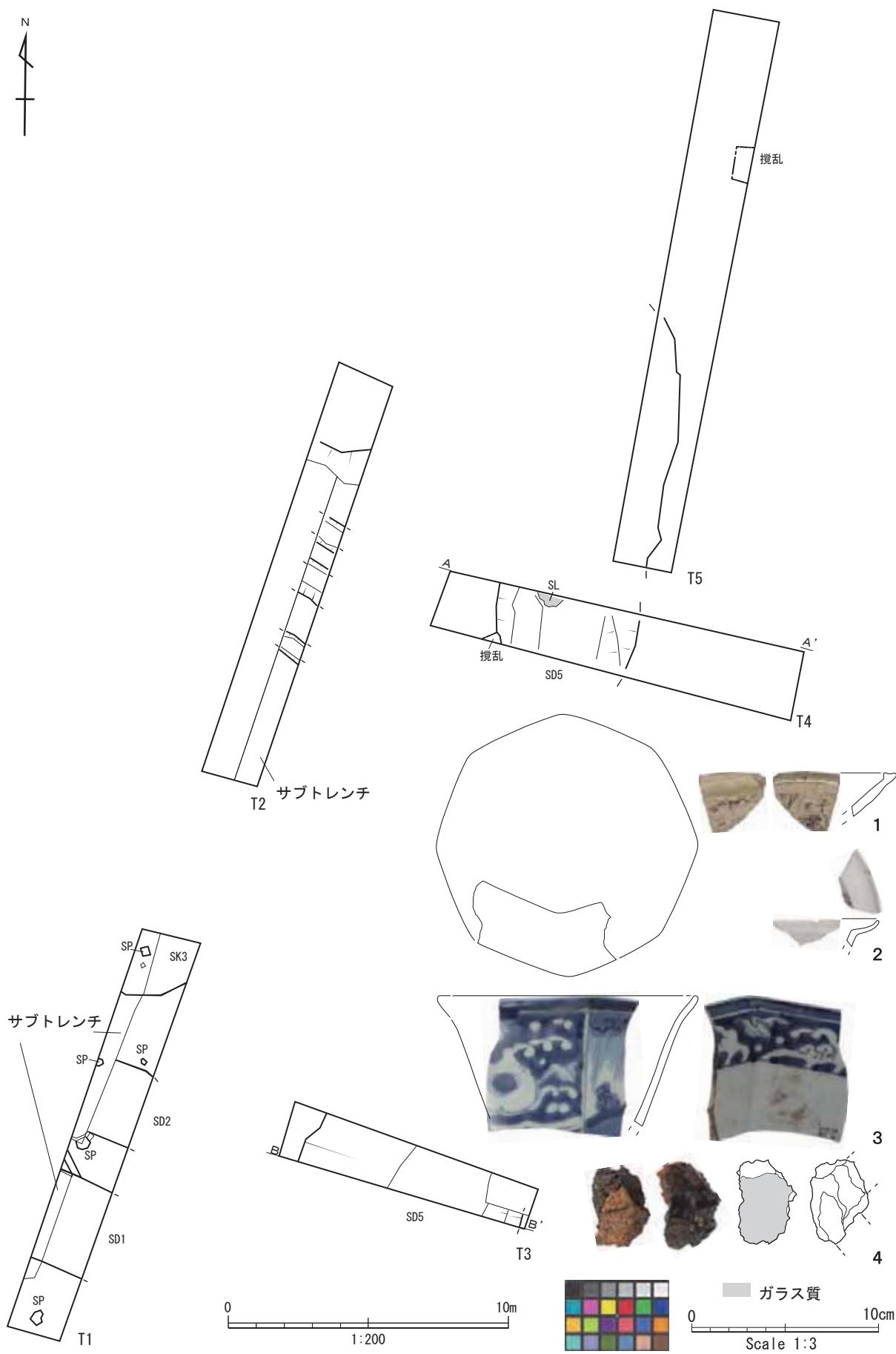


図71 検出遺構と出土遺物

## SD5

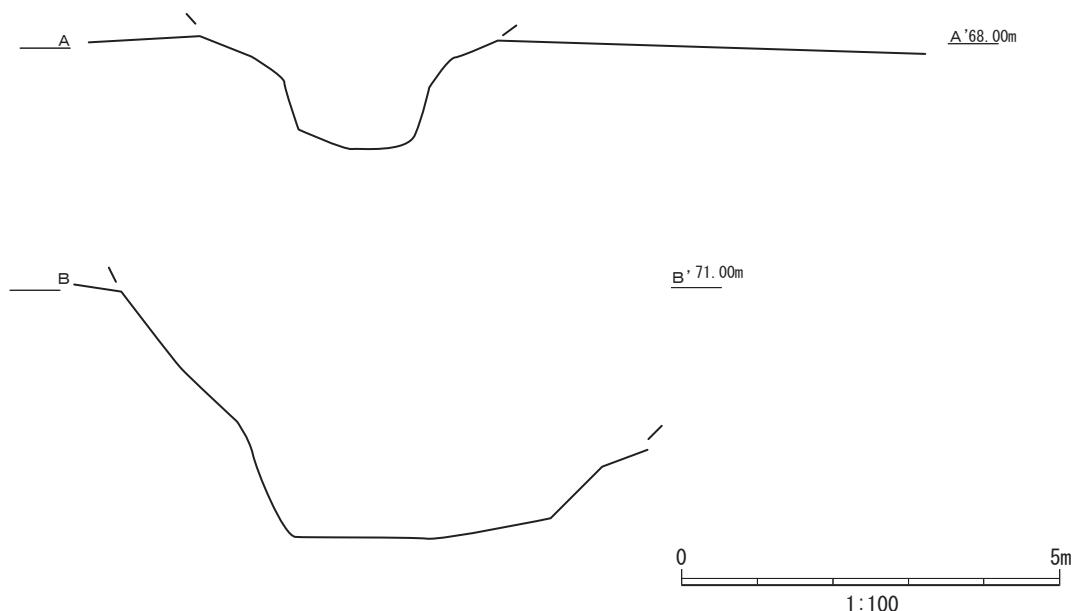


図 72 SD5 断面図

表20 種別遺構一覧

溝	堀	土坑	柱穴様 ピット	計
2	1	1	7	11

表21 遺構計測一覧

遺構 種別	遺構 番号	規模			長軸方向 N-W	トレンチ
		確認面(m)	底面(m)	深さ(m)		
堀跡	SD5	5.3	×	—	3.6	TR 3~5

表22 出土遺物一覧

調査区遺構	P		C	S	計
	7	8			
SD5		1			1
TR1	9	1		1	11
TR2	1				1
TR3			1		1
TR4		1			1
TR5		1			1
TR7		2			2
TR8		1			1
TR9		1			1
表採	6	3			9
計	16	11	1	1	29

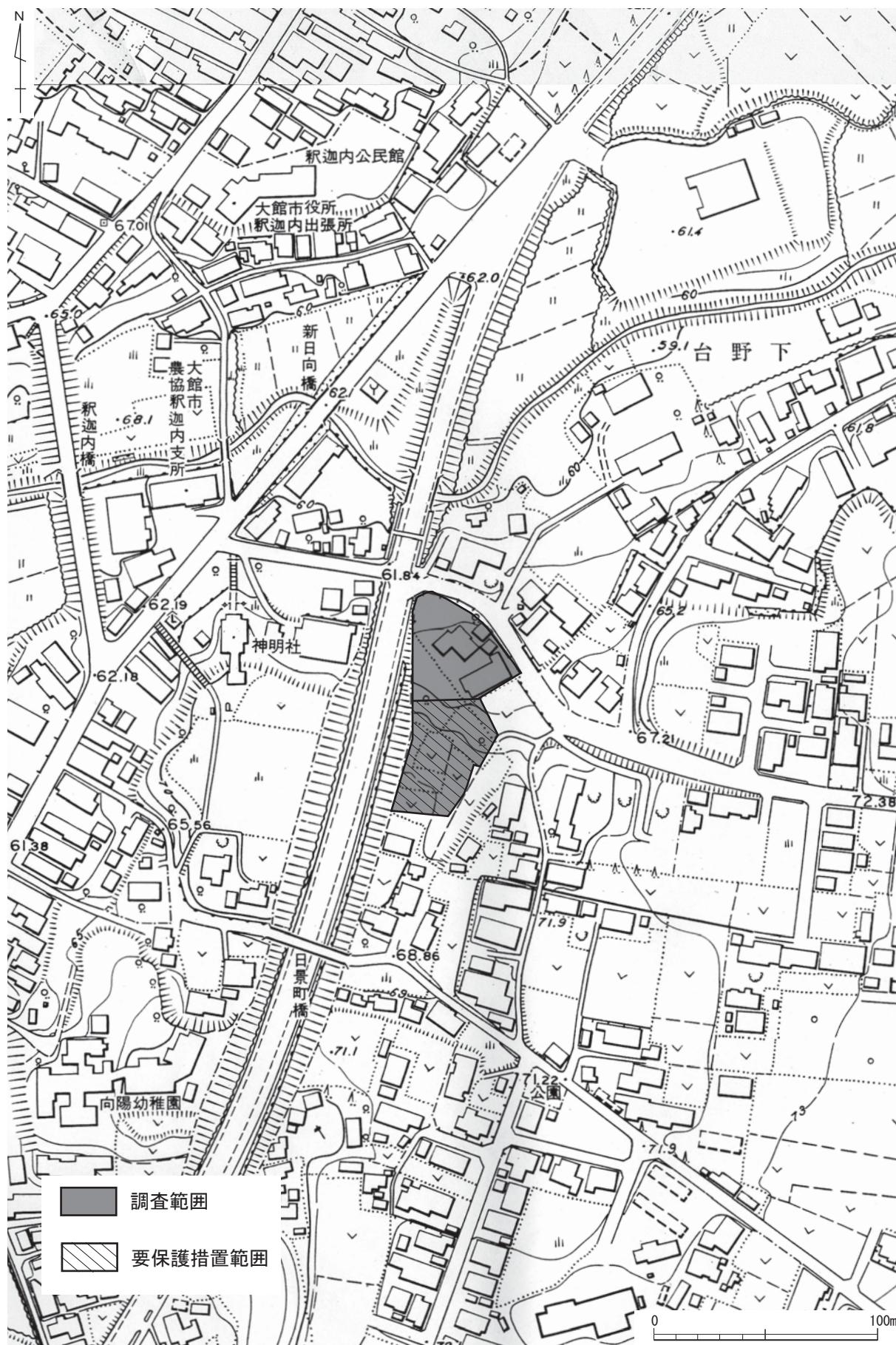


図 73 調査結果図 (1 : 2,500)



遺跡近景



作業状況



T1



T3



T4 SD5



T5 SD5検出



T8



T9

図版 24 調査状況

## 16 大館城跡⑤（個人住宅新築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館城跡の位置と周辺の環境については、第2章2で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度16分19秒、東経140度34分1秒（世界測地系）、標高は71mである。今回の調査地は、宅地で江戸時代には本丸東隣の屋敷地部分に該当する。享保13（1728）年の大館絵図によれば、前小屋弥忠太の屋敷地の一角にあたる。

### (2) 調査の内容

発掘区の設定は、平成26年度調査（2節）を踏襲し、座標の名称は平成29年度調査（10節）に準拠した。発掘区における公共座標は、-E-10区でX=30,170、Y=-22,620、A-15区でX=30,220、Y=-22,670である。今回の調査範囲はX=9～10、Y=-A～-Bである。遺跡内の基本層序は2節に準ずる。

トレーナーは、調査対象地内に任意に設定した。トレーナーの掘削は全てバックホーで行い、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査の結果、調査地内は、既存建物に伴う造成のため、旧表土等は残っていない。盛土の下は、基盤をなす黄褐色砂質土層が堆積している。今回の調査により、遺構は柱穴・柱穴様ピット18基を見出し、遺物は盛土中から近世～近代の陶磁器7点を得た。

### (3) まとめ

今回の調査の結果、遺物包含層は消失していたものの、トレーナー内から柱穴など大館城内の屋敷跡を構成するとみられる柱穴などの遺構が確認された。

したがって、今回の調査地については、保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、遺構を掘削する場合は発掘調査が必要と判断した。

その後、工事内容を変更し、住宅建設部分については盛土施工をして遺構は保存されることとなった。なお、平成30年6月18日～7月10及び10月12～13日、11月2日に、事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

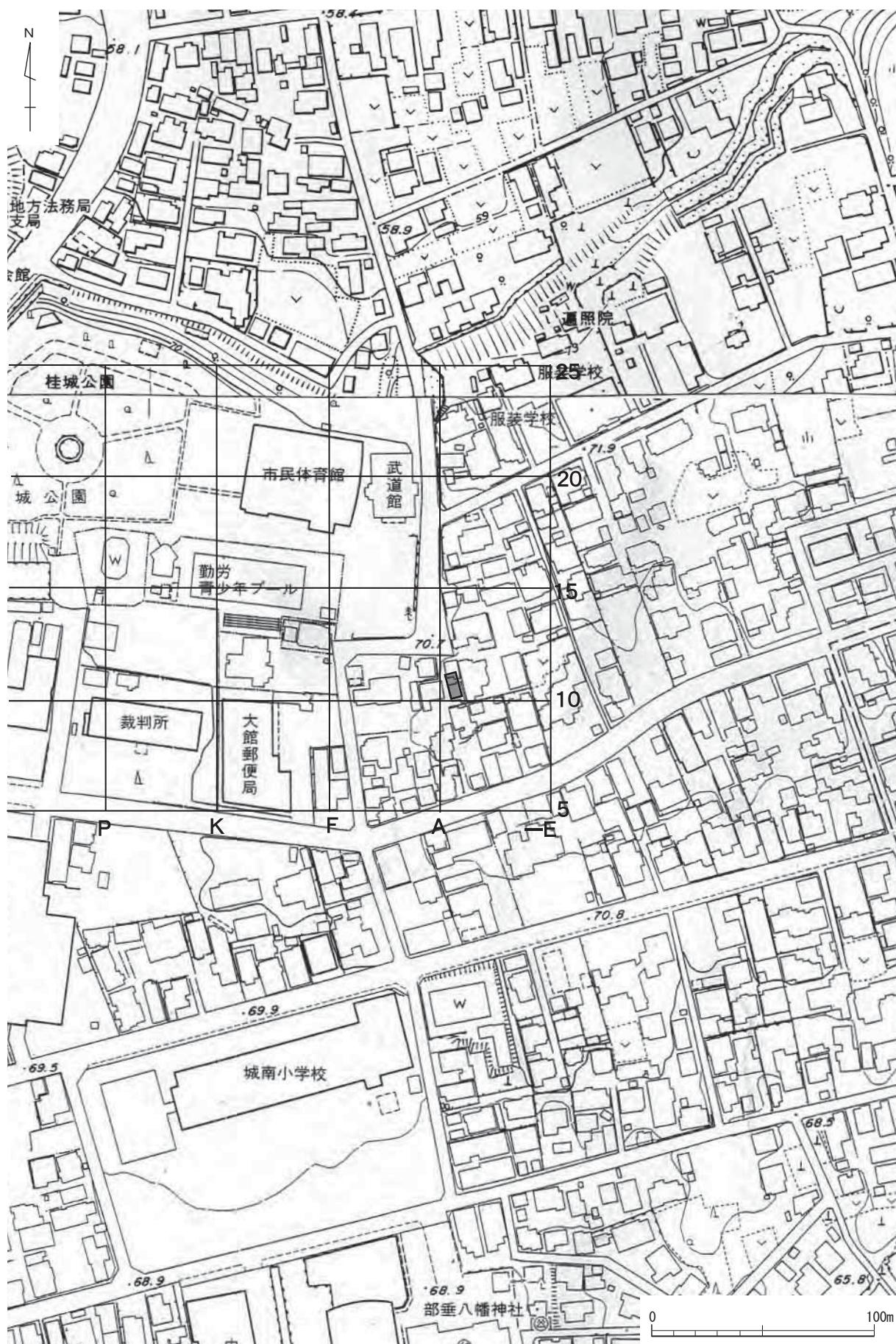


図 74 調査地区と周辺の地形 (1 : 2,500)

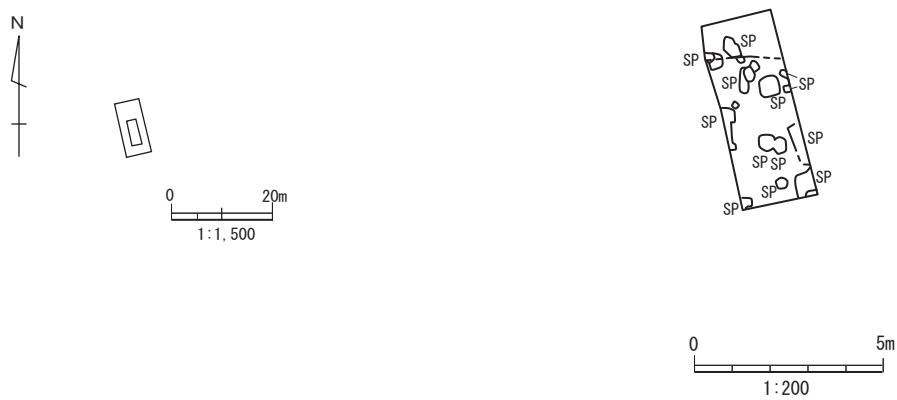


図 75 調査位置図と検出遺構図



調査地遠景（北から）



重機による掘削（南から）



作業状況（南から）



遺構検出（南から）

図版 25 調査状況

## 17 花岡城跡・神山遺跡（個人住宅新築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

花岡城跡・神山遺跡は、大館市北部の大森川と花岡川が合流する地点の南西に位置する広大な台地上に所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 19 分 12 秒、東経 140 度 33 分 10 秒（世界測地系）である。標高は 81m である。

遺跡の南西側には、平安時代～中世の遺跡である松峰遺跡、北側にも縄文時代晚期～中世の遺跡である七ツ館跡が所在する。

### (2) 調査の内容

事業者の要望により、トレーニングは、調査対象地南側隣接地内に任意に設定した。トレーニングの掘削は全て人力で行い、遺構・遺物の有無等を調査した。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす黄褐色土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I 層 表土および盛土。

II 層 黒色を呈する腐植土層である。

III 層 黄褐色を呈する土層。

今回の調査により、時期不明の柱穴様ピットを 1 基検出し、遺物は得られなかった。ピットは埋土から判断すると、I 層からの掘り込みとみられるため、近代以降の可能性が高い。

### (3) まとめ

今回の調査の結果、中世以前の明確な遺構は発見されず、遺物も出土しなかった。したがって、保護措置は工事立会等の軽微なものが妥当と思われる。なお、平成 30 年 7 月 30 日、8 月 17 日、11 月 5 日に、事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。



図76 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

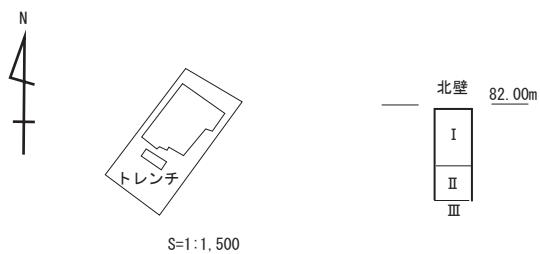


図 77 調査位置図



調査地近景（南から）



調査地近景（北東から）



完掘（南東から）

図版 26 調査状況

## 18 金坂遺跡（個人住宅新築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

金坂遺跡は、長木川左岸の台地上に所在する。遺跡の位置は、北緯40度16分25秒、東経140度34分8秒（世界測地系）である。標高は74mである。

遺跡のある金坂町は、秋田氏支配の慶長6年（1601）頃には代官所が置かれていた場所である（「秋田実季侍分限」）。調査地は、佐竹氏の移封後は、大館城の外堀東部に面しており、佐竹西家家来の羽生氏が代々居住していた屋敷地の一角にあたる。享保13（1728）年の大館絵図によれば、羽生縫殿進の名が見える。

遺跡の南西側には、近世の遺跡である大館城跡、南側には縄文時代中・後期および平安時代の遺跡である扇田道下遺跡、平安時代の遺跡である扇田道上遺跡が所在する。

### (2) 調査の内容

トレントは、調査対象地内に任意に設定した。トレントの掘削は全て人力で行い、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査地内は、既存建物の造成に伴う削平のため、旧表土等は失われていた。盛土の下は、基盤をなす黄褐色砂質土層が堆積している。

今回の調査により、近世以降と考えられる柱穴様ピットを6基、遺物は近世の磁器片を7点発見した。ピットは埋土および出土遺物から判断すると、近世の可能性が高い。

図79-1・2は近世磁器でいずれも表土から出土した。1は染付の碗で全体に灰味をおびており、呉須が淡い青色を呈する。体部外面にはコンニヤク印判で楓葉が染付される。肥前産で1690～1750年代に比定される。2は染付の皿で、見込みと体部外面に唐草が染付される。肥前産でIV期（17世紀末～18世紀）頃に比定される。

### (3) まとめ

今回の調査の結果、遺構は近世以降と考えられる柱穴様ピット6基、遺物は近世の磁器片が7点得られたのみである。したがって、遺構を掘削する場合は発掘調査が必要と判断した。

その後、工事内容を変更し、住宅建設部分については盛土施工をして遺構は保存されることとなつた。なお、平成30年12月6日・平成31年1月31日・2月1日に、事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

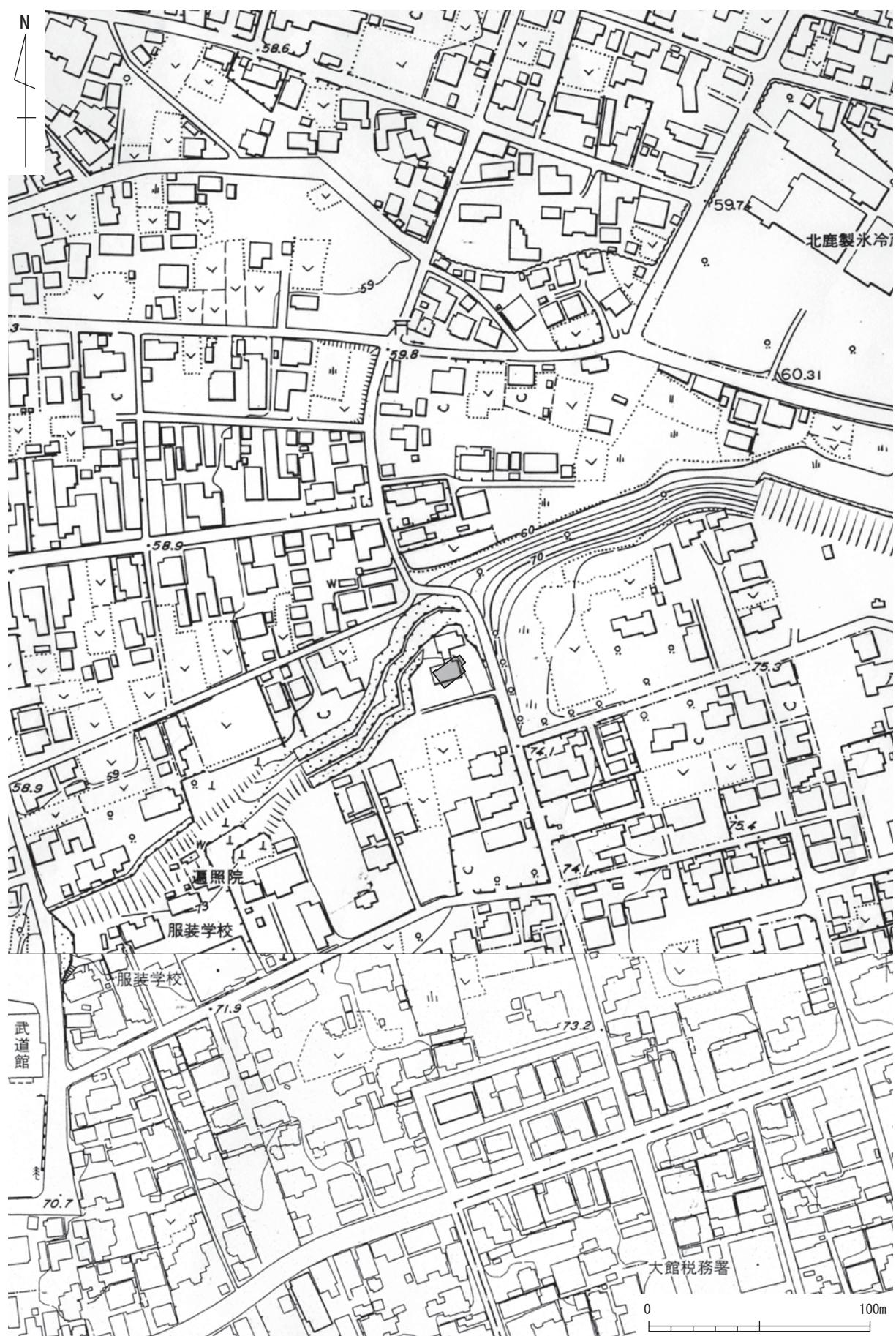


図78 調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

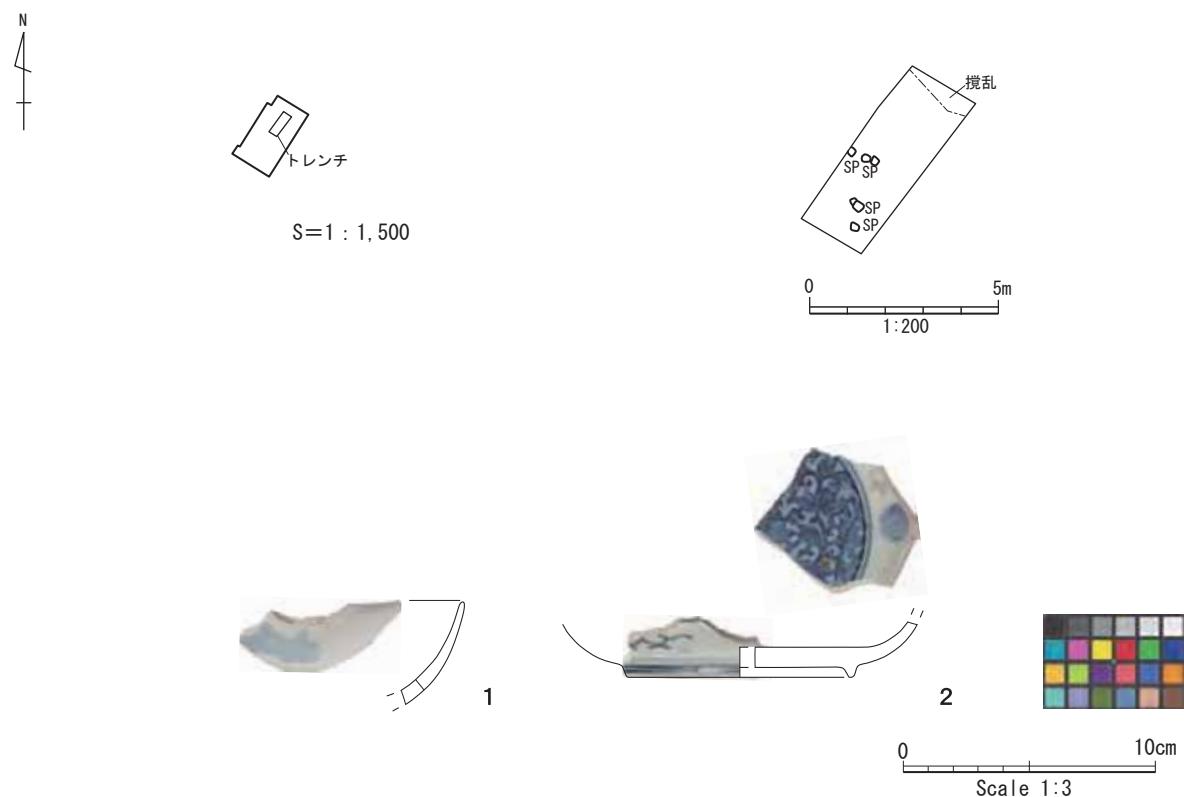


図79 調査位置と出土遺物



図版27 調査状況

## 19 大館城跡⑥（店舗敷地造成工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

大館城跡の位置と周辺の環境については、第2章2で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度16分19秒、東経140度34分1秒（世界測地系）、標高は71mである。今回の調査地は宅地で、本丸南側の内堀から西へ続く外堀とそれに面した土居部分に該当する。

### (2) 調査の内容

発掘区の設定は、平成26年度調査（第2章2）を踏襲し、座標の名称は平成27年度調査（第2章6）に準拠した。発掘区における公共座標は、AD-14区でX=30,210、Y=-22,960、AH-18区でX=30,250、Y=-23,000である。今回の調査範囲はX=14~16、Y=AD~AEである。遺跡内の基本層序は2節に準ずる。

トレンチは、調査対象地内のX軸方向に平行して設定した。トレンチの掘削は基盤層のIV層までバックホーで行い、その後人力にて精査し、遺構・遺物の有無等を調査した。トレンチの位置情報等については、有限会社小笠原測量設計事務所の協力を得て、トータルステーションで計測した。

調査の結果、調査地内は、既存建物に伴う造成のため、旧表土等は残っていない。盛土の下は、基盤をなす黄褐色砂質土層が堆積している。今回の調査により、堀跡1条、柱穴様ピット3基を発見し、遺物は盛土中から近世～近代の陶磁器14点を得た。

### (3) まとめ

今回の調査の結果、土居や近世の生活面は消失していたものの、トレンチ内から堀跡などの遺構が確認された。したがって、今回の調査地については、保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、遺構を掘削する場合は発掘調査が妥当と思われる。

その後、計画が変更され、盛土施工にし、極力遺構を掘削しないこととなり、平成30年12月5・6日に事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

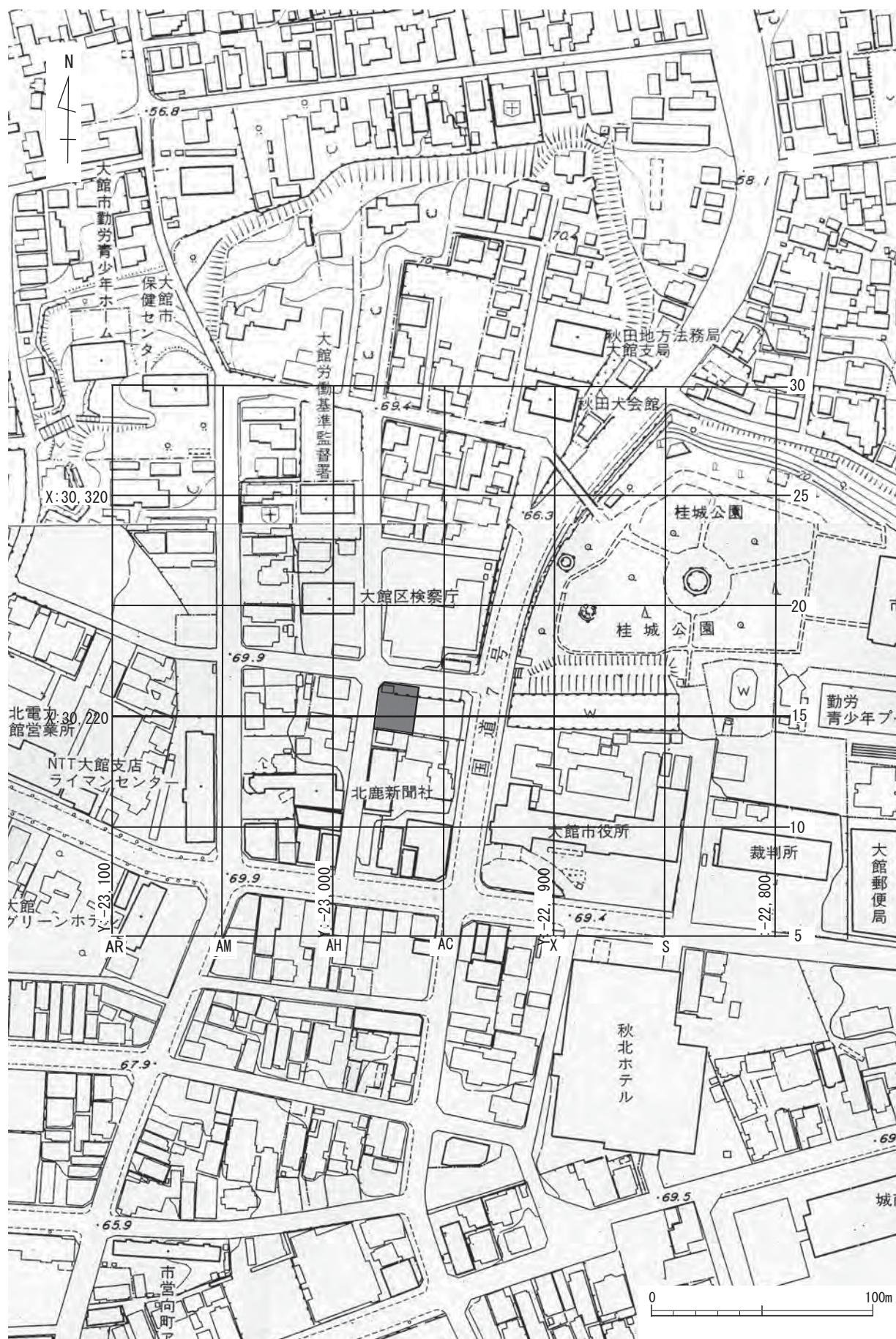


図 80 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

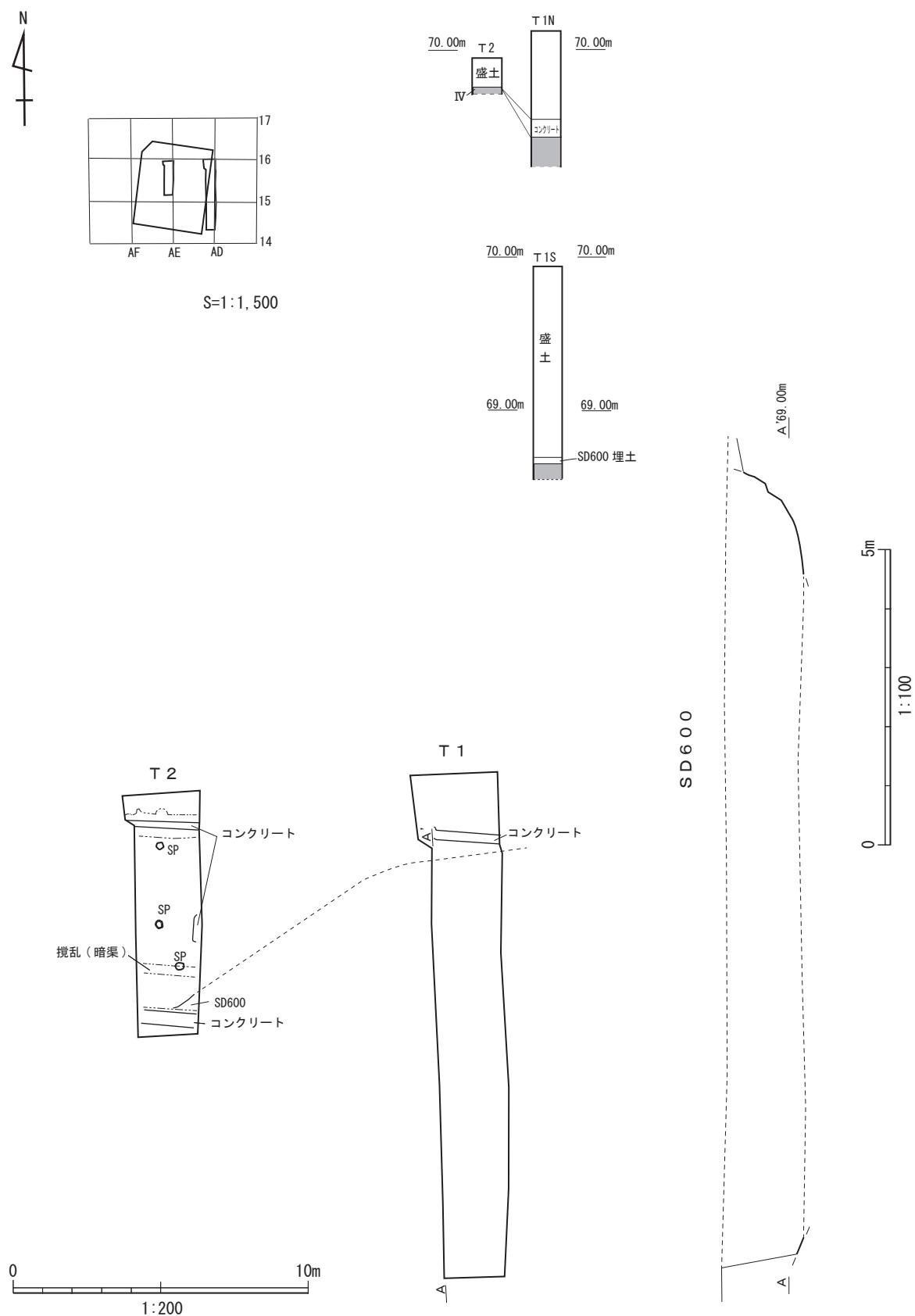


図 81 調査位置図・検出遺構図・SD600



調査地近景



作業状況



トレンチ 1



トレンチ 1 堀跡断面



トレンチ 2



トレンチ 2 堀検出状況

図版 28 調査状況

## 20 扇田道上遺跡隣接地（個人住宅新築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

扇田道上遺跡は大館盆地を横断する米代川の支流である柄沢川に面した台地上に所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 15 分 50 秒、東経 140 度 34 分 33 秒（世界測地系）である。標高は 69m である。

遺跡の西側には、縄文時代中・後期および平安時代の遺跡である扇田道下遺跡が所在する。調査地は、扇田道上遺跡の北側約 140m のところに位置する隣接地である。

### (2) 調査の内容

トレーナーは、調査対象地内に任意に設定した。トレーナーの掘削は全て人力で行い、遺構・遺物の有無等を調査した。トレーナーの位置情報等については、平板を用いて計測した。

調査地内は、近代以降の造成に伴う削平のため、旧表土等は失われていた。盛土の下は、基盤をなす黄褐色砂質土層が堆積している。

今回の調査により、遺構は確認されなかった。遺物も近世以降の磁器片が 7 点出土したのみである。

### (3) まとめ

今回の調査の結果、遺構は確認されず、遺物は近世以降の磁器片が 7 点得られたのみである。調査地は遺跡のエリアに含まれないことが判明した。



図82 調査区と周辺の地形 (1:2,500)

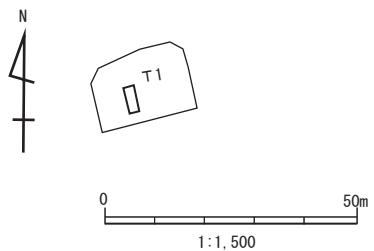


図 83 調査位置図



調査地近景



作業状況



トレンチ完掘



トレンチ北部調査状況

図版 29 調査状況

## 21 小館町遺跡（個人住宅新築工事）

### (1) 遺跡の位置と周辺の環境

小館町遺跡は米代川と長木川に挟まれた大館段丘の南西縁に所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 15 分 40 秒、東経 140 度 33 分 15 秒（世界測地系）、標高は 63m を測る。

周辺の遺跡として平安時代の土師器ならびに中世の空掘が確認されている小館花館跡や太平山遺跡が知られている。

### (2) 調査の内容

トレントは調査対象地内に任意に設定した。トレントの掘削は表土からⅢ層直上までをバックホーで除去した後、Ⅲ層までの掘削及び精査は人力で行い、遺構・遺物の有無、包含層の残存状況等を調査した。

調査区域内は、かつて耕作地であったとの話があり、地表下約 40～50cm の厚さまで旧耕作土と思われる黒褐色土が堆積していた。また、その下位には黒ボク層が地山層の直上まで堆積している。しかしトレント内の北西方向部分、3 分の 1 ほどは搅乱が及んでおり、Ⅲ層は検出できなかった。基本層序は以下のとおりである。

I 層 表土及び耕作土

II 層 黒色を呈する腐植土層で、本来の遺物包含層である。締まりやや有り。粘性なし。

III 層 黄褐色ローム層で、地山層。

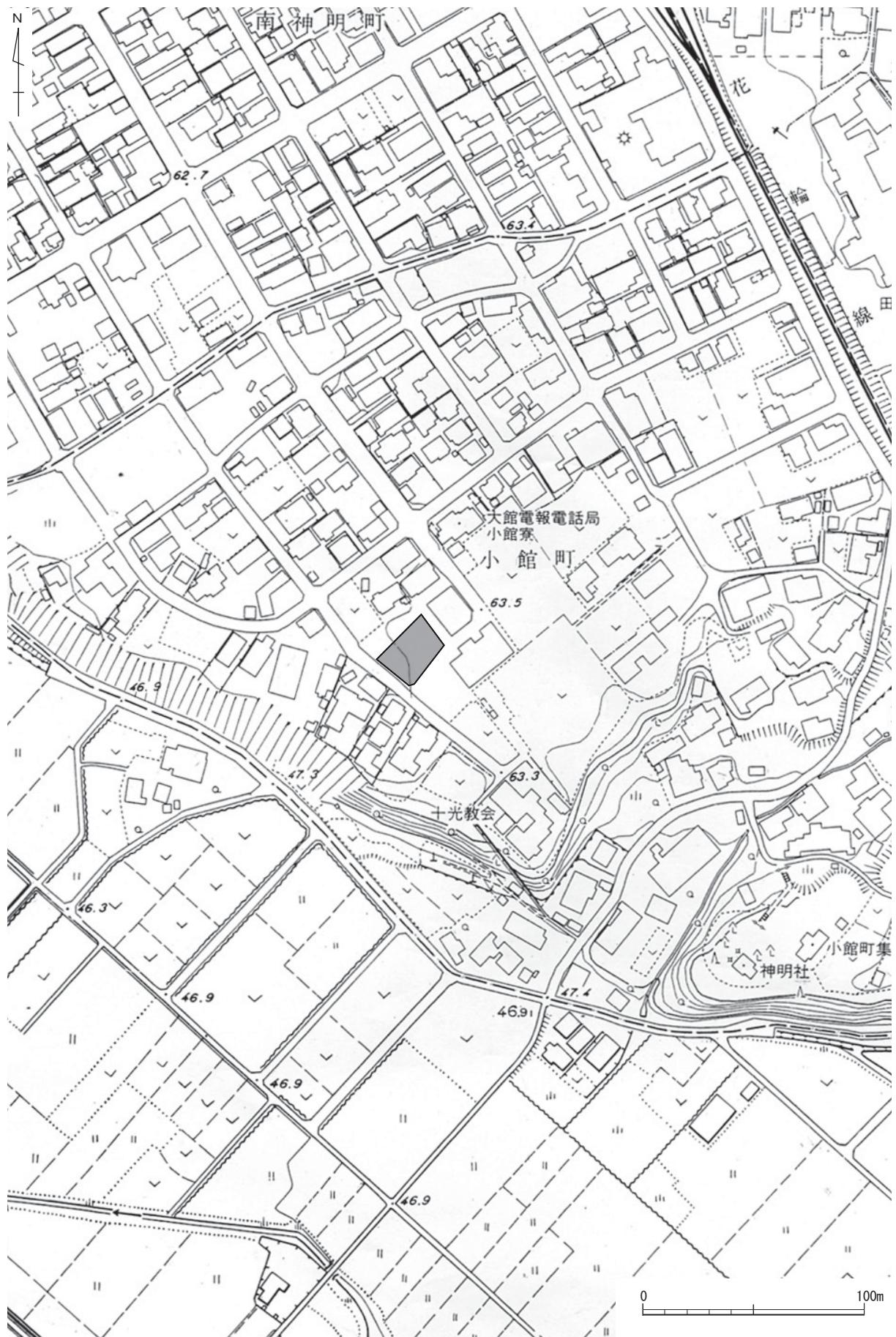
今回の調査により、遺構は時期不明のピットがⅢ層中より 1 基確認されたが、ピット内より遺物は出土しなかった。遺物は縄文土器片が II 層中から 1 点、搅乱層中から 3 点出土したのみである。遺物包含層に含まれる遺物は散発的である。

図 85-1～3 は、口縁部の特徴等から 3 群 4 類の円筒下層 d 式に分類されると考えられる。1 は口縁部破片で、口縁部と口縁端部に縄線文が施される。2 は胴部破片で羽状縄文が施される。3 は底部に近い部分で、単軸絡条体回転文が施される。いずれも内面はミガキで同一個体の可能性がある。

### (3) まとめ

今回の調査の結果、遺構は時期不明のピットがⅢ層中より 1 基確認されたのみである。遺物は縄文土器片が 4 点出土したが、遺物包含層は一部残存しているものの、遺物は散発的である。事業者より提出された設計では、住宅基礎に伴う掘削は地表下から 50cm ほどの予定であり、基盤層まで到達しないことから、保護措置は工事立会等の軽微なものが妥当であると思われる。

なお、平成 31 年 1 月 9 日に事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。



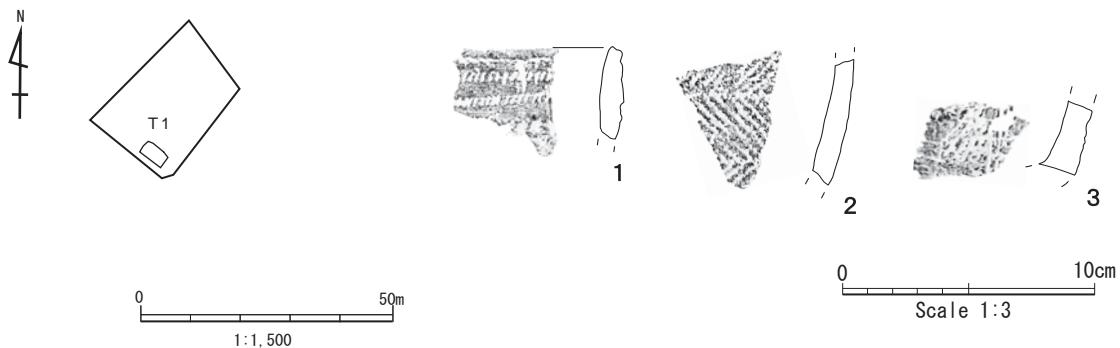


図 85 調査位置と出土遺物



小館町遺跡近景（西から）

完掘状況（南東から）



柱穴様ピット半截状況（南東から）

出土遺物

図版 30 調査状況と検出遺構、出土遺物